

にも尤もらしい顔付きで濟まして居るが、其の内實は東南アジアに於ける佛國の勢力を抑え、南支那への侵略路を得る根據地として、弱者の肉を蹂躪したるものであるから、其の圖々しさには全く呆れ返へる。

唯だ單に自己の利慾を満足させ様とするのが、其の動機の全部であり、然も自分が勝つにきまつて居るかから挑みかけた戦争である。誠に金もかゝらず、人命を損傷することも極めて少なく、而も得る所が頗る多い經濟的な戦争であると云ふ事を、チャンと算盤玉を弾いての仕事である。大義名分に則り、已むに已まれず、利害得失等は全く之を度外視して戦はうと云ふ、我等日本人の考へからすれば、逆も了解出来ない斬取り強盜に類する戦で、此の様な戦争の爲めにビルマ人は愛する祖國を失つたのである。

然し如何にビルマ人がお人好しであるとは云へ、次々に脚を切られ、胴體を振切られ、頭迄も叩き潰されて、揚句の果ては彼等の敬愛する國王は、捕虜としてボンベイ南方の孤島に幽閉されると云ふ惨めさであるから、もう我慢がならぬ。反英思想が勃然として、胸底深く燃え出したのも無理ではない。

即ち一八八五年の末全ビルマ領有の野望成ると共に、英國は之を英領印度の一州として併合するや、ビルマ人の抗英分子は直ちに潜行的な活動を開始した。到る處抗英ゲリラ戦が頻發する。反英テロ團の英人排斥が行はれる。流石の駐屯英軍も之が討伐の爲めに、奔命に疲れる状態であつた。

無辜の住民は屢々虐殺の厄に遭つた。官憲の壓迫に反抗して起つたビルマ人の集團は、暴虐な英兵の機關銃掃射の的となつて殞れた。斯くて數次に亘る討伐、鎮壓の結果領内の秩序が稍々安定するや、英國は或は

洋風都市を建設し、又は鐵道を敷設する等、連りに文化工作を行つて英人の優越性を誇示し、ビルマ人を威壓する策を採つて人心の安靜、秩序の維持に努めたが、而も之等施設に要したる費用は、或はビルマ王室より強奪したる金銀財寶を以てし、或は又ビルマの富源開發によつて搾取したる金を以て充當したのである。

例へばビルマの王室には、時價數百萬ルピーと稱せられた拳大の優秀なサファイアを所藏して居たが、英國の強奪に遭つて倫敦に送られて仕舞つたし、又有名な巨利に祀られた佛像の頭飾として鑲められて居た大きなダイヤモンドは、英國のビルマ領有と同時に、本國へ何時の間にか移されて仕舞つたのである。

白人露西亞を打倒して、一躍世界の外交舞臺に躍出したる日本の颯爽たる姿は、有色人種の爲めに萬丈の氣を吐いたものであつた。胸中悶々の不平を持ち乍ら、止むなく一時雌伏の餘儀なき立場にあつたビルマ人の祖國解放運動は、之に刺激されて恰も燎原の火の如く、次第に根強く氣運が醸成されて行つた。

英國はビルマ人の獨立運動熱を冷却せしめんとして、或は強硬政策を執つて彈壓し、或は懷柔政策によつて僞瞞せんとする等、あらゆる方策を廻らして鎮定に努めたが、彼等の祖國解放運動は容易に矛を收むるに至らず、次第に幾度かの政治的讓歩の後、一九三七年（昭和十二年）以來ビルマを印度より分離して、英國領有下の一自治植民地たらしむるに至つたのである。即ち現在はビルマ總督が英國皇帝の名代として、ビルマの統治權を代行し、總督の補佐機關として内閣を置き、上下二院制の議會を設けて居るが、總督の絶對權力は依然として變りがない。特に軍事及び外交の權は全く英人總督の手中にあり、ビルマ人の内閣は唯だ内

政に與るに過ぎない状態である。地方行政は全國を八州に分ち、東北の高原地方シャン・ステートのみは封建的な土侯によつて、更に幾區域かに分割されてシャン聯邦を組織し、英國官吏が州長官となつて統率して居るが、其他の七州では英國人の州長官が全權を握つて治めて居る。

一、ビルマ人の祖國解放運動

英國のビルマ統治は徹頭徹尾弱肉強食、壓伏制御の高壓政治で始終して來たのである。英國人は過去幾十年に亘る統治の間、ビルマ人が衷心感謝する様な親切は、殆んど片鱗だも示さなかつたと云つても差支へな

い。即ち内閣では總理大臣及び各國務大臣はビルマ人から選任せられるので、完全なる國民政治が實施されて居る様であるが、肝腎な國防省のみは總督の直轄に屬して總理大臣の權限外にあり、軍事と外交に關しては一人のビルマ人をも干與せしめず、總て英國官吏の手で處理される。

次に議會は上院議員三六名の中、半數の一八名は總督の推薦にかゝり、他の一八名は下院議員中より選舉せられる定めであり、又下院は議員數一三二名にして、總て國民の投票によつて選出されるのであるから、一見國民と政治とは密接に結合されて居る様であるが、事實は甚だしく違つて居て、全ビルマ人の六

五%を占める第一黨が、絶対に英國と協調せずとの黨是によつて悉く棄權し、干與しないことを好い事にして、政府が残りの小政黨を買収し、妥協政治で表面を糊塗して居るのであるから、議會は決して國民大衆の意志を反映して居るものではない。

何しろビルマの滅亡は近世の事で、其の記憶も生々しいだけに、ビルマ人の民族的反撥力は英吉利の苛烈なる彈壓にも拘らず、熾烈な勢ひで燃え續けて居る。英國の巧みな之等の偽瞞政策も、近年目覺めたるビルマ人に對しては何の效目もない。唯だ惜しい事にはビルマには國民を指導統率する人傑に乏しい結果、幾度か起ち上る獨立運動も、徒らに暴動を起すだけで散發に終つて居るのであつて、此の點はビルマと印度では土地を接して居るが、兩者では大變な相違である。即ち印度では滅亡して年既に久しく、三世紀の長い期間英國の植民地となり、其の爲めに民族的精神が消耗して、一般大衆は個人主義となり、階級關係が相錯綜して一致團結を缺き、指導者に相當な人物を得ながら容易に獨立を期待し得ない状態であるが、之に反してビルマ人は、傑出した指導者を得て統率宜しきを得たならば、完全に獨立し得る可能性を十分に存して居るのである。

然し幾度か祖國の解放を叫んで起ち上るが、其の都度英國官憲の壓迫に遭つて潰されて仕舞ふ。時には暴虐なる英兵の機銃の一齊掃射によつて、良民暴徒の別なく幾千の犠牲者が累々たる死屍を道途に横へる。抗らへば殺され、従へば搾取される。之ではビルマ人も迎もたまつたものではない。之等の事からビルマでは

一部の農民は自暴自棄となり、土地を抵當として英人や印度人から金を借つて浪費し、随つて住民生活の本據たる農耕地が英人、印度人等外國人の所有に歸して、デルタ地方では肥沃なる米産地の七五%迄が、ビルマ人の手から離れ去ると云ふ慘めさである。

所が英人や印度人の地主達は、之をビルマ人に小作させず、多く印度農民を使用して耕作させる處から、働くに土地なき多數のビルマ人は、又々結束して暴動を起すと云ふ結果となり、斯くて滅亡以來五十餘年に亘る今日迄、ビルマは殆んど「平和の日なし」と云ふ有様で、現在彼等の憎惡と排斥は英人及び之に與する印度人、支那人にかゝり、何時かは徹底的に報復せねば止まぬと云ふ氣運が、暗黙の間に澎湃として漲つて居る。殊に最近此の氣運を點火して、益々其の氣勢を擧げる動機となつたものは今次の歐洲大戰である。「ビルマは光輝ある二千年の獨立の歴史を失つて、此處五〇餘年英國の奴隸と化して居るのである。吾等民族の胸の中には、自主獨立を要望する熱血が沸き立つて居る。英國は波蘭の自主獨立を、自國の運命を賭して迄も守らうとしたではないか。英國の波蘭に對する態度の片鱗でも、英本國はビルマに向ける程の親切は無いのか。本國は須らく吾等に自由を與へよ！」と、烈々たる獨立の精神を燃やし、戦局が次第に發展して英國の敗退が殆んど決定的となつた今日を以て、ビルマの民衆は祖國解放の爲めに千載一遇の好機とし、年來の宿望達成の爲めに着々精進を續けて居るのである。

更に此處に見逃してはならぬ事は、嘗つて滿洲事變後英、米、佛等の諸國が國際聯盟を總動員して、日本

壓迫に躍起となつた時、我が國が敢然之を斥けて遂に滿洲國を獨立せしめ、爾來常に其の發展を助けて、今や不動の國基を鞏くするに至つたが、此の生々繁榮しつつある滿洲國の姿こそは、實にビルマ人の羨望の的であつて、彼等は日本の威力を知ると同時に其の信頼も一段と加はり、ビルマも亦日本の力によつて英國の桎梏を脱し、ビルマ民族の樂土を建設せんとする熱望が勃然と燃え盛つて居ることである。

想ふに大東亞共榮圈を確立して、東洋永遠の平和を確保せんとする爲めには、單に日、滿、支の結合のみでは決して完全なものではない。宜しく廣く南洋方面をも打つて一丸としたる、互助共榮圈を樹立せねばならぬ。之ぞ東洋永遠の平和確保の爲めに、東亞の盟主たる日本帝國に課せられたる最大の任務である。而して南方經綸の問題は一にして足らずと雖も、先づ以て援蔣ビルマルートを完全に封鎖して、抗日重慶政權を打倒し、事變處理の完遂を圖る爲めに、ビルマ人と結ぶ事は刻下の急務の一つであらう。英國の重壓下に喘ぎつゝも、尙ほ日本の偉力に信賴して縋りつかんとする彼等ビルマ人、吾等日本人と同じ民族の血に繋がる彼等の、瘦せ衰れたる憐れな手をしつかり握つてやる事は、誠に正義の國日本の武士道である。斯くてビルマ人が大東亞共榮圈の西方生命線を確保し、マラッカ海峡が我が關門海峡となり、シンガポールが我が下關となり、南支那海が我が瀬戸内海となる日にこそ、眞に東洋永遠の平和が確立される事であらう。

一、援蔣滇緬ルート

援蔣滇緬ルートは三條の公路から成つて居る。即ち第一はマルタバン灣の海口ラングーンから、ラシオ迄

九二〇軒の鐵道を利用し、ラシオより國境を越えて昆明に至る自動車道路で結ぶもの、第二はラングーンと昆明を結ぶ幅二〇米、全長一九三〇軒のアスファルト自動車道路、第三はラングーンからイラワディ河を溯航してバモを経由、昆明に至るもので、昆明からは更に貴州省の貴陽を経て重慶に連り、此處に揚子江と印度洋とは完全に結ばれる結果となる。滇は雲南省の略稱、緬は緬甸の頭字、公路は英語のハイウエーの翻譯で自動車道路を指すのである。

元來ビルマを経て支那の奥地に入る道は、既に古く二〇〇〇年も前から開けて居り、東西兩洋を結ぶ交通路として、ローマ帝國の使節も此の道を通過したる形跡があり、七〇〇年の昔マルコ・ポーロが元國への道すがら、驢馬に跨つて踏破したのも此の道で、常に重要な役割を果して來たのであるが、其の後海路支那に渡る道が開けてからは、此の道は「裏街道」として時に隊商の通過を見るのみ、山路崎嶇たる處、茅や荆棘が道を塞いで全く荒れ果て、居たのである。

所が今次支那事變が勃發して、總ての海港が皇軍の手によつて封鎖せられると、今迄の此の「裏街道」は援蔣物資輸送の公路として、俄に「表街道」へ躍出する様になつて來た。抗日支那の交通部では早くから此の狹隘な隊商路に着眼して、之を援蔣輸血の大動脈として近代化させる爲めに、全力を擧げて築路工事に取り掛つて居たが、其後時局が進展するに伴れて愈々必死となつて工事を進め、遂に昭和十三年には昆明からラシオに至る約一千餘軒の滇緬公路を、無理矢理に完成せしめたのである。

然し元來雲南の西部地方一帯は、「世界の屋根」に續く高山峻嶺の蜿蜒する處で、南北に縦走する海拔三千米以上の大山脈が重疊して居り、其の間には之を縦に縫つて無數の深い溪谷が形成されて、削り立てたるが如き斷崖絶壁を洗つて、怒江、瀾滄江等の激流が奔騰して居る。随つて此の峻峻の地を迂餘曲折する自動車道路は、時には傾度一〇〇分の一八にも及ぶ急坂があり、又時には半徑五米に達する急カーブの處もあつて、昆明から國境の街曉町迄直線距離では僅々五一〇軒に過ぎないものが、自動車道路では實に二倍に近い九七三・六軒にも上つて居るのである。

近代式の鋪裝路が或は溪流に沿つて山腹を縫ひ、或は又吊橋を架して溪深き險難の處を通じて居るが、其の橋の數だけでも昆明からラシオ迄の間には、優に七〇〇を算へると云ふのであるから、如何に此の公路が難工事であつたか判る。抗日蔣政權の發表によると、總工費一千八百萬元、動員したる人夫の數は二〇萬、構築の間に或は岩盤に打たれ、或は土砂に埋められる等、不慮の災禍に命を殞したるものが二千餘人にも上ると云ふ。山腹にシャベルを持つた苦力の大群が、夜に日をついで動物の様に驅使せられ、鞭打たれ、疲れたからだを無表情に黙々と動かして居る様子が、目に映る様に想像されるのである。

斯くて全線が開通すると、其の輸送機關として三噸積みのトラックが約一五〇〇臺も常置されて、一日平均二臺のトラックと三人の人命とが、犠牲にされ續けて居たと云ふのであるから、如何に死物狂ひの輸送が行はれて居たか、想察出来る。ラングーンの海港に陸揚げされた武器、彈藥、ガソリン、或は鐵道資材等

は、山と積まれてドシ／＼昆明に送られた。米國向けの錫やタンゲステン、桐油等は返り車に同じく山と積まれて、ラシオに運び出されて來たのである。

新東亞建設の大業樹立に邁進しつつある日本としては、英米の斯かる敵性發揮は斷じて容認し得るものではない。そこで我が政府は直ちに援蔣行爲禁絶の嚴重なる抗議を英國に提出した。折柄歐洲に於ける獨逸との敗戦によつて戦線から落伍したるフランスが、佛印ルート閉鎖に同意した事實に引き摺られて、英國も濫濫ながら日本の要求を容認し、三ヶ月の期限付でビルマ・ルートの閉鎖に同意したのであるが、之は恐らく三ヶ月も経てば、國際關係を自己に有利に轉換し得られるとの見込からであつたらう。

所がさて三ヶ月経つた。蔣政権からは連りにビルマ・ルートの再開を泣きつかれる。背後からは米國に怒鳴られる。獨逸軍の英本土上陸作戦が延びて居る事態に氣を取り直した英國は、頓に自暴自棄的な強氣になり、米國と組んで日獨伊同盟成立に對する報復的共同戦線を結成し、ビルマ路線の再開を斷行して蔣政権の抗戦力を強化し、同時に日本恫喝の効果を大に擧げ様とかゝつたのである。

日本は舉國犠牲を拂つて蔣政権の打滅進軍を續けて居る。彼が抗戦力を強化する行爲は、何れの國と雖も斷じて許さない。そこで昭和十五年十月ビルマ・ルート再開の事あるや、我が荒鷲隊は直ちに出勤して爆彈の雨を降らせ、メコン河に架せられた功果橋、サルウィン河の惠通橋を始めとして、重要な橋梁を次々と撃落して、實力を以て公路の遮斷を強行し、英米の援蔣行動に斷乎たる鐵槌を打ち下したのである。斯くて世

界の視聽を聳てしめた滇緬ルートも、再開と同時に死滅の危地に陥つて、ラングーンの埠頭に山と積まれた援蔣物資は、倉庫に露天に、依然として埃りを浴びた儘に棄てられて居るのは、誠に笑止千萬な次第である。

一、援蔣の關門ラングーン

マルタバン灣の灣頭、イラワディ河の一支流を溯ること約五〇籽の處に、此の國第一の貿易港で、全國輸出入の約八割五分を吞吐すると云ふ首都ラングーンが榮えて居る。

今から約九〇年程前迄は一帶にマングローブ樹の生ひ繁れる河畔の低濕地で、貧しげな土人の漁家が點在するに過ぎない極めて淋しい處であつたが、一八五二年英吉利が此の地を領有するや、老獺な英國人は白人の優越性を誇示して無智な土人を壓伏する爲めに、盛んに土木を起して洋風都市を建設し、全土統治の中心地としたのである。人口約五〇萬、新しい都會であるだけにビルマ人よりは印度人の方が多く、市内には印度語が幅を利かして、全く印度の延長と云ふ感じである。在留支那人は約三萬人に達するが、何れも英當局のデマ宣傳に躍らされて反日色が頗る濃厚であり、在留邦人は約三百人で、全ビルマ國內に在留する邦人約五百人の大部分が此の地に住んで居る譯けであるが、執拗な華僑の排日や、意地惡な英國當局の反日政策に邪魔されて、思ふ様に驥足を伸し得ないことは誠に残念である。

更にラングーンは又援蔣ルートの關門として、今日世界の視聽を集めて居る處である。昭和十三年廣東、

武漢が相次いで陥落したる直後の十一月、英國汽船スタンホール號が突如ラングーンに入港した。同船はソ聯邦のオデッサ港からソ聯製の飛行機を始め、各種の武器を腹一杯に詰め込んでラングーンに到着し、援蔣武器は英國官憲の嚴重なる立會の下に、イラワディ河汽船會社の船に積み替へられて奥地へと運ばれたのであるが、實に此の秘密の船こそは、援蔣ビルマの扉を開いた最初の船である。斯くて此のニュースが新聞電報となつて各地に傳はると、俄にビルマ・ルートの名は世界の關心事となつて來たのである。

何しろ水量豊富なイラワディ河に臨んで、一萬噸級の汽船でも樂々とラングーンの埠頭に横着けとなる程であるから、援蔣輸血路の關門としては誠に申分がない。山と積まれた百貨は此處から、汽車により、トラックにより、或は汽船によつて、盛んに昆明指して運ばれる。殊に此處から北行するビルマ鐵道は、一八七七年（明治十年）に建設された一米幅の狹軌であるが、ラングーンからマンダレーに至る主要幹線の外に、マンダレーから東行してラシオに至る線と、北上してバモ、ミットキーナに到る線とがあり、總延長約四千軒、佛領印度支那からする滇越線が山嶽地帯を走つて居るのに比して、廣大な平野を海港と繋いで居るだけに、百貨の輸送能力は極めて大きい。

市内の山の手には總督官廳を始めとして官衙學校等の大建築が多く、又河に面した港區には商館、店舗が櫛比して股賑を極め、其の間には美しく舗装されたる近代式の街路が規則正しく縦横に走り、アカシヤの街路樹は氣持のよい綠蔭を作り、熱帶列日の直射の下に、白く光る路面にクッキリと黒い影を投げて居る。

更に市内で特に目立つものは、到る處に建てられた宏壯なる佛塔、僧院で、中にも市街の北部ローヤル湖の西方丘上に、高く雲を衝いて聳え立つシュエ・ダゴンの大佛塔の如きは、宏大壯麗ビルマ第一の名高く、朝日夕陽に照り映ゆる其の壯嚴なる姿、絢爛と豪華を誇る内陣や佛像の有様は、踵を接する信心深いビルマ人參拜者の群れと相俟つて、旅行者を驚嘆せしめ、流石に佛教盲信の國と首肯せるものがある。

尙ほイラワディ河の流域地方から産出する多量の米は、殆んど一度は皆此の港に集まり、蘭貢米の名で各地に搬出される。我が瑞穂の國日本も、往年の米騒動以來ラングーン米には、一方ならず厄介になつて來たのである。

舊都のマンダレーはラングーンから汽車で北へ約六〇〇軒、イラワディ河の東岸、水田のよく開墾された廣い平野の中にある。人口約四〇萬、舊王城は一辺一哩餘の正方形の城壁に圍まれた一廓で、謁見室や王座、或は王妃の居室、佛像、調度等、往昔の豪華を偲ばしむるものが多く、國破れて山河あり、王城亦昔の儘にして、而も王位今や空しく、茅茨徒らに道を塞いで、誠に人の世の有爲轉變極まりなきを物語つて居る。

尙ほ舊都だけにマンダレーには國王、王族の造營にかゝる結構壯麗な堂塔佛寺が甚だ多く、一に「寺塔の都」と稱せられる程である。殊に市街の東北部マンダレー・ヒルと呼ぶ小丘の東南麓にある萬塔寺の如きは、一大黄金塔を中心にして四五〇の佛塔が整然と建ち並び、王國華やかなりし往時の面影を今に傳へて、行

人をして低徊容易に去る能はざらしめる。

マンダレーから分岐する鐵道の終點ラシオは、邊僻の田舎街であるが、滇緬公路の開設以來俄に世人の注目を引くに至つた所である。ラングーン海港から汽車で搬入された巨多の援蔣物資は、一先づ舊市街にある軍需品置場に運ばれた後、トラックに積み替へて、羊腸崎嶇たる山側の難路を、盛んに昆明へと輸送されるのである。

第五節 蘭領印度

一、位置と面積

マレー諸島はアジア大陸の東南部、紺碧の海原に青螺の如く靜かに浮べる大小幾多の島々で、恰も濠洲大陸との間に、自然が無数の飛石を投げた様な形をして横はる。蘭領印度は此のマレー諸島の大部分を占め、西にスマトラ、南にジャヴァ及びマヅラ、チモール其他の小スンダ列島、中央部にはボルネオの大島とセレベス島、其の東にあるモルツカ諸島及びニューギニアの西半部より成り、北緯六度から南緯十一度、東經九五度から一四一度に亘る廣き海上に散布する。其中ボルネオ島北部の英領、チモール島にある葡萄牙領を除いて、全面積約一九〇萬方呎、我が國總面積の二倍半に當り、和蘭本國に較べると實に五六倍に達す。最大島のニューギニアは面積約七七萬方呎、北極海のグリーンランドに次ぐ世界第二の大島で、其の西半

部を占むる蘭領の部分は廣さが略ぼ我が國內地と匹敵する。第二位のボルネオ島は世界第三の大島で、其の約四分の三を占むる蘭領ボルネオは面積約五四萬方呎、我が國內地の約一・四倍餘に當る。

第三のスマトラ島は全部が蘭領で、面積約四五萬方呎、世界第五の大島で、日本内地の一・二倍に當り、第四のセレベスは約一九萬方呎、世界第八位の大島で内地の約半分に、又第五のジャヴァ島は面積約一二萬方呎餘、日本内地の三分の一より稍々狭い。和蘭本國が歐羅巴に於て面積僅に三萬四千方呎、我が國の臺灣島に較べて二千方呎も狭い小國であるにも拘らず、然も尙ほ世界に「持てる國」の一として、豊かな國民生活を楽しつゝある所以のものは、實に本國に五六倍する此の廣大な蘭領印度を領有するが爲めである。

二、地勢

西藏高原の南北を劃して横はるヒマラヤ、コンロンの二大山系は、東に延びてから急に南に迂回し、印度支那山系と云ふ無數の平行山脈となり、東にあるものは佛領印度支那の中央を略ぼS字形に走れる安南山脈となり、中央のものはマレー半島の主軸を作つて遙に南に出で、西にあるものはビルマから一度は海に没するが、再び崛起して印度洋上のアンダマン、ニコバルの二群島となり、東南に向つてスマトラ、ジャヴァの諸島を包括する大スンダ列島、更に東に走つてバリー、ロンボック、スンバワ、フロレス、チモールの諸島を一括する小スンダ列島に連り、北にバンダ海を取り巻いて、釣針の様な急彎曲の海底山脈をなして濠洲に迫る。

更に之に加ふるに、東方の日本列島から琉球、臺灣を連ねて南に下つた一派は、フィリピンに入つて複雑なる扇状の山脈に分岐し、之が前の印度支那山系から來るものと會合する附近では、到る處縦横無盡に彎曲挫折し、南海の地殻に大自然の怪力を示して、畸形怪態數多の島々を生み出して居る。茫漠たるボルネオの大島、K字島として有名なセレベス、ジロロの諸島を始めとして、或は紐の様な島、飛石の様な島々等、何れも造山途次の物凄い大混亂の跡を如實に物語つて居るのである。

更に又數多の火山脈が之に沿うて噴出し、到る處に温泉を湧出させて、山紫水明の仙境と、清涼な靈地とを現出し、熱帯人の爲めに好箇の避暑地を提供して居る。

其の主なるものが二つある。其の一つは印度支那山系に沿うもので、ビルマから南に下り、ジャヴァ、スマトラの諸島から小スンダ列島の内側を過ぎ、山脈が魚釣針の如く急彎曲したのと同様に、火山も内側に魚釣針の様に次々と相並び、最後に多くの海中火山を残してニューギニア島に連る横斷火山脈、更に今一つは臺灣からフィリピンに入り、遠く南に延びてセレベス及びジロロの諸島に達する縦貫火山脈である。

随つて多くの活火山や休火山が到る處に噴起して居るが、殊にジャヴァとスマトラの島では共に火山が一、二〇餘宛も噴出して、美しい富士型の秀峯もあれば、猛烈に破壊されて怪奇な風貌を示す高峯もあり、休めるものあり、噴煙物凄さのものあり、恰も火山の提灯行列にも似たる盛觀である。されば之に伴ふ地震や津浪、或は大爆發等の災害に見舞はれる事も少くない。唯だボルネオ島のみは面積が頗る廣大なるにも拘はら

ず、一つの火山をも見ないのは甚だ不思議である。

クラカトアの大爆發

クラカトア島はジャヴァとスマトラ二島の間の、スンダ海峡に横はる小火山島である。従前から火山活動の頗る激烈な處として注目されて居たが、一八八三年（明治十六年）の大爆發は、山體の大部分を海中に吹き飛ばして、有史以來の大慘劇に人類を慄へ上らせた。

即ち同年の五月頃から屢々怖ろしい鳴動があり、噴煙亦之に伴つて物凄く立騰つて、住民を云ひ知れぬ不安に怯えさせて居たが、八月二十六日午後一時突如大爆發が勃發して、爾來三日間黒煙が全く島を包み、二十七日には東方約一〇〇哩餘を隔てたバタヴィアにさえ、豪雨熱灰を交へて降り注いだ程で、全面積三三・五方秆、海拔八二二米の此の島は、其の約七割に當る二三方秆が潰滅し去つて、僅に三個の小破片島を残存するのみとなつた。

大爆發によつて失はれた山體は實に一八方秆で、我が警梯山の拋出物の約十五倍に及び、其の爆音は地球全表面の約十四分の一の廣範圍で聞かれ、之に伴ふ津浪は島の附近では高さ三五米、日本の神奈川県三崎に於ても約一米の浪となつて迫つた程であり、拋出された火山灰や浮石の細片は、實に七〇秆から八〇秆の上空に舞ひ揚り、之が爲めに殆んど全地球上到る處で、數日間太陽が眞紅色で眺められた。火山灰の落下した地域は約八三萬方秆の廣い面積に及び、中でも島の附近では海上は一面の浮石に覆はれて近づく術もない。残つた島には動物は勿論のこと、一木一草と雖も殆んど原の姿のものはない。三萬六千の島民は總て大爆發の犠牲となつて、熱湯と降灰の中に空しく命を殞したのである。誠に此の大爆發は、地神の怒りの如何に物凄いかを染々と人類に體驗させたものであるが、今でも此の邊りには數個の海中火山があり、中央火口丘が海面に出没して、地殻内部の怖ろしき擾亂の態を想はせて居るのである。

海岸地形はボルネオ島を除けば其の出入頗る多く、所々にある斷崖絶壁の地を除けば、一般に良灣がよく發達して居る。尙ほ本諸島の二大地帯構造山脈の外側には、夫々之に平行して大海溝が横はり、火山脈の形成に伴ふ向斜的な大皺曲の事實を示して居る。即ちフィリピン山脈の太平洋に面する處にはミンダナオ島の東に、世界最深の海として著名なる一〇七九三米のエムデン海淵を始めとして、スワイヤ海淵(九七八八米)等の深海があり、又大スンダ列島の南方、印度洋に面する處にも七四八〇米のスンダ海淵が深く刻まれて居る。

三、氣候

蘭領印度は面積約一九〇萬方呎、東西に長く、赤道直下に於て地表の約九分の一の長さを占め、紺碧の海原に濃緑の姿を浮べたる其の美觀は、天産物の満ち溢れたる其の富源と相俟つて、世に「赤道直下に懸けられたるエメラルドの帯」の名がある。氣候は全土が熱帶烈日下に位するも、海洋の影響によつて割合に涼しい。

殊に殆んど毎日一回或は二回、午後の日盛りの頃略ぼ時を同じくして、一陣の冷風と共に猛然として、恰も盆を覆へす様な激しい勢ひでスコールが見舞つて來る。日本の夕立に較べて更に一層の激しさで、疾風と雷鳴を交へ、天地を晦くして沛然と襲來する其の光景は誠に物凄い。十間も歩けば身體中ズブ濡れになつて仕舞ふが、然しそれも十分とは續かない。然も其の晴れた後の爽快さ。熱帶の苦熱をすつかり洗ひ去り、樹

樹は一段と新鮮な緑りを漂はせ、颯々たる涼風は椰子の葉末を吹き渡つて、清涼の氣が天地に満溢する。

氣温は二十七、八度内外にして、然も最低最高の差も年中僅に二度餘に過ぎず、外套も要らなければ火鉢の必要もなく、住みよいこと此の上ない。ボルネオ島の如きは廣さが日本内地の一・四倍に達する大島だけに、内地は炎熱酷烈にして大陸的熱帶氣候を呈し、加ふるに季節風に見舞はれて雨量が多く、世界でも名高い不健康地として宣傳されて居るが、事實は赤道直下の熾烈なる炎熱も、其の多量な雨や海からの風によつて著しく緩和されるので、世に云ふ程の不健康地では決してない。

セレベス島は略ぼ赤道直下に位するが、諸島に包圍されて溫暖多濕な北からの季節風も、酷熱乾燥の南からの季節風も、よく防がれるが上に、「ヒトデ」型の島とて全島が海に接近して居るので、氣温も調節され雨も風も誠に適當で、南洋第一の健康地として推讃されて居る。

四、産業

(1) 農産物

マレー諸島では一中年の最長と最短の日の時差は、僅に四八分に過ぎない。日本の東京に於ける其の時差が約五時間餘に及ぶ事から較べて、著しい相違であるが、この事實はこの地方日照時間が周年大差なく、随つて氣温の變化が極めて少ない事を物語つて居るのである。斯く年中氣候は頗る溫暖である上に、雨量も極めて豊かであり、更に土地亦甚だ肥沃であるといふ様に、植物の生育には誠に眺へ向きの條件が備はつて居

るので、熱帯性有用植物は種類も産額も甚だ多く、誠に美むべき富源である。今其の主要なる農産物を挙げると、

【甘蔗】 ジャヴァ島は其の主産地にして、砂糖の年産額は約三〇〇萬噸に達し、英領印度及び北米のキューバ島に次いで世界第三位を占めて居る。蓋し此の地の土壤は多く火山質より成つて、甚だ養分に富む上に、毎年十一月頃から翌年の三月頃にかけて吹く西北季節風は、印度洋の濕氣を運んで潤澤な雨を降らせるので、此の間に高地からは盛んに土砂を流し出して、殆んど肥料を施す必要がない迄に、山下の平野に新らしい養分を供給する。所が四月頃から十月頃にかけての間は風向が變つて、濠洲から來る酷熱乾燥の東南季節風となるので、雨量が少くて糖分充實の爲めには誠に逃へ向である。

今こそ日本も臺灣の糖業が發達したので、殆んど輸入はなくなつたが、今から十餘年位前迄は、ジャヴァから毎年六千萬圓からの砂糖を輸入して、國民の口腹を満足させて居たのである。

實に蘭領印度が今日の地位を築いた原因の大半は、過去に於ける砂糖業の發展に由來すると迄云はれる程の盛大であつたが、此の開拓の恩物ジャヴァ糖にも、近來異變が持上つたのであるから驚く。即ち近年は日本を始めとして印度・濠洲等、従前からのジャヴァ糖の大切なお得意先が急に生産を擴張したのと、加ふるに歐洲に於ては甜菜糖の著しい増産との爲めに、ジャヴァ糖の輸出が激減したので、今日では辛うじて生産の年額を約一三〇萬噸、略ぼ我が臺灣糖と大差なき迄に制限し、以て價格の低下を防止して、難

關の切抜けに狂奔しつゝあると云ふのであるから時勢も變つたものである。

日本は昭和十四年の夏頃から、圓ブロック内は日本糖で賄ふ事を始め出した。即ち金の流出を防ぐ爲めに支那や滿洲から、外國糖を驅逐する計畫を以て進んで居るが、之はジャヴァ糖にとつては此の上もない痛手で、蘭印當局では荐りに緩和方を要望しつゝある。蓋し將來日本・蘭印間の經濟的接近が促進されるに伴れて、彼我の間に新しい糖業關係が展開される事であらう。

【米】 蘭領印度は世界的な農業植民地で、和蘭が蘭印から上げる収益の第一は農産物であり、其の農産物中量的に最大の地位を占めるのは米である。何しろ氣温高く雨量は頗る豊かに、地味亦肥沃無比と云ふ米作には逃へ向きな土地柄だけに、所によつては一年三回の收穫があり、年産六〇〇萬噸を超えて居る。元來マレー諸島の土人達は、古い昔は薯類や果實等の原始食物を食料としたのであるが、米が種々として豊富に産出する關係から、何時しか米食の民となり、炊いた米の飯に矢鱈に胡椒を振りかけて、親譲りの五本箸で賑やかに食べるのである。

【其他】 茶は年産八萬噸で、英領印度及びセイロン島に次いで世界第三位、珈琲は一〇萬噸で同じく第三位、煙草は約六萬噸で第五位、何れもジャヴァとスマトラの二島を主産地とする。

胡椒はスマトラ島を主産地として、其の産額は世界需要の三分の二に及ぶ。抑々和蘭が東洋貿易を始めた當時の最も著名な貿易品はストマラの胡椒で、此の豊富な胡椒畑を専有せんが爲めに、和蘭は兇暴類ひ

なきアチン蕃族を相手にして、瘴癘の氣立ち騰る蕃地に惡戰苦闘三〇餘年、二〇萬の尊き人命と二億弗の戦費を拂つて討伐を完成したのであると云ふ。

モルツカ群島は又香料丁字の原産地である。此の樹は肉桂の如くで葉は柳に似て居る。白き花が枝端に簇り生じ、次第に緑色に變つて遂に小さな釘狀の赤い實が生ずる。此の花蕾を乾燥せしめたのが即ち丁字にして、古くから歐羅巴人に大に貴重せられ、コロンブスの印度廻航も、マゼランの世界周航も、其の目的とする處は東洋の香料を得んが爲めであつたと傳へられる。

(2) 林産業

【護謨】 ブラジルの自然ゴムから南洋の栽培ゴムに移つたのは、今から約四〇年前の事である。最初の護謨栽培はマレー半島で行はれ、夫れが蘭印のスマトラに傳はり、次いでボルネオ・ジャヴァ・セレベス等に始められて今日の盛大をなしたのである。年産額は世界全産額の約三五%に當り、之が投資國としては和蘭本國と英國が各四五%宛を占めて、勢力を二分して居る。

日本人の護謨企業は明治の末年頃より創められ、最初は主としてマレー半島に限られて居たが、今ではスマトラからボルネオ等にも經營せられ、我が國の蘭印に於ける企業中最大のものである。然し全南洋のゴム園三二〇萬町歩の中、日本人のゴム園は約五萬餘町歩で一・七%に過ぎず、其の投資額は約四〇億圓中の九千萬圓、又生産數量は約一五〇萬噸中の二萬四千噸で一・五%にしか當らない。平時我が國の護謨

輸入量の七萬噸には遙に遠く、随つて日本では約五萬噸近くの原料を確保する必要があつて、其の爲めに臺灣や海南島に護謨園開發の計畫を進めて度るが、温度の關係や暴風襲來の危険があるので、南洋方面に於ける護謨栽培の様には參らない。是處にも東亞協同體の一員としての、蘭領印度の重要性が存在するのである。

【規那】 ジャヴァ島を主産地として、世界全産額の約九八%を産出する。元來規那樹の原産地は南米のペルーであるが、一八五四年之をジャヴァに移植して以來、官民の努力によつて、今や世界的獨占事業に迄發達したのである。此の樹の樹皮よりキニーネと云ふ貴重な解熱劑が作られる。現今世界のキニーネの消費高は一年五〇〇噸内外であるが、蘭印では其の生産能力が千數百噸にも上るので、今日では殆んど政府の專賣で、嚴重な生産統制を行つて價格の低下を防止して居る。

【チーク】 中部及び東部ジャヴァの海拔六〇〇米以下の丘陵地帯を主産地とし、其の材幹中には鐵を鑄びさせない特殊な化學成分があるので、古來艦材として貴重せられ、又白蟻の寄りつかぬ特質があるので、熱帯地方では建築材としても需要が甚だ多い。されば價格と用途の點から云ふと、蘭印諸島に繁茂する百千の樹木中、チークは其の他の一二〇〇餘種に亘る雜木を包括したるものと、秤にかけて甲乙が無い程であると云ふ。

【コプラ】 コ、椰子はジャヴァ島を主として諸島に栽培されるもの約一億二千本と稱せられ、之から毎年採

取されるコブラは約六〇萬噸に上り、土人の食料として消費されるものを除いた外は、植物性脂肪製造の原料として、内外各地の脂肪工場に送られるが其の価格は毎年四千萬圓を下らない。

(3) 鑛産物

【石油】今日の日本にとつて最も關心を持たれるものは、蘭領印度の石油である。

蘭印の石油は明治十六年スマトラの北部で採掘したのを最初として、其の後ボルネオ、ジャヴァ等でも産油があり、現今の年産額は約七五〇萬噸にして、其の六二%はスマトラからの産出にかゝる。其他ニューギニアに於ても蘭領ニューギニヤ石油會社が設立されて、目下大々的に調査試掘中で、現在では未だ産油の域に迄は達して居ないが、大に將來を囑望されて居る。

蘭印の産油を資本關係から観ると、全産油の約五八%を占めるものは英國と和蘭の合同によるロイヤル・ダッチ系のバタフセ石油會社で、之に次ぐものは約二六%を占める米國スタンダード系の和蘭コロニア・石油會社、及び最近の進出で現今では僅に全産油の約一三%を占むるに過ぎないが、大に其の將來の期待される和蘭の蘭印石油會社の三つで、英・米・蘭三國の資本が今や産油を競つて、縦横の活躍を續けて居るのである。尙ほ日本もボルネオ島の東海岸のサンクリーランに唯一の礦區を有して居るが、採掘開始以來已に一〇年にもなるが、未だ一滴の石油の噴出も見ないのは誠に残念である。

從來我が國は石油の輸入を主としたる關係から、精油の輸出を主とする蘭印よりも、米國からの輸入を

利として需要の多くを米油に仰いで居たが、元來蘭印は東亞に於ける唯一無二の産油地にして、而も産油の大部分が輸出せられて居る事から考へても、東亞の最大石油需要國たる日本が、地理的に有利な此の地の産油に重大關心を持つのは當然のことである。

蘭印現在の産油は約八〇〇萬噸足らずで、世界全産額中の僅に三%に過ぎないが、我が國の産油に較べると實に二〇倍以上であり、又其の毎年の輸出量は我が國の需要量の二倍に近い。從來蘭印政府では日本の進出に謂れなき恐怖を感じて、技術者の渡航を許さず、産油の輸入も意の如く運ばなかつたが、今や和蘭の本國は獨逸軍の支配下にあり、英國亦潰滅に瀕して其の支援全く頼み難き状態にある時、宜しく新東亞の實情を認識せしめ、進んで我が國の爲めに門戸を開き、蘭印無量の資源開發の爲めに、喜んで日本人を迎へしめる様に努めねばならぬ。

【石油資源と日本】

今日の世界の強國と稱せられるものの中で、自給自足の程度に國內で石油を産出する國は、世界全産額の七一%を産出する北米合衆國、同じく約一一%を採掘するソ聯邦とだけである。英吉利は皆無、フランスと伊太利はあれども無きに近く、日本と獨逸とはフランス及び伊太利よりは少しましと云ふ程度である。

然し更に仔細に觀察すると、英吉利は世界各地に投資して居る油田があるので、其の量を集めると世界全産額の約一五%に達し、北米合衆國に次いで世界第二であるし、又佛蘭西も第一次歐洲大戰後、戰勝國として英・米と共に、トルコ領であつたメソポタミヤ油田を手に入れたので、さして困らないだけの分け前を持つて居る。更に獨逸は幸ひなことには、其の近くにルーマニアの大産油國が位置して居る上に、ダニユブ河と云ふ大送油管が自然に通じて居るので、之

さえ確保して置けば大抵の場合先づ憂ぎがつく。

所が此の點から觀て最も情けないのは日本である。「ガソリンの一滴は血の一滴に値す」と云ふ悲痛な叫びが擧げられて居る今日、強國として世界に雄飛せんとする日本は、之が資源確保の目あてが無いのである。それも平時なら有り餘る石油の事であるから、持たぬ國日本にも潤澤に供給されるが、一朝有事の際、殊に英米の感情を害する様な場合、彼等は支配力を揮つて其の供給を斷つことは必然であるから、持たぬ國としての慘苦を嫌やでも味はなければならぬ事になる。

さて夫れにつけても我が日本から、手の届く所にあるのが蘭印の石油である。どうしても蘭印と固く手を握らねばならぬ事が判るであらう。假令嫌やだと云つて首を横に振られても、決して其儘引つ込んで居られる性質のものでない。一體蘭印の石油資源に對しては、各國の資本が錯綜して頗る面倒な關係を作つて居ることは、前に述べた通りである。米國其の他が國防上、軍事上、資源上、此の地に重大關心を拂ひつゝある事も間違ひない。然し東亞に包含せられたる蘭印の地域が、歐米各國の爭奪の目的物に供せられるが如きは、日本の大使命とする東亞新秩序の建設を脅威するものとして、決して日本國民の承認し得るものでない。殊に石油を始めとして、國家の存立上に絶對必要な資源の不足のに悩む日本を、更に愈々窘めんとして今や米國其他より物資の禁輸、又は貿易の制限を實施せられんとしつゝある時、其の位置的にも資源的にも、蘭印が事實上我が生命線たらざるを得ない事は當然であつて、恐らく此の緊迫せる實情は、世界の各國に於てもよく諒承して居る事と信するのである。東亞協同體を確立し、東洋諸民族の共存共榮によつて、よりよき東亞を建設せんとする正義の國日本の進む所、何物と雖も之に無用の干渉を敢てし、徒らなる妨碍を與ふるが如きは斷じて許さざる處である。

【錫】 蘭印は又英領マレー、南米のポリビヤに次いで世界第三の錫産地である。スマトラ島の東海岸に近き

バンカ、ピリトン、シンケツプの三島を主産地とし、特にバンカ島からは蘭印全産額の約六割を産出する。年産約三萬噸、世界全産額の約二〇%に達す。製煉せられたる錫塊は主として英・米・蘭の三國に輸出せられ、一部は日本にも送られる。米國が蘭印に對して重大關心を有する所以のものは、政治上、軍事上の原因の外、蘭印に産する此の錫に垂涎措く能はざるが爲めである。此の他蘭印の産物には金・銀・銅・滿俺・ボーキサイト等があり、又今後開發さるべき豊富な埋藏資源には鐵とニッケルがある。

(4) 水産物

廣大な南洋の海面に蒔き散らされた大小無數の島々の沿岸には、鯉、鮪等を始めとして魚介の類が頗る豊富であるが、何分從來は排日氣分が旺盛で、外國漁船の領海内漁業は絶對に禁止されて居る上に、漁業禁止區域が甚だ多く、僅に土民による拙劣な漁業が行はれて居る程度で、富源空しく水中に委棄されて、今尙ほシンガポールを主として乾魚、鹽魚等年々巨額の水産物が、輸入されつゝある實情であることは誠に惜しむべきである。將來外交關係が圓滑に行はれて、彼我の親密なる經濟提携が實現したならば、元來が漁業技術にかけては世界獨歩の稱ある日本人の事であるから、我が南洋漁業は素晴らしい發展を見る事であらう。

【蘭印の外國貿易】

蘭領印度は世界の工業諸國に對する莫大な原料供給地であるだけに、其の外國貿易は毎年夥しい輸出超過を見せて、和蘭本國の爲めに無二の寶庫たることを如實に示してゐる。

輸出品は之を金額の順序に示すと、總額の約二七%を占めるゴムを第一として、以下石油(二一%)、砂糖(一一%)、茶(八%)、錫(八%)等を主とし、右の五品を合せると輸出總額の七五%に達す。而して之等輸出品の仕向地はゴムの四〇%、錫の五〇%を始めとして、總輸出額の二割を輸入する米國を第一として、以下新嘉坡、和蘭本國等が之に次ぐ。

輸入品は總金額の二八%を占むる織物類を第一として、以下米、小麥等の食料品、機械器具類、人造肥料、セメン、ト、金屬等で、和蘭本國、日本、米國等を主なる取引先とする。

蘭印の外國貿易に於て其の母國たる和蘭の占める割合は、輸入に於て二〇%、輸出に於ては僅に一六%に過ぎない。元來英吉利でも佛蘭西でも或は白耳義でも、植民地の所有國では其の生産物の六〇%から八〇%は、母國內で消費されて居るのであるが、之に反して蘭印では僅に生産品の一六%を母國に送るのみで、八四%を外國に賣り、輸入品の八〇%を外國から買はねばならぬ。即ち和蘭の本國は植民地に製品を送る力もなければ、植民地の生産品を消費する力も持たないのである。換言すれば今日の蘭印は、經濟的には既に本國の手に合はぬ程に、十分に生長し來つたのである。

そこで本國に代つて蘭印の經濟界に、東西から進出して來たのが英國と米國とである。所が又輓近の眼眩るしき國際情勢の推移は、此の狀況に一大變化を齎らした。即ち歐洲動亂が勃發すると共に、スエズ通過の貿易は輸出入共に著しき落凋を辿り、之に代つて日本及び米國を中心とする太平洋貿易が、遽かに活氣を呈する様になつて來た。誠に日本品進出の爲めには絶好のチャンス到來である。唯だ從來の日本の對蘭印貿易が、輸出が約一億四千萬圓に達するのに反して、輸入は其の約半分に過ぎず、有り餘る産物を擁して捌け口に悩む此の國に對して、聊か氣の毒の感なきを得なかつた次第であるが、此の點に就ては共存共榮の實を擧げる上からも、相當の考慮を必要とする處である。

五、住民と政治

(1) 住民

蘭領印度の總人口は約六八〇〇萬と稱せられ、其の分布はジャヴァ島に四二〇〇萬、スマトラ島に八二〇萬、セレベスに四二〇萬、ボルネオに二二〇萬、ニューギニアに三二萬と云ふ順序であり、又之を種族別に分類すると全體の九七%、即ち六六〇〇萬は土人、一二〇萬は支那人華僑、二〇萬は和蘭人(其の中の約三分の二は混血兒)、其の他アラビヤ人が七萬、印度人が三萬、日本人と獨逸人は共に約七千、英人千五百、米人七百人と云ふ状態である。

蘭領印度は行政上之を二分し、ジャヴァと其の東隣にあるマヅラ島を合せて内領、其他の諸島を外領と稱して居るが、人口の分布は頗る變則的にして、内領は面積僅に蘭印の七%を占むるに過ぎないにも拘らず、人口は實に其の七〇%即ち四七〇〇萬を集め、之に反して全面積の九三%を占める外領には僅に總人口の三〇%、二一〇〇萬が散住するに過ぎない。之から觀ても和蘭政府の經營が、ジャヴァの一島に集中されて、外領は全く未開發の儘に放棄されて居る事が判る。恐らく本國の五六倍もある分不相應な獲物を抱き込んで、和蘭もこれ以上自力ではどうにも手が着かぬと云ふのが本音であらう。

ジャヴァ島では人口密度が、今日一方籽につき三一六人と云ふ稠密さであるにも拘らず、人口増加率が又素晴らしく大で、毎年平均二〇%餘に達し、三五年で倍加すると云ふ激しさである。如何に資源に恵まれて居るとは云へ、我が國內地の三分の一にも足らぬ此の小島に、五千萬人からの住民が密集したのでは、生活

問題の將來が誠に不安極まるものである。そこで此の深刻な人口過剰問題に惱まされて起つたのが、近來荐りに傳へられるジャヴァ産業の工業化と、外領地、特にスマトラへの移住の奨励である。

外領地は土地廣大にして一七〇餘萬方呎に及び、然も人口は一方呎僅に一人以下と云ふ稀薄さで、開拓の餘地は極めて多いのであるが、文化を誇るジャヴァ土人は、他の島々に進出しても容易に島民と融合しない。そして久しく資源豊かな良土に生活して來た關係から、貯蓄心と云ふものが全然ない。契約労働者として渡航しても、懸ては一錢の貯へもない着の身着の儘で島に歸り、益々ジャアの島内に失業者の數を増して行く。

ジャヴァ産業の工業化に就ては、土人の教育が全く缺けて居る事と、動力用としての鐵・石炭の産出の無い事とは大きな弱點であるが、然し元來土人はジャヴァ更紗の製織等でも解る様に、割合に手先の仕事が器用であるから、教へれば簡単な作業ならば相當にやれるであらう。殊に原料の豊富な事と、蘭領印度だけでも七千萬人、南洋全體なら一億三千万人と云ふ大市場を擁する事とは何よりも強味であると、近年次第に工業進出へと乗り出して、從來は僅にゴム、砂糖、茶等の農産物を製品とすることに主力を注いで居た工業を、更に進んで織布、食料品罐詰、自轉車、硝子、製紙、皮革製品等の十數種の部門に擴大し、此の方面では次第に成功への道を辿つて居る。

殊に此の工業化政策を行ふに當つて蘭印政府が、外國資本に對して門戸解放を實行したることは注目せね

ばならぬ。蓋し外國資本を歓迎することは、之によつて工業化のスピードを速くする計りでなく、友邦列強をして此の植民地に利害關係を持たせる事が、和蘭の利益であると云ふのが蘭印政府の考へて居る内幕である。特に最も歓迎して居るのはアメリカの資本で、之は單に資本的、技術的にアメリカが優れて居ると云ふだけでなく、米國と利害關係を結ぶことによつて、日本の勢力を牽制し様と云ふ腹が十分讀めるのである。日本は從來主として貿易上の立場から、日本商品の市場として蘭印を眺めて來たが、事態は刻々變化しつつある事を悟らねばならぬ。之が對策としては何よりも正義の國日本の眞の姿を認識せしめ、經濟提携を實現して、日本の技術と資本による工場進出を圖ることが、刻下最大の緊要問題であらう。

更に蘭領印度の住民に就て注意すべき事は、混血兒の問題である。一六二七年和蘭の東印度總督クーンが結婚政策によつて、和蘭人をジャヴァに定住せしめんとして土人との雜婚を認めた事は、遠大な植民政策を物語るものであるが、同時に之が年久しい今日では騷動の源であり、統治の癌となつて來たのである。

父は白人で母は蕃女であり、自分は其の雜種である。父は自分と母を残して本國に歸り、再びジャヴァに歸つて來る事はない。居残された貧弱な蕃女が自分の母である事を知つた青年は、泣かずには居られない。然も混血兒は男も女も、社會的にも仕事の上でも高い地位は與へられない。そこで己れの境遇を悲んで自暴自棄となり、或は和蘭本國を呪つて、機會もあらば反抗の喚聲を擧げて、蘭印統治上の難物となるのである。

尙ほ蘭領では外國人の入國を制限して、一年一萬二千以下と限つて居る。而も之にも民族的な差別を加へて、和蘭人と支那人の外は最大限度を一國について八〇〇人と限つて居る。從來日本人の移民は一年二〇〇人位で、此の限度以上の渡航は未だなかつたので、今日迄の處特別なる問題を惹起したる事は無かつたが、今後我が南進政策の發展に伴れて、將來此の入國制限是正の日が當然到來する事を信ずるのである。

【蘭印の華僑】

蘭領印度には約一二〇萬の華僑が住んで居る。彼等の中には數代前から蘭印に土着せるものもあれば、又新來のものもあるが、彼等華僑の蘭印に於ける經濟的勢力は頗る強大で、輸入、卸賣、小賣等各方面に活動し、殊に卸賣と小賣の方面に於ては全く優勢の地位を占め、土人相手の小規模な小賣店の如きは殆んど彼等の獨占となつて居り、和蘭人社会と土人社会との中間に介在する經濟的仲介者として、華僑の存在は蘭印の社会上缺くべからざるものとなつて居る。國家的な背景も無ければ、資本的な組織もなく、殆んど徒手空拳、着の身着の儘で海を渡つて來た彼等の根強い發展

振りを見ては、舌を卷かぬものはないと云ふ。一文無しで上陸したる彼等は、苦力を働いて零碎な金を貯める。少し資本が出来ると天秤棒を擔いで煮賣屋となる。次第に資本が太ると路上にアンペラを敷いて品物を並べ、露店を開業する。荷物を擔いで田舎廻りの行商人となる。聽て店を持つて小賣屋となり、成功したものは問屋となり、貿易商となつて、表通りに進出して堂々たる紳商となつて收まり返へる。其の間汗にまみれ、塵埃を浴び、粗衣を纏ひ粗食に堪え、牛馬の様に働く粒々たる辛勞は、逆も他國人には眞似の出來ない所である。

之等の華僑は又他の南洋華僑と同様に、從來支那の革命には常に絶大なる援助を續けて來たのであつて、今日も孫文の「華僑は革命の母なり」の言葉を無上の聖典として、自ら矜り自ら意氣込んで居る。随つて今迄日支間に紛争がある

毎に、彼等華僑は猛烈なる排日ポイコット、或は排日宣傳を行つて、露骨な敵性運動に在留邦人を悩ましたもので、現に今次の支那事變に於ても勃發の當初には、極めて猛烈に日貨排斥に乗り出したのである。事實蘭印に於ける物資の配給網と、集散網とを完全に掌握せる之等華僑の排日ポイコットに遭ふと、折角輸入した日本商品も倉庫の中に積み込まれたる儘で、土民の手に入る組織がないのである。さればポイコットの起る度毎に、日本商人の吞まされた苦汁は誠に言語に絶するものであつた。所が蘭印に於ける華僑の卸小賣商の大部分は、從來から日本商品を取扱ひ、之によつて大なる利益を得て居た關係上、日本品を取扱はないとなると、彼等も自滅するより外はないと云ふのであるから問題は複雑である。そこで到底之を貫徹する事の不可能を悟つた華僑達は、遂には「日本品を取扱ふ事は良いが、日本人から買つてはならぬ。日本品で儲けた金を大に獻金すべし」と云ふ事に變更し、今では幾分軟化したがるが、それでも日本人小賣商には依然ポイコットを續けて今日に及んで居るのである。

其後戦局が次第に進展して、彼等華僑の郷里たる廣東、福州、厦門或は海南島等が相次いで陥落したことは、彼等の敬愛する汪精衛が更生新政權を樹立して、和平救國に挺身しつゝある事と相俟つて、華僑の心境にも大なる變化を齎らし、有力者にして時局の眞相を認識するものも續々と殖えて、近來彼等の排日抗日の運動も、次第に積極性を失へる様に見受けられるのは至極結構な事である。

(2) 政治

【沿革】

椰子の葉蔭に風薫る常夏の國南洋の島々が、地圖の上で今日の様に色分けされる様になつたのは、幾年月の間或は勇敢な航海者の命を的の冒險があり、瘴煙蠻雨の間を出入したる決死的な探險があり、或は又血腥

き民族闘争があり、波瀾重疊、興亡限りなき歴史を繰返へしたる結果である。

今から凡そ六〇〇餘年の昔元の忽必烈は、日本遠征を企て、成らず、續いて大軍をジャヴァに送つて之を征服したと云ふのであるから、諸島と支那との關係は極めて古いものがあると思はれるけれ共、政治的には一向發展を見なかつた様である。歐羅巴人の南洋遠征の先驅者は葡萄牙人で、早くも一五〇九年香料貿易を目的として來航し、マラッカ海峽を根據地として土人を懐柔し、着々地盤を開拓して次第に北上し、一五四三年には九州の南島種子島に漂着して、對日本貿易に迄も手を伸す程の優勢な地歩を占める様になつた。

第二番手として南洋を目指して猛進したのが西班牙人である。フィリピン群島は同國の有名なる航海者マゼランが、一五二一年此の群島を發見し、スペイン王子の名を採つて命名したるものである。隊長のマゼランは土人との戦に不幸にも蕃土の露と消えたが、隊長の志を繼いだ隊員達は幾度か暴風に遮られながら、遂に千辛萬苦の末喜望峯を廻航し、世界周航の大業を完成した。

第三番手として南洋へ志したものは和蘭人である。一五九六年其の最初の船はスマトラ島に到着したが、續いて和蘭の東印度會社が設立せられ、搾取貿易の失敗から土人と争ひを生じて、勢力の漸く衰微し始めたる葡萄牙人に代つて、着々土地を占領し、一六一二年には早くもバタビヤを首府として、遂には臺灣迄も一時占領する程の目覺しい勢で、グン／＼南洋に勢力を扶植して行つた。

第四番手として引續いて來航したのが英吉利船である。同じく東印度會社を組織して、勢込んで乗出して

來たが、既に先客の和蘭が華々しく店開きをした後の事として、忽ちに二つの東印度會社の衝突となり、暫らくは激烈なる抗争を續けて居たが、英吉利は遂にマレー諸島に望みを斷ち、専ら印度の開發へと方向轉換をした。其後幾多の變遷があつたが、遂に南洋は和蘭の獨占舞臺となつて仕舞つたのである。

和蘭は或は土人の叛亂を鎮定して主權を確立し、或は相次いで本國から派遣されたる名總督が、土人の小作法を制定し、強制裁判制度を設け、着々農業の改良を行ふ等、次々と有效な植民政策を實施したので、其の勢力は牢固として抜くべからざるものとなり、次いでスマトラ、セレベス、モルッカ、ボルネオの南半、スンダ等の諸大島も其の領下に入り、南洋に於ける蘭領今日の盛大を見るに至つたのである。

統 治

現在の廣大な蘭領印度を統治するものは、和蘭女王の任命にかゝる東印度總督である。總督はバタビヤに駐在し、和蘭皇帝を代表して、外交に關する事項を除く外は、蘭印統治に關する絶對的な權力が與へられてある。即ち陸海軍を總督し、財政を規準し、必要なる法律を發布する等を始めとして、蘭印の土人に對しては、訊問、審査、或は出廷を要することなく直に之を逮捕し、處罰し、或は即時追放し得る等の權力を與へられて居るのである。

地方行政は諸島を直轄植民地と隸屬土侯國とに分ち、直轄植民地には總督の任命する知事、又は地方長官たる理事官が多數の土人官吏を隸屬せしめて統治に當り、又土侯國は總督の監督下に、夫々土侯が統治する

事になつて居るが、何分七千萬と云ふ多數の異民族を、極めて少數の和蘭人が統御して行くのであるから、苦心の程は一通りでない。形式上は總て土人貴族の優越を認め、實質上は萬機和蘭官吏の掌中にある制度を採つて居る。即ち各省には土人省知事があり、各縣には土人縣知事があり、各郡、各村皆土人の郡長、村長が統轄して居るが、然し之等の知事、郡長、村長は、之と並び置かれた和蘭人の理事官、副理事官、監督官等の承認がなくては橋一つ架ける事が出来ない。總て名を與へて實を採る方策、之が世界の一小國たる和蘭が列強競争の渦中にあつて、世界第三の植民帝國を支配する人知れぬ苦心の魂膽である。

蘭印にも植民地自治の第一歩として、一九一八年以來立法府とも云ふべき國民參議會が設けられ、住民は之を通して政治に參與する事になつて居るが、然し立法機關とは名のみにして、一〇〇名の議員中五〇名は總督が之を任命し、残りの五〇名を土民から選出する規定であるから、政府の意志に反して土民の意志が參議會を通過する筈がない。此處等にも和蘭の強壓政治の片鱗が窺はれる。

和蘭の蘭印統治の全貌は、經濟的搾取の一語で盡きる。最も貧しい勞働者でも、其の収入の三分を所得税として取上げられる。月に五圓か七圓の家僕でさえも、賃銀税を納付せねばならぬ。道路は諸島到る處美しく舗装されてあるが、之が爲めに貧しい日雇いの土人ですら道路税を徵集されるのである。和蘭本國の財政に貢ぐために安い日本の燐寸を驅逐して、高い和蘭燐寸が輸入されると、土人は十本六錢の煙草を喫ふのに、同じく一箱六錢の燐寸を使はねばならぬと云ふ慘めさである。

斯くて凡ゆる方法で搾取された巨額の金は、和蘭人官吏の俸給と退職官吏の恩給、それから軍事費とに大部分が消費されて居るのである。總督は俸給と手當を合せると、年收約三〇萬圓に達すると云ふのであるから驚嘆させられる。以下和蘭人官吏の高給なることは驚くべきもので、又多勢の蘭印退職官吏が氣候の良い南フランスや、歐羅巴大陸で呑氣な暮し方をして居るが、其の恩給年金の爲めに島の貧しい土人達が、血を搾られるのであるから溜つたものでない。

然も斯程の搾取が行はれて居るにも拘らず、蘭領印度の土人達は至極諦めのよい、又忍耐心の強い、そして天性快活で争いを好まぬ溫和しい民族であるだけに、英領印度で見る様な險惡な空氣は聊かも見られないのは、母國和蘭にとつて誠に仕合せな事である。

然し思ひ切つた搾取を行つて居るだけに、土人の自覺を喚起する様な事があつてはそれこそ大變である。そこで世界に又と無い此の豊富無盡の大寶庫を護る爲めに、蘭印政府の採つて居る政策は、一方では土人を無智にし貧困にし其の日暮しにして置く事であり、他方では外國人の入國を制限し、又在留外國人の監督を嚴重にする事である。殊に日本人に對しては最も神經を尖らせて居る。

今次の支那事變に於ても蘭印政府では、日本の愛國公債の募集を許さない。愛國行進曲のレコードさえも、「往け八紘を宇となし、四海の民を導きて」と云ふ文句が不穩當であるとして、輸入を禁止して居ると云ふ。其他印刷物等の檢閲は嚴重を極めて居るが、勿論之は對手の支那人に對しても同様で、専ら蘭印の嚴

正中立を守り、只管戦禍に巻き込まれる事の無い様警戒して居る爲めであらうが、同じく東亞に位置しながら、自己の貪婪飽くなき我慾の爲めに、多數の東亞民族の幸福を犠牲にし、正義の國日本の新東亞建設の大理想を解せざる、彼等の我儘勝手なる振舞は誠に不快極まるものである。

【蘭印の軍備】

蘭印の政治、經濟、外交等が從來英吉利の間接的勢力下にあつたと同様に、國防、軍備に關しても亦英國依存主義が年來の方針で、殊に蘭印の國防に關する英國依存の觀念は、殆んど絶對的であるとさえ云はれて來たのである。蓋し頼みとする和蘭本國の軍備は頗る微弱劣勢であり、蘭印自らの軍備の如きは逆も列強に比すれば物の數ではないので、自然領域的に密接な關係を持つ英國の大海軍力に、依存の方針を採るに至つたものであらう。

斯くて英國と蘭印との合作によつて形成されて居たのが、マレー半島のシンガポール軍港、ジャヴァ島のスラバヤ軍港、濠洲のダーウイン軍港、英領ニューギニアのモレスビー軍港を結ぶ所謂國防基線と稱するもので、之が爲めに從來英國の東洋艦隊並びに蘭印艦隊の首脳部は、毎年一回新嘉坡に會合し、佛蘭西のアジア艦隊首脳を加へて、重要な國防會議を行つて來たのである。

現今蘭印の軍備は和蘭本國とは獨立的に、陸軍兵力約五萬、海軍は五五〇〇噸級巡洋艦三隻、驅逐艦九隻、潜水艦十隻、又空軍は重爆撃機を主として百餘臺と云ふ貧弱さであるが、之では勿論廣大な領土の防備には何の足しにもならぬ。

「蘭印へ侵略を企圖する軍隊に、最大の犠牲を拂はせるだけの軍備を持たねばならぬ」と云ふのが、抑々の蘭印の國防軍備の根本方針で、夫れ以上は總て英國依存で今日に及んだが、今や本國は獨軍の鐵蹄下に蹂躪せられ、英國亦潰滅に

瀕せんとする時、其の落莫焦躁は見るも氣の毒な状態である。

六、諸島誌

(1) ジャヴァ島（爪哇）

南洋の極樂島ジャヴァの島は面積十二萬六千方呎で、我が國の本州島に較べて約半分と云ふ小さな島であるが、人口は約四二〇〇萬にして、蘭印總人口の六割二分を占め、一方呎の密度は實に三一六人に達し、農業地帯としては世界に類例のない人口稠密地である。ジャガタラ島の昔から日本人には因縁淺からざる土地で、今でも在留邦人は三五〇〇人に上り、蘭領印度全體に活躍する日本人約七〇〇〇人の半數は此の島に住んで居るのである。

本島は世界第一の火山島にして、活火山と死火山を合せると其の數實に百餘座の多きに上り、海拔三千米以上の高峯でも尙ほ九つを數へる。一般に北岸は土地低平にして出入屈曲少なく、又南岸は直ちに深海に迫つて絶壁をなす所多く、自然的な良港灣には恵まれない。土地は概ね頗る肥沃にして、時々火山活動の爲めに災害を蒙る事があるも、風光は頗る秀麗で、温泉の湧出も多く、島内の到る處に繁茂せる緑り色濃き常夏の椰子の林は、恰も我が日本に於ける松林にも似て、明媚な風色に一層の興趣を添へて居る。

氣候は熱帶烈日下に位するも、海洋の調節を蒙ること多くして誠に凌ぎ易い。毎日午後にはきまつて驟雨沛然と落下して爽快極まりなく、又位置が赤道に近いので暴風と云ふものがない。季節風の關係から一年乾

濕の二季に分れ、一般に十二月から三月一杯は雨が多く、六月から九月にかけては乾燥するが、此の乾濕の規則正しい循環は地産を豊かにする。

即ち雨期に於ける豊富な雨水は、盛んに高地から土砂を流し下して、絶えず山下の平野に新養分を供給するが爲めに、ジャヴァの低地は地味頗る肥沃にして、肥料を施さずして充分の收穫あり、随つて海拔一五〇〇米内外の地點に到る迄鋤犁の跡が鮮かで、更にそれより上ると見事な處女林が晝尙ほ暗き迄に生ひ茂つて居る。方數哩もある廣大な甘蔗畑は、流石にジャヴァが世界第三の蔗糖國たる事を領かせ、又一年二度も三度も收穫される豊富な米は、熱帯の珍果と共に食卓を賑はす。其他ゴム、珈琲、規那、茶等の農産物、鬱蒼として繁茂するチーク樹の大密林等、豊富無盡の天産物は、歐人の夙に「黄金の島」として垂涎措かざりし所以である。

【バタヴィヤ】本島の西北岸に位して舊名をデヤガトラと云ふ。人口約四五萬、住人の七割は土人で、二割は支那人、約一割は和蘭人を主とする白人である。一六一九年蘭印第二代の總督クーンの創建にかゝり、蘭人の東洋經營の根據地としても「東洋の女王」と誇りたる名市であるが、何分土地濕潤にして疫病の流行多き爲めに、其後舊市を距る五哩の南方高燥の地に新市街が建設せられ、又港も其後火山の噴出による土砂の堆積の爲めに船舶の出入が因難となつたので、舊港より約六哩東に新港が築造せられ、斯くて今日では舊ジャガトラ市の外に、新市街及び新港を合せてバタヴィヤと呼ぶのである。

全蘭印を統轄する東印度總督の壯麗なる政廳を始めとして、官衙、住宅の宏大な建築物は概ね新市街にあり、舊市には主として土人及び支那人が居住して商業地區をなす。新舊の兩市街共に坦々たる大路が縦横に走り、之等を貫流する河川からは深緑の並木を以て縁どつた溝渠を八方に通じ、町の美觀を添へると共に土人に恰好の水浴場と洗濯場とを與へて居る。

本市は又本島百貨吞吐の門戸にして、船舶の出入甚だ利便に、鐵道は此の地を起點として島内の主要地に達し、砂糖、規那、珈琲、煙草の輸出、織物、雜貨等の輸入が頗る盛んである。

古來我が國との關係甚だ密接にして、此の地から輸入したる薯の名を、邦人は當時の舊稱を其の儘ジャガタラ薯と呼んで居る。現今我が國人の在留するもの約七〇〇名に達し、多くは雜貨商を營む、三井物産を始め日蘭貿易、東洋商會、或は臺銀、正金等の支店或は出張所が多く設けられ、日蘭貿易も主として此の地を中心に行はる。我が國の總領事館あり、日本人小學校も開かれて居り、我が南洋諸航路の汽船は皆此の地に寄港する。

尙ほ本市の南方約二〇哩の地にあるポイテンヅルグは、高燥の地に位して蘭印の避暑地として、又世界第一の熱帶植物園の所在地として知られる。

【サマラン】本島北岸の要港にして人口約二二萬、約三〇〇年の昔支那の移民が商工業の根據地として開いた所だけに、今日でも支那人の在留するもの甚だ多く、中部ジャヴァから産出する砂糖、珈琲、コブラ等

の集散地として華僑の巨商が少くない。我が南洋航路の寄港地にして在留邦人も多く、日本人小學校も建てられて居る。尙ほジャヴァ島内で日本人小學校の建てられて居るのはサマランの外、バタヴィヤ、スラバヤ及びバンドンの四ヶ所である。

【スラバヤ】 本島の東北海岸に位し、前方にはマヅラ島を控へて天然の良港をなす。本島第二の都會にして人口凡そ三五萬、其の中の五萬は支那人、二萬は歐洲人である。

本島第一の貿易港にして、港灣の施設の整へる事全島隨一と稱せられ、毎年ジャヴァ島輸出入總額の三割餘を吞吐する。在留邦人八〇〇名、我が國の領事館あり、三井、三菱を始めとして臺銀、正金等の支店或は出張所が多く設けられ、又ジャヴァ島第一と稱せらる邦人經營の千代田百貨店は、目貫の大通りに堂々たる店舗を張つて、豪華な飾り窓に土人を驚嘆させて居る。尙ほ本港はジャヴァ島の軍港として、多くの要塞によつて防備せられ、市内には造船所、兵器廠、砲兵工廠等、軍事に關係したる施設が甚だ多い。ジャヴァの土王様 ジャヴァはもと多數の土侯達によつて治められて居たのであるが、之に對する和蘭人の侵略の跡

を見ると、全く氣味の悪い程定石通りに事を運んで居るのである。

先づ最初に到る處に和蘭の商館を建てる。次第に土侯政府と親しくなるに伴れて、居留地の設定を乞ひ、相互援助の條約を結んで、貿易に關する特權を獲得する。更に度が進むと居留地の周圍に堡壘を築き、港の入口其他の要所に砲臺を構築して、靜かに機會を待つて居る。聽て土侯の國內に内亂が起ると、好機乗すべしと相互條約を濫用して、内亂干渉へと乗出して行く。時には政府を扶けて叛徒を鎮壓し、自由貿易制を確認せしめ、又時には叛徒を擁立して王位に即

かしめ、莫大なる代償を要求する。之ではどちらに轉んでも、事ある毎に着々と權益を擴大することは間違がない。

斯くてジャヴァの土侯も次から次へと亡ぼされて仕舞ひ、今日では名義上でも王領の名を止めて居るのは、島の中部にあるジョクジャカルタ王國と、其の隣りにあるスラカルタ王國の先づ二つだけである。

共に國王は王朝數百年の寶祚を嗣ぎ、領内の土人からは生神様として尊崇され、周圍七軒と云ふ宏壯な王城の中に、一萬の家臣を擁し、數多の侍女にかしづかれ、音楽に舞踊に饗宴に、中世紀其の儘の生活を續けて居るのである。王城の周圍には恰も我が國の封建時代の城下町の如く、旗本一萬騎の邸宅が軒を並べて立ち連り、王宮出仕の武士達は腰にクリーズと稱する長さ二、三尺の刀を落し差しにし、靜かな屋敷街の間を悠々として濶歩して行く。

城門は常に赤や青の色彩鮮かな禁衛隊が守護して居る。王様の行幸には絢爛たる粧ひを凝らした八頭建ての馬車が用ひられ、其の前後左右にはサロンを着飾つた武士達が、嚴しい顔をして扈從する。宮廷内には常に三〇〇人からの舞姫や樂人が養はれて、長い雅樂の傳統を守つて居る。而して此の豪奢な生活を營むために、土王は蘭印政府から毎年四〇萬圓宛もの年金を受けて居るのである。

名義だけの國王を保存して土民の信望を維ぎ、暴力掠奪の腹の黒さをほんの申譯的な恩恵で糊塗し、形式を與へて實質を採らんとする和蘭の蘭印統治上の水際だつた手際は、斯んな處にも表はれて居るのである。

ボロブドールの大佛蹟 ボロブドールの大佛蹟は、ジョクジャ市から北方へ約四軒のクドウ丘陵の上、瑠璃色に晴れ渡つた常夏の空の下に、巍然として聳え立てる石造の大建築物で、印度以東最大の大佛蹟として學者、美術家の嘆賞措かざるものである。

紀元第七世紀から九世紀にかけて、ジャヴァ佛教の全盛期の頃の建造物で、其後回教徒の侵入に遭つて佛教が全く衰微すると共に、十五世紀の頃からは殆んど顧みるものなく、久しく火山の熱灰に埋められ、或は荆棘に封ぜられて、徒

らに狐狸の巢窟となつて居たが、偶々一八一一年ジャヴァが一時英國領となつた時、總督ラツフルス卿が記録によつて此の佛蹟を探查し、工夫數千人を使役して荆と灰の中から此の佛蹟を發掘し、更に再び蘭領となつて以後も歴代の總督が銳意補修に努めて、此の千古不滅の大藝術を世に残したのである。

大佛蹟は凡そ七千餘坪の地域を覆ふて建てられた石造の大曼陀羅、大卒塔婆で、九層から成り、一層毎に廣い廻廊を繞らし、七層の所には總計七十二個の覆鉢式の寶龕があつて、各龕毎に一個の佛像が安置してあり、更に最高所の頂邊には高さ四米と云ふ大きな覆鉢があつて、高く蒼空に相對して居る。

各廻廊の壁面には釋迦の一生を現はした浮彫りが、隙間もなく彫りつけられてある。悉達太子の幼時から、出城の御姿、雪山の難行、菩提樹下の御悟、鹿苑の説教、裁きの場から涅槃に至る迄、深き信仰心をつつ一つの鑿の痕に止めて居るが、風俗、習慣、什器、裝飾等、當時の世相を傳ふる貴重な材料で、總計一二〇面、之を延長すると實に五料の長さに及ぶと云ふ。

建築の用材は氣孔の多い灰色の粗面岩で、一般に砂岩と稱せられるものであるが、之を磨いて此の驚くべき大藝術を殘した努力は感嘆すべく、更に一本の錠も一匙のセメントも用ふる事なく、此の大寶塔を築き上げた卓抜せる技術は全く敬服に値ひする。萬艱を凌いで此の大建築を世に残した敬虔な信徒、渾身の血を傾倒して彫成した當年の巨匠、誰か國破れて佛蹟ありの今日を想倒したるものがあらうぞ。南國烈日の下、劇しい人種の移動と之に伴ふ宗教上の争ひとは、此の畢生の大努力に對して漫ろに人の世の有爲轉變を嘆せしめるのである。

(2)スマトラ島

西北から東南にかけての細長い島で、北はマラッカ海峡を隔て、マレー半島に對し、南はスンダ海峡を挾

んでジャヴァ島に接す。世界第五の大島で面積約四五萬方呎、日本内地の約一・二倍に達するが、人口は八二〇萬に過ぎず、人口密度は一方呎二〇人に足らずして、我が國の北海道の約三五人なるに比して遙に低い。之をお隣のジャヴァ島に較べると、廣さは約四倍近くもあるが、人口は僅に其の五分の一以下である。

西海岸に沿うて高峻なる一帯の山脈が全島を縦貫し、其の中には約一二〇餘の活、死火山あり、奇峯相連つて頗る卓抜なる風光を作る。東方に傾斜せる地は概ね坦々たる平原にして、灌漑の利便多き河流も少くない。地味肥沃なるが上に、赤道は島の中央部を横斷するので氣温高く、富源は開拓さえ進めば頗る大であるが、何分濕氣多くして所謂瘴癘の氣地に漲り、住民少くして交通の便開けず、人跡未踏の地廣く、猛獸毒蛇は密林の間を横行し、海岸にはマングローブの叢林が生ひ茂つて、限りなき沼澤地が到る處に連續すると云ふ状態であるから、隨つて産業の發達も極めて遅々として進まない。

近年ジャヴァ島の過剰なる人口を此の島に移して、開拓を進めんとする計畫あり。既に東南部の方面は移民の渡航によつて開發の緒に着かんとしつつあるが、蓋し地味の豊沃ジャヴァ島に優ると云はれる本島の事であるから、開拓の將來の多望なる事は云ふ迄もない。

産物の重なるものは胡椒、ゴム、石油、煙草、規那、珈琲等にして、殊に石油は蘭印第一の産地にして、全量の三分の一を産出すると云ふ東南部のバレンバンを第一として、東北岸のメダン、ランカト附近にも豊富なる油田が広く分布して居るので、近傍のバンカ、ピリトン二島の錫と共に、蘭印の大富源として重んぜ

られる。都邑は石油の街バレンバンの人口七萬を第一として、和蘭政廳の所在地たる西海岸のパダンの人口五萬、東北岸の要港メダンの二萬等之に次ぐ。

日本人は本島に在留するもの約一三〇〇人にして、主に護謨、珈琲、油椰子等の栽培、漁業、或は茶、雜貨等の取引に従事し、メダンには我が國の領事館が置かれて居る。

之を要するに本島は尙ほ未開の暗黒界たる域を脱しない。全土の九〇%を蔽ふと云ふ其の廣大な密林には晝も尙ほ物凄い野獸の咆哮を聞く。其の位置が南洋諸島中の極西に位し、マラッカ海峡を前にして、古へより印度或はアラビアとの交通が繁く、マルコポーロも東洋からの歸途此の島の北岸に、一年間風待ちをして居たと傳へられる程の要地であるが、其の本土が歐洲の小國和蘭では、土地が廣過ぎて容易に手が着かない。恐らく茲當分の中は、狩人や動植物採取者の世界である以上には出ないであらうが、沃土空しく野獸の蹂躪に任ずのみであることは、誠に惜みても尙ほ餘りある。

(3) 蘭領ボルネオ

世界第三の大島で面積約七四萬方杼、我が本州島に較べて三倍餘、恰も大きな釣鐘でも投げ出した様に、圓々と肥つたボルネオ島の約七割、五四萬方杼は和蘭領である。

島の中央部は岩石峨々たる高原で、山脈は其處から海岸を目指して四方に連亘して居るが、之等の山岳地方では今も探險の及ばない所が可なり廣い。河川にも南流するバット河、西へ流れるカプアス河、東へ流れるカヂャン河等、島が大きいだけに相當な大河が流れて居るけれど、流域の大森林地方は猛獸、毒蛇の棲息地であり、蕃人の巢窟であるだけに、上流を極める事は容易でない。唯だ水量が極めて豊富で、河水を利用すれば苦もなく奥地に深く溯る事が出来るので、勇敢な土人達は之を唯一の交通路とし、獨木船を操つて深く内陸へと踏み込んで行く。恰も大きな土塊を轉がした様な島であるだけに、海岸地方は概ね頗る平直單調にして、良港に乏しい。

氣候は高温多雨の熱帶的氣候である。但し高温多雨なる語は頗る誤解され易く、暑熱の爲めに耐え得られない程に解釋される場合が少くないが、之は大きな間違ひである。勿論南洋方面は何處でも熱帶地の事であるから、温帶地方に較べると氣温は遙に高く、日中活動すれば汗も出るし色も黒くなる。然し我が國の内地の夏に於けるが如き、不愉快な蒸暑さはないのである。一日の仕事を終へて太陽が西山に没したる後、人は行水に、自然はスコールに洗はれて新鮮な氣分に蘇る時、涼風がそよ／＼と膚を撫で、蟲が鳴き螢が飛び交ふ有様は、全く想像以上の爽快さである。夜半からは温度も下り、毛布を用ひねば寝冷えするし、朝は霧が下りて丁度我が國の初秋の様な状態になると云ふ。唯だ熱帶地方の氣象上の缺點は、温帶地の如く四季の變化がなく、一年中殆んど同じ様な氣候の爲めに、生活が單調になり勝ちで、之が熱帯への移住者達が四季折の眺め妙えなる温帶の故郷を懐しがる所以である。

赤道直下に位するボルネオ島では、自然の殆んど濫費とも云ふべき熱帯の華麗な花や、甘美な果物、美し

い鳥や蝶、山のダイヤモンドや海の眞珠、未開拓ではあるが富源の素晴らしさは全く驚嘆の外なき程であるが、然し何分全人口二二〇萬で、一方籽につき平均四人と云ふ淋しさであるから、容易に開發の手が進まない。太陽の光も通さない程の鬱蒼たる熱帯の大原始林には、直立すれば高さが一米半もあると云ふ物凄い大猩猩が餌を漁り、瘴氣漲る沼澤地には特別に悍猛な鱷が恐ろしい眼を光らせて居る。それでも一部開拓された處では米が出来る、護謨がとれる、椰子に煙草に、マニラ麻に珈琲に、其の他鐵に石油、石炭に金剛石等農・林・鑛に亘る豊富無盡の天産物は、大に開發の將來を期待させるのである。

住民は約四分の一がマレー人で、海岸の狭小な平野や河流の低谷に住んで農業を行ふが、残りの四分の三は久しく喰人の蕃風を残したるダイヤ族である。之に海岸に住む海ダイヤと、山地に住む山ダイヤの二種あり、海ダイヤはもとは海上に出で、掠奪を事として居たのであるが、今日では次第に文明人に接觸して往時の蕃風を失ひ、熟蕃として平和な生活を營む。

之に反して山中に住む山ダイヤは、元來外來種族に追はれて海岸を棄て、奥地へ奥地へと遁入したるものであるだけに敵愾心が強く、蕃風依然として手が着けられぬ。女子は幅の狭い布片を腰に纏ふが、男子は我が國の六尺に似た禪を着けるか、又は全裸である。女子の中には胸部から腰にかけて、藤製の環を胴廻しに巻いて居るものがあるが、之は歐羅巴の十字軍の時、留守をした出征軍人の妻君が用いたものと同種類であると云ふ。殊に其の中の悍猛頑迷な種族では、近年迄首狩の蕃風が平氣で行はれて居た。

即ち男子が丁年に達して結婚し様としても、首狩りに經驗の無い者は意氣地なしとして、妻となるもの無い風習であつたから、男子は年頃になると寢食を忘れて首を漁る。今日では文明の浸透と共に、他面では官憲の取締りが嚴重となり、萬一首狩をやれば、其の本人を捕へて首を斬るとの法律を發布し、且嚴重に之を勵行して居るので、此の惡習も漸く跡を絶つに至つたが、然し何れの部落へ行つても鬮體が數十は見られ、豊年祭の時には夫れが神様への供物にされて居ると云ふ。

外來人中でも最も多數を占めるものは支那人である。元來支那とボルネオとの關係は古く宋の時代に始まり、元の忽必烈のジャヴァ遠征隊士が土着してからは、一層緊密となつた。現今大部分は商業及び勞働に従事し、山間僻地の寒村に迄も入り込んで、土人相手に必要品を販賣し、彼等より土産物を買入れ、又之が生産に必要な資金の貸出しを行ふ等、根強い其の發展振りには驚かされる。

日本人は東海岸の各地に發展して、其の數約六〇〇人に上る。概ね護謨、椰子、胡椒等の栽培、鮪、鰹の漁業、或は商業に従事し、勤勉と努力によつて着々地盤を開拓し、南海遙かの彼方に日東國民の氣焰を上げて居る。

都邑はバリト河口のバンジェルマシシ港は人口五萬、蘭領最大の町で、土人は杭の上に建てられた粗末な水上家屋に住み、密集した大部落をなす。英領北ボルネオのタワオと共に、我が國汽船の寄港地である。又西部のカプアス河口にあるポンティアナクは人口約四萬、附近には椰子、護謨、檳榔子等の産出多く、其の

集散地として知られて居る。

英領ボルネオ

英領ボルネオはボルネオ島の北部約二〇萬方呎の土地で、廣さは和蘭領に較べると約三分の一以下であるが、人口は凡そ九五萬に達して蘭領よりは稠密である。之を英領北ボルネオ、ブルネイ、サラワクの三保護領に分つ。

英國のボルネオ領有に偉功を樹てたものは、サー・ゼームス・ブルックである。彼は一八〇三年印度ガンヂス河畔の聖都ベナレスに生れ、長じて東印度會社の社員となり、第一ビルマ戦争に従軍して負傷し、一旦英本國に歸つたが、商略的な才能と冒險的な性癖とは故國に安んずる事を得ず、遂に私財を投じて一四〇噸の小船一隻を買入れ、船員二〇名を雇つてボルネオの西岸サラワクに至り、偶々其の地に叛亂が起きて居るのに乗じて、サルタンの軍を助けて叛徒の平定に偉功を樹て、其の功によつて一八四一年サラワク王に封ぜられた。恰も英國の山田長政で、南海遙かの土人國に白人の國王が、今も相嗣ひで君臨して居るなどは頗る珍らしい。

英國はボルネオが香港とシンガポールの間にあつて、重要な位置を占めたる點に着眼して、先づ一八六三年にはサラワクの獨立を公認して英國の保護領とし、次いで一八八八年には英人投資の北ボルネオ會社が、着々開發の手を進めつつあつた北ボルネオを公然英國の保護領として宣言し、續いて其の間にある土人國ブルネイも亦保護國として、こゝに總面積約二〇萬方呎、人口九五萬の英領ボルネオを出現せしめたのである。

英領北ボルネオはボルネオ島の北東部を占めたる略ぼ四角形の本地と、附近の島嶼を合せたる地域で面積約七萬六千方呎、我が國の北海道より稍小さく、人口は僅に二八萬に過ぎない。一八八一年英國皇帝勅許の下に設立せられたる英領北ボルネオ會社の統治にかゝり、ロンドンの重役會の選舉による總督がサンダカン市に駐在して、外交を除いた一切の内政を總攬して居る。南洋の諸地方が現今統治國の直轄植民地か、又は保護國となり、近代的植民地統治の形體を具

備して居るのに反して、此處だけが依然として一營利會社の統治下にあることは、頗る興味ある存在と云はねばならぬ。

産物は土人が水邊で粗笨なる耕作法によつて、彼等の主食物たる米の栽培を行つて居るのを除けば、他は所謂企業栽培で、護謨、コ、椰子、煙草等が主であるが、殊に護謨は比較的粗放な大規模の經營にも適するので、本領の様に土地廣くして住民の少ない所では、栽培地積の擴張が頗る自由で、常に輸出品中の首位を占めて居る。其他石炭、石油、金等の鑛産物も、埋藏が豊富で將來甚だ有望であると云ふ。

サンダカンは英領北ボルネオの首府で、附近の農園を合せて人口二萬、大部分は支那人で、華商軒を並べ、恰も支那の町の如き感がある。政治、交通、商業の中心地で、當領の開發と共に益々發展の傾向あり、在留邦人は附近の農園及び木材會社の職工を合せて約四〇名で、日本の領事館も此處に置かれて居る。

現在在留日本人の最も多いのは、セレス海に臨める東海岸のタワオで總數約一二〇〇名に上る。或は海上に出で、鮪・鯉の漁業に従事し、盛んに鐘詰、鯉節の製造を營むものもあれば、又陸では荆棘を開き、大密林を開拓して護謨、コ、椰子、マニラ麻の栽培に従事するものもあり、日産ゴム會社、窪田農園等は廣大な土地を租借して、多數の土人或は日本人を使用し、着々開拓の實績を擧げて居る。日本人小學校もあれば、病院もあり、各種の施設を整へて、常夏の地に帝國南進發展の力強い礎石を築きつゝある。

サラワクは廣さ約一萬方呎に達するも、國內山勝ちにして人口は僅に六〇萬を算するのみ。王城の所在地たるクチンは國の西端に近く人口約三萬、英國の理事官が駐在し、市中には教會、學校、博物館等歐風の諸建築物あり、ボルネオ島中では最も進歩した市として知られて居る。

(4) セレス島

本島は細長い四個の半島が人手の様に突出し、其の中央部からは山脈が馬の背の様に各半島を走つて、頗る奇妙な形を呈して居る。面積約一九萬方呎、日本内地の約半分に當る世界第八位の大島であるが、住民の數は四二〇萬に過ぎず、島内には僅に五〇呎の鐵道が敷設されて居るのみであるから、之から見ても開發の程度が判るであらう。

地勢は一帶に高燥にして山岳に富み、活火山が多く、地震の災禍を蒙ることも少くない。氣候は赤道直下に位するも、海軟風に和げられて溫度の較差少なく、殊に南部の地方は乾濕常に季節を一定して、マレー諸島中では最も健康に適する土地として推稱される。主なる産物には椰子、玉蜀黍、煙草、珈琲、甘蔗等の農産物があり、又地中には金、銅、石炭等の埋藏が多く、海からは盛んに魚類、眞珠、鼈甲の類が豊かに採獲される。殊に椰子の密林は到る處に存してコブラの産出多く、其他耕作に適當する肥沃の地、牧場地として良好なる草原等が到る處に横はつて、大に今後の開發を注目されて居る。

南部のマカツサル港は全島の首府で人口約六萬、港口には小島が自然の防波堤をなして風波の患へなく、海岸には倉庫が建ち並び、埠頭には外國の商館が櫛比し、日本人の商店も其の間に榮えて居る。我が南洋航路船の寄港地にして、コブラ、籐、珈琲等の輸出、米、麥粉、織物類、醫藥、日用雜貨類等の輸入が盛んである。

マカツサル港から海路四日半で到達する北端のメナド港は、人口約一萬餘の小市に過ぎないが、美しい街

で貿易が盛んに行はれ、我が横濱港から内南洋の諸島を経て、此の地に達する日本郵船の定期航路が開かれて居る。今日セレベス全島に在留する日本人約六〇〇名の多くは此の附近に住み、或は椰子園の開發に従事し、又は海上に活躍して漁業を營んで居る。

(5) 小スタダ列島

ジャヴァ島の東に當つて、西はロンボック島から東はチモル島にかけて、東西凡そ一三五〇呎の海上に所謂「エメラルドの帯」の一部をなして、碁布羅列せる大小百數十の諸島の總稱で、面積は總てを合せて約八萬方呎、我が國の北海道に匹敵するが、人口は約一八〇萬で其の二分の一に過ぎない。其中チモル島の一部約二萬方呎は葡萄牙領に屬す。

生物學者ワレース博士はマレー諸島の動植物を十二萬六千餘種も集めて研究した結果、バリーとロンボックの兩島に於ける動植物の分布に異常なる差別を發見し、更に之を基礎として着々研究調査を進めたる末、遂にロンボック海峽から北上してフィリピンの西部を走る一線を境界として、西をアジア式マレー諸島、東を濠洲式マレー諸島と區別し、地質時代に於ける分畫線なることを公にした。此の線は今もワレース線と名付け、地理學上では重要な基線となつて居る。

スンバワ島は多く石灰岩で構成されて火山多く、殊に島の北岸に近きタンボラ山の如きは、嘗つては海拔三三〇〇餘米にも及んで居た高峯であるが、一八一五年の大噴火で山頂部數百米が吹き飛ばされ、爆音は遠

く一五〇〇籽を隔てた風下のスマトラに達し、十餘萬の人畜を傷害させた事がある。地味が肥沃で米や煙草の産出が多く、海風の影響で氣候も凌ぎよく、約一五萬の土人は或は水田を耕作し、或は馬車馬として熱帯各地に需要の多い馬、ジャヴァ島の水田耕作に使役せられる水牛等の牧養に従事して、平和な生活を樂んで居る。

チモル島は列島最大の島で約三萬餘方籽に達するが、山嶽重疊して中には海拔三〇〇〇米に近い火山の秀峯もあり、島内は交通不便で、最近迄は首狩の蠻風を有するポリネシヤの蠻族が割據したる程である。沿岸の平地は地味肥沃にして農業が盛んに行はれ、珈琲、椰子實、米、麥、煙草或は果實類の産出が豊かである。蘭領の首都は南部のクローバン港、葡萄牙領の首都は北部のデリー港であるが、共に港灣の施設も十分に整はない淋しい港街で、商業上の實權は多く支那人や印度人の商人が握つて居る。

(6) モルツカ群島

セレベスとニューギニア兩島の間、約八六〇萬方籽の廣漠たる海洋中に散在せる大小無數の島々の總稱で、面積約六萬方籽、全部が和蘭の領地でアンボynaに知事が駐在して統治する。大部分は火山岩から成つて地味肥沃に、丁字、肉荳蔻、其他の香料を産するので夙に香料諸島の名で知られる。

陸には、米、珈琲、椰子、カ、オ、煙草等の天産物が豊かであり、海には又眞珠、海參等の水産物が多く、誠に天與の樂土であるべき筈であるが、惜しい事には衛生の施設が全然缺けて居るので、赤道直下に位

して常夏の暑熱と不斷の濕氣とは、恐ろしい熱病菌の淵藪たるの感あり、人の健康に適せない所が多く、随つて住民の數も諸島を合せて五〇餘萬に過ぎない。

土人は概ね頗る惰け者で、豊富な天産の間に安逸を貪り、支那人やアラビヤ人が之に代つて經濟上の實權を握る。嘗つて東洋の香料貿易を獨占したアラビヤ人が土着して、今日でも商業的に支那人よりも優勢な地位を占めて居る事は、南洋でも頗る珍らしい現象である。日本人はアラフラ海のアルー島に數百名が居住し、眞珠貝の採取に従事して宛然日本村を建設し、南進發展の先驅者として日本男兒の意氣を示して居る。

(7) 蘭領ニューギニア

ニューギニアは我が南洋委任統治領と赤道を隔て、相對する飛鳥形の大島で、一にバプア島の名あり、面積は七七萬方籽、我が國內地の二倍餘に當り、北極海のグリーンランドに次ぐ世界第二の大島である。而して其の西半部、東經一四一度の線を境とする以西の約三五萬方籽、略ぼ日本内地の廣さに匹敵するものが即ち蘭領ニューギニアである。

住民は全島を通計して約八〇萬と推算される。即ち人口密度は一方籽につき一人と云ふ割合で、サハラ沙漠を含むアフリカ大陸に比して、尙ほ其の五分の一以下の稀薄さである。殊に其の中の蘭領の部分の如きは住民僅に三〇萬に過ぎず、廣さが日本の内地位もある處へ、東京市の人口の約二十分の一に過ぎない僅々三〇萬がバラ蒔かれて居ると云ふのであるから、如何にニューギニアが無人の處女地であり、未開の謎の島

であるか、判るのである。

大部分は千古斧鉞を入れた事のない未開の原始林で、今も尙ほ奥地には探險の手も及んで居ない。統治國に經濟的な進出力がなく、土人は又天性懶惰で規則的な労働を嫌い、拱手座食、原始の全裸生活に甘んずると云ふ状態であるから、豊かな資源も全く地に棄てられて顧みられないのは誠に惜しい。

近年一部分では棉花やコ、椰子、麻、護謨、煙草等の栽培が始められたが、地味頗る肥沃にして、豊かな其の産量は世界的な農・林産物の産出地として、洋々たる將來性を裏書きして居るのである。又氣候も面積が廣大なのと、赤道の直下に位する事の爲めに概して年中酷熱なるを免れないが、地形が狭小にして海風の影響を受け易い海岸地帯、殊に蘭領のヘルフィンク灣一帶の農業好適地方面は割合に穏かで、我が南洋諸島に較べて寧ろ凌ぎ良い程であると云ふ。

何しろ人口稀薄、資源未開發の處であるから、將來開拓が進むに伴れてどんな富源が藏されて居るか判らない。涯知らぬ内陸から海邊にかけて、鬱蒼として生ひ茂る巨木の密林には黒檀、白檀、鐵木等の建築材や家具用材を始め、或は檜材の代用として使用される山桐の類、製紙用パルプの原料たる雜木、其他染料材、油源用材等の貴重な樹種が、天を壓して縦横に枝を擴げて居る。嘗つて歐洲の流行界を風靡したる極樂鳥は、黄金色の房々した美しい翼を以て、輕やかに梢の間を飛んで居る。ルリやオームの群れは紅白熾烈な色調を以て、四時陽光の直射する緑り永への大原始林を彩る。

調査不十分で尙ほ未知數の域を脱しないが、金、銀、銅、石炭、石油等の有用鑛物は埋藏頗る豊富にして、殊に金の如きは其の存在が確認せられたりと稱せられ、將來鑛産物の世界的な産出地たるべしと豫想される。其他海には各種の貝類、鼈甲、海鼠、海綿等の水産物が多く、殊にヘルフィンク灣の西岸は鯉、鱒の豊産地として知られる。

然し斯程の豊富無盡の大寶庫も、人口僅に三〇萬では全く手が着かぬ。然も之等三〇萬の土人たるや、不斷の天恵に馴れて懶惰無氣力、其の日其の日を無爲に消して行く、殆んど動物と選むなき全裸の原始生活者である。蓋し南洋の熱と光りに飽迄恵まれた百花燎亂の此の良土を、徒らなる所有意識にのみ支配されて、固く門戸を閉鎖して、第三國の開發の手を拒否し續けつゝある蘭印政府の政策は、正に天意に背くものと云ふべきであらう。

此の間にあつて僅に我が南洋興發會社は、特別な努力によつて蘭印政府から、ヘルフィンク海のモミ、サルミ兩地方で數千町歩の地を借り受けて、昭和九年以來棉作事業を經營し、又其の奥地でワニスの原料とするダマール樹脂の採取に従事して居るが、灼熱蠻夷の土地で二千名からの土人苦力を使役して、僅に三〇餘名の會社關係者が着々實績を擧げ、帝國の南方生命線の確保に努めつゝある事は、誠に其の勞苦多謝するに足るものである。

【南洋興發の開拓事業】

南洋興發會社は我が委任統治領に於ける糖業の發達を目論んで、事業界の俊傑松江春次氏が創設したるものである。艱苦十年其の間幾度か、血の浸む様な荆棘の道を踏み分けて、遂に今日では糖業は勿論のこと、水産に鑛業に、我が南洋群島に於ける諸事業の七割は、其の手によつて經營されると言ふ程の大成功を収めるに至つたが、更に同會社はまた蘭領ニューギニアから葡萄牙領チモール島に迄も進出して、貿易に産業開發に、我が南進政策の先驅として幾多の國家的事業を經營して居るのである。

殊に蘭領ニューギニアに於てはヘルフィンク灣のモミ河の南岸で、約二三〇〇町歩を蘭印政府から借り受けて、昭和九年以來棉花の栽培を開始して居るのであるが、酷熱の地に群がり寄する猛蚊の襲來に堪へ、恐ろしきマラリヤの熱帯病と戦ひつゝ、怠け者の土人を使用して、千古の大密林を切り開ける其の困難さは、誠に言語に絶するものがある云ふ。

三抱えも四抱えもある大きな鐵木、内地で使ふ鋸等では到底齒も立たない程に堅い鐵木が、次から次へと立茂る密林を、山蛭や蚊の襲撃と戦ひながら、二日も三日もかゝつて一本一本と切倒して行く。切り倒した材木は次には火をつけて之を燃するのであるが、硬い鐵木の生木と來ては、燃え切らすのも一骨である。斯くて出來上つた耕地には畦を作つて棉を蒔く。而も之等の勞働には元來が仕事嫌ひの土人苦力を使ふのであるから、之が苦心も亦一通りでない。第一に人口稀薄な土地柄とて、苦力を集めることが一難儀である。又集まつて來たものは、出來る限り散らさぬ様な方法を探らねばならぬ。天性の怠け者に、勞働の訓練をすることも容易でない。之が爲めに苦力小舎も建てねばならぬ。娯樂の設備も考へてやらねばならぬ。教會も必要であるし、病院も必要である。僅に三〇餘名の會社關係者で二千人からの土人苦力を使用して、此の灼熱の地に然も蘭印政府の壓制の下に、着々事業の實績を擧げて居るのであるから、同胞の此の隱忍と努力には全く頭が下るのである。

更に南洋興發會社では棉花の栽培の外、牧畜も行へばダマル樹脂林の經營も行つて居る。殊にダマル樹脂林の經營の如きは、棉花の栽培地から海上二三〇哩も離れた、ナビレの海邊から約四〇軒も分け入つた山深き奥地で、其處では三萬餘町歩の地域に一〇萬本の採取可能樹を育て、僅に一〇人内外の日本人が二〇〇名からの土人苦力を使用し、今日毎年二〇萬斤からの樹脂を採つて居る。

尙ほ此の外サルミ地方に於て約三五〇〇町歩の地を租借して、昭和十三年度から棉花の試作が始められたが、何一つ慰安も娯樂もないことは勿論、蠻土深き地に身の危険も忘れて、一步一步と貴き事業を築き上げて、只管我が南方の生命線を護りつゝある同胞の涙ぐましき努力に對しては、國民は萬腔の謝意を捧げねばならぬと思ふ。

七、日本と蘭領印度

(1) ジャガタラ文

島原の亂に手を焼いた幕府は、外人を忌憚する念愈々深く、寛永十六年七月には鎖國の嚴令を發布して、邦人の海外渡航を禁止したが、尙ほ之だけでは安心が出來ないので、更に同年の九月には外人の血脈を引いたものを國內に置くことは、他日異教を盛んならしめる動因となる恐れがあるとて、遂に平戸、長崎等に在らせる和蘭系統のもの十一名を、ジャガタラ（ジャヴァ島）に放逐した。彼の有名な「ジャガタラ文」は、此の時放流された少女お春がジャヴァより寄せたる書簡と傳へられるが、哀切限りなき流人の心情が文中に溢れて、一讀人をして泣かしめるものがある。

其の一節に

「はづかしながら筆にまかせ參らせ候。そこもとよりの御文、ことに御いんしんとゞき候。まづ御つ
つがなく御座なされ候由、めでたく存じ上げ候。さて、其許の御文くりかへし見參らせ候へば、ひとし
ほ御なつかしさ、御すゐもじなされ下さるべく候。わが身は今につれなき命にて、ながらへ居り候。いつ
のとし月にか日本を出でまゐらせ候や、いまは定かもわきまへがたう、こなたのとし月にはなぞらへがた
く、たゞよるひるとなく、ふる里のこと束の間も忘れやらず、思ひなぐさむひまも御座なく候。たま
故里にて見申したるに、おなじものとは月日の光ばかりにこそ、そこもとにかはらず候ゆゑ、ひるは日
の出るかたを眺め、夜は月の出るかたを打ながめ、袖のかはくまも御座なく候。かゝる憂世にながらへ
て、返らぬ昔を戀しやとのみ思はんより、たゞ此世になき身ともがたと祈り參らせて候へ。さりながら又
うちかへし思ひかへせば、世をも人をもうらむべきにて御座なく候。幾萬の人か此の世に生まれ來る中
に、我身いかなれば、異國の人の子と生れ出でたる事も、前の世のむくいありてこそと思ひ候。しからは
今更世をも人をも、恨み申すまじき事に御座候。」云々

椰子の葉末永へに綠りに、熱風常に吹き捲くる南洋の天地に、櫻咲く故里を思ひ出で、涙する彼女の愁
顔、眼の邊り見るが如くである。傳へられる處によると彼女の女は居留の蘭人と、長崎生れの女との間に生れ、
母方の縁ある方に養はれて居たが、心ばえ誠に賢く優しきが上に、混血兒に特有な美貌の持主であつたと云
ふ。行末は玉の輿どと人々窃に語り合へる時、突如十四歳の秋追放の命を受け、無理矢理蘭船に乗せられて

ジャヅアに送られたのである。彼女は其後外人に嫁し、屢々書を日本に送つて居たが、元祿九年彼の土に病
死し、次いで其の子も亦母の國を戀ひ、荐りに故舊に交通を續けて居たと傳へられる。

斯様な悲劇は到る處に惹き起されて居たが、然し和蘭人は布教に關係が無かつた爲めに、長崎の出島に商
館を開き、支那人と共に依然通商を續ける事を許されて居た。之から明治維新迄約二〇〇年の久しきに亘つ
て、ジャヅアを本據として日本の歐洲貿易を獨占した和蘭人が、どんなに旨い汁を吸ひ續けて居たかは、想
像に難くないのである。

(2) 在留邦人の活動

現今蘭印には約七千人近くの日本人が在留して居る。而して其の職業は在留邦人の約三二%は商業に従事
し、其他水産業、農業、工業等を營んで居るが、殊に商業方面では主に都會や其の附近の消費者に、中級乃
至下級の商品を販賣する小賣商店の經營に當るものが斷然多く、又輸入卸商方面にも相當の進出を示して居
る。輒近我が國工業界の異常なる發展に伴ひ、比較的優秀な商品が安價に造られて、個人當り購買力の低い
蘭印土人大衆の必需品となり、邦人小賣商は大に活氣を呈して居たが、其後最近では蘭印政府の輸入制限令
が實施されたり、從業員の入國制限令に禍ひされたり、或は又支那事變に基づく華僑の排日貨、本邦品の値
上り等の事もあり、小賣商關係の邦人は今や相當苦境に立つて居る様である。

水産業方面では二つの邦人會社と五つの個人企業が、主にセレベス島で鯉、鮪の漁業を中心に活動し、又

鑛業方面では二つの會社がジャヴァとボルネオに、銅鑛と石油の試掘に勵んで居る。

更に農業方面ではスマトラ、セレベス、ボルネオ等の諸島を主として、護謨、油椰子、珈琲、茶、規那、コブラ、麻、胡椒、甘蔗、棉花等の栽培に當り、之に従事する邦人會社は二〇餘の多數に上つて居る。而して諸島に於ける邦人の分布はジャヴァ島を第一位に、スマトラ、セレベス、ボルネオ、モルッカ諸島の順序であり、又種族別では内地人が最も多くして總數の約九六%を占め、以下臺灣人、朝鮮人の順である。

(3) 貿易關係

最近の我が南洋全土に對する貿易額約四億五千萬圓の中、蘭印に對する分は其の約四割、二億圓に上る。我が國が蘭印より輸入する主なるものは生ゴム、錫、石油、木材、採油用原料等で、我が國より輸出するものは綿織物、綿絲、人絹織物、メリヤス製品、雜貨類等である。

近年は蘭印政府の極端な保護政策に災ひされて、日本の對蘭印貿易は年毎に減少の一路を辿つて來た。即ち蘭印政府が和蘭本國の産業を保護すると云ふ建前から、其の輸入額の何割迄は和蘭品たるべき事と云ふ様な、不當な割當制を設けたので、日本品の進出は著しく窄められたのである。

例へば従來は蘭印で消費する綿布の六六%迄は、日本から輸入されて居たものであるが、今では二五%以上は許さなくなつた。陶器の輸入も五割迄として制限された。斯くて貿易關係は今日では四、五年前に比して、約半減と云ふ萎縮振りであるが、之は決して此の儘に看過し得る問題ではない。日、滿、支、南洋を一

環とする大東亞共榮圈確立の爲めに奮起せる日本は、宜しく有無相通の經濟原則に立つて、世界の寶庫と稱せられる蘭印當局の迷夢を開き、御朱印船の昔から一貫したる傳統的交誼を新にして、兩國經濟提携の實を擧げ、共存共榮の理念達成に邁進せねばならぬのである。

尙ほ豊富無盡の資源に恵まれたる蘭印には、歐米各國が競つて投資して居るので、其の總額は約五四億圓の巨額に達して居るが、其の國別けは和蘭本國の約三七億圓（六七%）を第一として、英國の八億圓、米國の三億二千萬圓等が之に次ぎ、我が國の投資額は遙に下つて約八千二百萬圓に過ぎない。

(4) 大東亞共榮圈の一環

蘭領印度一九〇萬方呎の廣大な領土の中で、開拓されて居るのは僅にジャヴァとマヅラの内領、總面積の七%を占むる地域だけで、残りの九三%、即ち我が本州の約六倍半に當る廣い土地は、住民を總計しても僅に一九〇〇萬人に過ぎず、人口密度は一方呎につき平均一人と云ふ貧弱さで、而も其の殆んど全部が原始的な其の日暮しの土人であると云ふ、全く未開無人の綠りの島計りなのである。

斯うした廣大な土地が、日本の直ぐ眼と鼻の先きにある大洋の中に、ゴロ／＼と未開の儘に轉つて居る事實を見る時、果して之でよいものかと考へるのは、單に吾等のみではないのであらう。天與の廣大なる良土を、唯だ徒らに自己の所有慾を満足せしめる爲めに占有すると云ふだけで、無人の儘に放擲し去るが如きは、抑も／＼如何なる權限によつて敢てし得るものなるかと、開き直つて反問したくなるのである。自己の

力が及ばぬからと云つて、何時開發し得ると云ふのもない處を、其の儘柵を高く結い繞らして、外國人の立入りを一切拒否し、富源空しく地に委したる儘で、而も「俺の土地だから、勝手に御座る」と強情を張るが如きは、誠に天理に悖る所業と云ふべきではあるまいか。

土地狭くして住民多く、工業盛んにして原料の供給に悩む日本としては、眼前に展開されたる此の大矛盾を、此の儘看過し得る筈のものでない。而も今や新しき東亞を建成すべき大共榮圏の確立へと、力強く踏み出して居る時に於てをや。

抑々日本人の活動の天地としては、北部の滿洲、蒙古等も重要であるが、之等の地方は主に邦人の土着を必要とし、而も其の點に於ては到底其の地の住民と競争することは望まれない。又工業原料の點に於ても、當分は豊富なる供給を期待することは覺束ない。然るに南方の蘭印地方は商業的な活動の天地であり、又邦人の移民は勞力に於て、天性懶惰な土着民に比して遙に優れたる素質を有して居る。更に又工業の原料としても、現代物質文明の發達に缺くべからざる石油、錫、ゴム等の世界的な供給地であり、又我が商品の市場としても、其の巨大なる人口は滿洲、蒙古に比して遙に優つて居る。

尙ほ我が國の北方に對する經濟的な發展が、ソ聯との間の思想的、武力的摩擦を多分に豫想せしめられるのに反して、南方では佛蘭西も和蘭も共に我が盟邦獨・伊の勢力下に全く屈服し、英國亦潰滅に瀕して既に後退の狀勢が顯著である。之こそ正に久しい歐羅巴人の東亞から、「東洋人の東亞」に引戻すことの好機到來

と云ふべきであらう。

人口的發展の餘地が得られる。重要な原料の供給と、我が商品市場の發展が約束される。支那の抗日勢力を自滅せしめて、日本依存の新東亞建設を容易ならしめる。ソ聯との摩擦を少からしめて、北洋に於ける日本の勢力を安定せしめる。實に一石幾鳥とも云ふべき我が南方發展は、此の好機を掴んで大飛躍を遂げしめねばならぬのである。

今や有史以來の大事變に遭遇して、世界的な大試練を経ること茲に幾年、歐米依存の舊套から脱して、東亞共榮圏の確立に邁進しつつある日本にとつては、南海の寶庫蘭印と傳統的な交誼を新たにし、兩國提携の實を擧げることが、蘭印當局の好むと好まざるとに拘らず、國防上の問題であると同時に道義上の問題でもある。勿論蘭印には各國の資本が錯綜して居る。米國其他が國防上、軍事資源上常に重大な關心を拂ひつつある處である。然し過去は兎も角として、大經濟ブロック結成時代たる今日以後は、大東亞共榮圏内に包含さるべき蘭印の地域が、依然歐米各國の爭奪の目的物に供せらるゝが如きは、新東亞の指導者たる日本の斷じて許さざる處である。東亞は東亞人の天地である。之をリードするものは東亞の安定勢力たる日本である。殊に今日米國其他より物資の禁輸、又は貿易制限を迫られつつあるの際、東亞の天地就中資源豊かな蘭印が、事實上日本の生命線たらざるを得ない事は、恐らく世の具眼者の齊しく諒認する處であらう。

然し之が爲めには翻つて日本國民も、亦自ら顧みて深く反省する處がなければならぬ。過去半世紀に亘る

我が南洋發展の結果が、得る處の比較的少なかつたのは、從來日本人は經濟提携とか共存共榮とか云ふ様な理想を持たず、一種の割込み計り考へて來た處にある様である。機會の到來と共に、宜しく日本人は非常の決心と、堂々たる大國民的態度を持して、先づ此の不評判を是正する事に努めねばならぬ。

即ち從來の小手先きの進出を排して、帝國としての確乎不動な南進政策を樹立する事が先決問題であり、渡航者は又先方の土地と人とを十分に呑み込んで、出来るだけ土地の生活様式に同化すること、自己の利益を圖ると同時に其の土地の利益を考慮すること、能ふる限り土地の資本と提携すること、出来るだけ土民を雇傭して親善を計ること等をよく考慮せねばならぬ。日本人は理智に長け、又頗る勤勉であり、多くの長所を具へて居るから、之等の點をさえ注意すれば決して失敗する事はないのである。

斯くて帝國の眞意の那邊に在るかを了解する時は、蘭印七千萬の民衆は喜んで日本の懷に飛込んで來るに違ひない。

第六節 フィリピン(比律賓)

一、位置と面積

フィリピン群島は我が臺灣島の南に當つて、東西約一一〇〇浬、南北凡そ一〇〇〇浬の圏内に散在する大小無慮七〇八三の島嶼より成る。其の最北端にあるイヤミ島は、我が臺灣の最南端をなせる鶯巒鼻の岬から

僅に一〇〇餘浬を隔つる海上にあるので、快晴の日には遙に北方に臺灣の連山を望むことが出来ること云ふ。

總面積は約二九萬六千方浬にして、略ぼ我が國の本州、北海道及び九州を集めたる廣さに匹敵するが、中でもルソン(一一萬方浬)、ミンダナオ(九萬方浬)の兩島は最も大きく、此の二島を合せると總面積の七割に達す。總數七千餘島の中廣さ一方哩を超ゆるものは僅に四六六島にして、残りの大部分は漸く波上に岩礁の一部を現はせる、海洋中の砂塵にも等しい無人の小島嶼である。

二、地勢と産業

(1) 地勢

群島は日本列島と同様に、アジア大陸の太平洋に面する地形的前衛部をなすものである。即ち蜿蜒として東海に起伏するヒマラヤ山脈の餘派は、バプア山脈の餘勢の西北に伸びたるものと此の群島上に衝突し、其の間には更に縦斷火山脈が、地殻の弱所を破つて噴出するあり、此處に複雑無比なる諸島を形成し、地形上の興味ある謎を投げて居るのである。

随つて山岳丘陵は諸島の到る處に起伏して、三二四一米のアポ山を始めとして、二〇〇〇米以上の高峯一五もあり、噴煙濛々たる活火山だけでも一二峯を數へる。温泉の湧出あり、風光明媚の地亦乏しくないが、一方では之に伴ふ地震の災害頻繁にして、颶風の襲來と共に諸島住民の最も怖れる所である。

海岸線の延長は島嶼の集積だけに迂餘曲折が多く、頗る複雑多岐にして長さ一萬八千餘浬と稱せられ、日

本の二萬九千餘軒、合衆國の二萬八千餘軒に較べて、著しく其の大なる事が知られるが、近海は潮流が急なる上に暗礁が多いので、出入の多い割合に良港の發達は見られない。

氣候は全島熱帶圏内に位する爲めに、年中恰も我が國の夏に於けるが如くであるが、島嶼である關係から海洋によつて調節される處多く、生活上にはさ程困難を感じない。過去二〇年間に於ける各地の平均温度は二六度餘で、最高温度は三八度、最低は一四度半を示したる事あるも、斯くの如きは稀有の例に屬し、大抵は此の中間温度を上下する有様である。

更に季節風の影響によつて全土乾濕の二季に分れて居るが、一般に雨量は多くして、爲めに昔は瘴癘の氣地に漲り、惡疫流行の本場として恐れられて居たが、米領以來、一般衛生設備が著しく改善されたので、天然痘やペスト、或はコレラ等の惡疫は殆んど近年發生を見ることがない。

(2) 産業

暑くて雨が多い關係から植物の生育には逃へ向であり、それに地味は頗る肥沃と來て居るので、僅少な勞力と費用で多大の收穫を擧げる事が出來ると云ふ、フィリピンは誠に農業上の樂土である。随つて農業は本島に於ける住民の主産業にして、米、マニラ麻、コブラ、甘蔗、煙草等の農産物は、建築材及び家具用材等の堅木類、ゴム、樹脂、籐、竹材等の林産物と共に、本群島の主要富源として重んぜられて居るが、然も今日開拓されて居るのは未だ全耕地の僅に一割二分に過ぎず、沃土尙ほ概ね千古斧を入れざる密林に蔽はれて

居る有様であるから、群島農業の將來は頗る多望であると云はねばならぬ。

農産物中マニラ麻とコブラとは共に世界第一位の産額を擧げて居るが、就中マニラ麻はミンダナオ島のダヴァオ附近を中心として、日本人の之が栽培に従事するもの一萬四千人、投下資本も約六千萬圓の巨額に達し、今日の顯著なる其の生産は、全く邦人の血と汗の賜物である。

ダヴァオの日本村

マニラ麻は日本の芭蕉に酷似した纖維植物で、一名アカバとも云ふ。熱帯に於ける粗硬纖維の世界的資源として重視されるもので、比重が軽くて水に浮く性質を持ち、且海水中で耐久力が強いために、船舶の綱索用として、又は漁網として特殊の用途を持つが、更に製紙の原料としても莫大な使途があり、又上等品は眞田の原料として婦人帽を作るにも用ひられる。

日本人のダヴァオに於ける發展の最初は、明治三十八年故太田恭三郎氏が日本人約一八〇人を引率し、同地に渡航してマニラ麻の栽培に従事したる事に始まる。太田氏は之等の移民と共に惡戰苦闘の結果、明治四十年には太田興業會社を創設し、邦人活動の先驅となつてダヴァオ今日の發展の基礎を開いたが、不幸病魔の犯す處となり、大正六年には僅に四二歳で異郷に不歸の客となつた。今でもダヴァオの西郊邦人集團の中心地たるミンタルの丘には、壯大なる紀念碑が建てられて、此の開發の恩人の偉業を不朽に傳へて居る。

爾來茲に三〇餘年、今ではダヴァオ市と其の近郊を主として約一萬人からの日本人が在留し、其の八割は熱帶烈日の下、孜々として農場に出で、麻や椰子の栽培に従事し、堂々日東男兒の氣を吐いて居るのである。

勿論熱帶圏内と云ふよりも、赤道直下と云ふ方が適切な位な常夏の天地に働いて居るのであるから、年中暑いには違

いないが、然し日本移民の多數が集團するマニラ麻耕地は、フィリピンの最高峯海拔約三千米のアボ火山の裾野にあるので、氣温も可なり低下するし、又元來がアカバ（麻）の繁る日影で仕事をするのであるから、馴れれば想像する程に苦しくはない。

何しろ一年を通じて氣温の平均が室内で二六度と云ふのであるから、彼等の生活は頗る簡單である。家は所謂竹の柱に茅の屋根で、床は濕氣を防ぐ爲めに三尺から一間位高くし、床下は物置に使ふ。熱い國であるから日本の様な家屋の構造にすると、迎も住む事が出来ないものである。着物も夏向きの労働服が二、三着あれば一年中過せるし、夜の寝具も毛布一枚あれば事足りる。食物は米を常食として、ウドン類や其の他味噌、醬油を用ひ、日本に於ける食事と大差はないが、一步家を出れば、バナ、ヤバイヤ等の熱帶果實が豊富に得られるし、水は勿論雨水であるが、熱帶特有のスコールが毎日訪れるのでタンクに貯水して自由に使用が出来る。

風土病としてはマラリヤやアメーバ赤痢等があるが、マラリヤは蚊に食はれぬ事と、雨に濡れた後を注意さえすれば防げるし、アメーバ赤痢は暴飲暴食を慎みさえすれば、罹る心配はない。それにダヴァオ市にも農場内にも、相當設備の整つた病院が建てられて患者の治療に當つて居る。子弟の教育と、耕地内に於ける娛樂機關の無い事とは、何處の植民地でも共通な悩みの種であるが、此の點は此處でも全く同様で誠に氣の毒である。教育機關としては農場の中心地ミントルに日本人小學校があつて、一通り普通教育を実施するだけであり、又娛樂の方はラヂオか蓄音機位のもので、偶々内地から浪花節語りでも訪れ様ものなら、大入満員の歡迎である。

元來フィリピンの土人労働者は獨立自營の才能に乏しく、夫れに大抵は懶けもので、頗る仕事の能率が上らない。蕃人は山林に起居して鳥獸魚類を捕へ、果實を食し、未墾地の開拓などは眼中にない。そこへ行くと日本人労働者は勤勉であり誠實であり、忍従よく艱苦を突破するので、屢々排日の聲も起るが、何時となく終熄して日本人労働者はドン

／＼増加して行く。又内地からの渡航者ももとは十年辛苦の成功者の話を半分聞いて、一攫千金を夢見て渡つた不心得者もあつたが、近年は次第に移民の精神も健實となり、永住的の意志を以て、奮闘よく新生活の開拓を目指す頼母しい姿と變つて來た。

現在日本人の所有及び租借の土地を合せると約三萬二千町歩にも達し、而も其の四割は未開拓の儘に残されて居る上に、フィリピン人やアメリカ人の所有地も、實際は日本人の手によつて開拓するより外望みがないのである。ダヴァオ州の面積は日本の四國位あるが、然も四國の人口が三五〇萬を超えるのに較べて、ダヴァオは僅に十三萬五千人、全面積の九〇％は處女林で、農業好適の未開墾地は今日尙ほ百萬町歩に近い。更に隣州のコタバト、アグサン兩州の未開地は遙に廣い。總て日本労働者の開發の手を俟つて居るのである。されば此の地方に於ける邦人發展の將來は頗る有望で、愈々善良可適の労働者と、潤澤なる日本資本を投下し、勞資併進、大に我が南進發展の實を擧げねばならぬ。新移民法の發布は邦人の進出に至大の障礙を與へるものであるが、宜しく日本國としては彼等の妄念を是正して、喜んで比島開發の恩人日本人を迎へしむる様に努めねばならぬ。

礦産物では金、銅、鐵、マンガン、石炭、石油等が採掘されるが、中にも金はルソン島の北部、夏期都市たるバギオ市に近きアンタモック金山を主産地として、本群島礦産物の首位を占め、又鐵はスリガ礦山は埋藏一〇億噸と稱せられ、石油、マンガンと共に極めて多望なる將來を持つて居る。

水産物はフィリピン群島を構成する七千有餘の島嶼が、自然の好漁場をなして居るが、土人の漁撈法は頗る幼稚なるが爲めに、鼈甲、眞珠、海藻及び介類の採獲を主として自給にも足らぬ有様で、政府では近年若りに之が振興に努めて居る。邦人漁夫の近海に活躍せるもの約一千名に及んで居るが、蓋し豊富無盡の水産

物は、將來も永く日本人漁夫活動の好個の天地であらう。

次にフィリピンの貿易關係は、全く米國依存で始終して居る。即ち毎年米國向けの輸出額は、總額の約七八%内外を占め、又米國からの輸入額は總輸入額の約六〇%に達す。日本は米國に次ぐ第二の貿易國であるが、日本への輸出額は總額の約六%、又日本からの輸入は總額の一三%内外に過ぎない。而して此の國の貿易收支に就て見ると、米國を除く他の諸國との貿易關係に於てはフィリピンは常に入超の状態であるが、米國一國に對する出超は之を償つて餘りある状態で、結局毎年輸出超過國として、豊かなる其の富源を誇つて居るのである。

三、住民と政治

(1) 住民

フィリピン群島の總人口は約一三五〇萬と推定され、一方籽につき平均四八人餘、總數七千餘を算する島島の中でも、約半數は無人居島である。

原住民は黒色人種たるネグリートで、開化の程度極めて低く、今も尙ほ首狩の蠻風を残せるものあり、次第に驅逐せられて山岳地帯の奥深く遁入し、全く民族的滅亡の過程を辿つて居る。現在住民の約九割を占めるものはマレー種族に屬するフィリピン人で、キリスト教を信奉し、早くから西班牙や亞米利加の文化に接したので、南洋方面に住む東洋人の中では最も進んだ文化を持つて居る。恐らく日本人を除けば、スエズ以

東の最も進歩したる人民であらう。

此の外在留外國人も數十萬に達するが、其の約七割を占むるものは支那人で、南洋各地に於けると同様華僑の經濟的實勢力は侮るべからざるものあり、其他亞米利加人、西班牙人等が多く、日本人の在留者も約二萬四千人に達す。

【フィリピンの華僑】

フィリピンに於ける華僑の活躍は、早くも西班牙の領有以前から専ら交易によつて行はれて居たが、一五七〇年此の地が西領となるや、土人を征服する上からも、土地の開発、物資の需給の上からも、西班牙は華僑の通商を奨励し、之に保護を加へたので、華僑の人口は年毎に増加して、既に三〇〇年の昔に於て三萬三千に達し、單に商業のみならず工業方面に迄も進出して、其の勢力は侮るべからざるものがあつた。

斯くて之が爲めに土着民は壓迫を感じ、之に迫害を加へて叛亂を起したることあり、政府でも之が統治に手を焼いて、次第に華僑の活躍に制限を加へる様になつて來たが、然し根が「世界の雜草」と云はれる華僑の事であるから、抑えられても迫害されても、依然として根強く蔓を張つて、米領となる直前の一八九六年頃には、一〇萬を突破して居た。

米領後アメリカは本國と同様に、華僑の入國を禁止したから、爾來其の數は大して増加を見ず、位置の近い割合に南洋の他領に比して著しくない。然しそれでも尙ほ之等華僑達は、比島領内の商業、就中小賣商の九割を占め、殊に其の經濟階梯に於て大きな懸隔のある歐米人と、土着民との間に介在して、物資の仲介者としての利益を壟斷して居り、歐米商人も仲介者たる華僑の手を経ずには、商賣も不能な状態である。

元來國家に確たる移民政策がある譯けでもなく、又組織ある保護奨励の爲めに進出するものでもなく、唯だ同族、同郷、同系が互に相牽き相扶けて、以て一つの社會を組織しつゝあるものだけに、彼等は經濟機構のあらゆる細微なる龜裂をも見逃さず、グン／＼と根を張つて行く其の辛抱強さには驚くべきものがある。今次事變の勃發と共に、彼等華僑の日貨排斥は他の南洋各地に於けると同様に、當初は頗る深刻なるものであつたが、何分其の多くが小賣商であるだけに、儲かる日本商品と絶縁する事から來る彼等の損失は頗る莫大で、爲めに最初の猛烈なりし排日貨の勢ひも、年と共に次第に衰へて行く現状である。

(2) 政治

群島の歴史

フィリピン群島が世に知られるに至つたのは、西暦一五二一年世界周航の探險家として名高いマゼランが、西班牙國王の命を受けて太平洋の航海中、偶々此の島を發見して西班牙領となしたる事に始まる。其後マゼランは氣の毒にもセブの酋長の毒矢に仆れ、空しき骸を異郷の土に埋めたが、彼の一行は之に刺激されて大に勇を振ひ、隊長の志を襲いで喜望峯を迂回し、世界周航の大業を完成した。

其後一五四三年には西班牙の皇太子フィリップの名を採つて、之等の諸島をフィリピンと命名したが、次いで一五六五年には西班牙の海軍はルソン島に上陸し、當時諸島に覇たりしセブ王國を滅ぼして、マゼランの仇を報い、次第にフィリピン全群島征服の先驅をなしたのである。

爾來西班牙人の來往するものが年毎に増加し、一五七一年には首府をマニラに定め、ガスピー將軍が初代

の總督に任命された。斯くて之から十九世紀の末葉に至る迄、西班牙の重要なる植民地として、或は豊富な南洋物産の供給に、又は東洋貿易の根據に、當時の海國西班牙の富強を培養する所が頗る大であつた。

所が其後西班牙は植民政策を誤り、荐りに苛斂誅求を行つて土人を虐待し、三二八年に亘る其の領有期間中總督を交迭すること一一五人、歴代總督は何れも搾取を事として暴政を布いたので、島民は其の思想が發達して來ると共に、漸く不平を抱く者が多くなり、國民的な自覺が次第に頭を擡げて來た。

偶々フィリピン獨立の先驅者として有名な熱血詩人リサルが、一八八五年同胞覺醒の一手段として西班牙政府の惡政と、僧侶の横暴を痛撃したる著書「社會の癌」を世に公けにしたる事から、遂に政府の忌諱に觸れて一八九六年には、マニラのバゲンバヤン刑場で銃殺の刑に處せられたが、其の反響は忽ちにして國內に擴大し、英傑アギナルド將軍は起つて革命の大旗を翻した。然し獨立軍は反抗の喚聲こそ高けれ、兵器彈藥が續かない。次第に窮迫してアギナルド將軍も、一時香港に亡命して雄圖空しく畫餅に歸せんとしたる時、俄に米西戰爭が勃發し、米國艦隊は突如マニラに入港して西班牙艦隊を撃破し、遂に一八九九年米西休戰條約の結果、西班牙は二〇〇〇萬弗を以て之を米國に讓渡する事となり、茲に全群島悉く米國の領有に歸したのである。西班牙の領治時代三二八年の間に、實に大小七二回の叛亂が勃發したのであるから、如何に「片手に十字架、片手に劍」の植民政策が、辛辣無類であつたか判るであらう。

【比島獨立問題】

フィリピン領有當初の米國大統領マッキンレーは輿論の趨勢に鑑み、「米國は西班牙の苛政より比島を救つたのであるから、將來比島人民の智能が十分に發達して、獨立可能の時期が到來したならば、米國は其の獨立を承認する旨」を述べた。そこで爾來比島に赴任する代々の總督は、比島の現狀を調査して其の能力如何を考究して來たが、其の結果一九一六年には比島自治法が發布されて、島民の自治權が確立され、次いで一九二六年には國民會が組織された。

實際此の間比島獨立委員等は米國の各地に「啓蒙運動」を行ひ、比島の獨立せざるべからざる所以、獨立に伴ふ幾多の物質的困難に直面する決意等を披瀝するや、聲淚共に下るの概あり、由來「人道主義」めいた感情に動かされ易い米國民から、尠からず同情を集めたのである。それに近來「農業米國」の擡頭に伴つて、比島産の砂糖や椰子油等の無税米國入國を排除し様とする事が、米國産業界に勃然と起つて來たのも頗る好都合であつた。

斯くて之に勢ひを得た比島人の獨立運動は、其の後次第に基礎を固くして、消極的温和な手段を以て着々米國政府の意志を動かし、遂に一九三五年には今後十ヶ年を準備期間として、一九四五年七月四日（米國獨立祭當日）を以て完全な獨立を許す事の承認を獲得したのである。現在此の國の政治は將來獨立が完成して、米國の統治權が撤退し、所謂「フィリピン共和國」となる迄の過渡的存在として、「フィリピン聯邦」の新政治が十ヶ年準備期間の初頭たる一九三五年から開始されて居る。即ち同年新憲法が發布され、任期六年

の初代大統領が選舉されて從來の總督に代り、米國からは高等辨務官が派遣されて、新憲法の實施を監視して居るのである。

斯様にして長い間の問題であつた比島の獨立は、愈々目安だけは定まつたのであるが、然し之も海のものか山のものか、出來て仕舞ふ迄は勿論判る筈がない。現に最近では支那事變を口實として、比島に對する日本の脅威を強調し、其の獨立の氣運を殺ぎ、能ふべくんば獨立其のものを沒却して、何等かの形式で永久に米國の庇護の下に置かうとする、一派の運動も可なり根強い力を以て動いて居るのである。「米國が比島の玄關マニラから退出すると、日本が背戸のダヴァオから這入つて來る」などと、殆んど一笑にも當らぬ戲言を眞面目に論議して居るものも少くない。殊に抗日精神に燃ゆる比島在留の華僑達は、聲を大にして之を反日宣傳の具に供し様として居るのであるから腹が立つ。比島の獨立によつて、東洋に於ける重要な足溜りを失ふことが俄に惜しくなつて、極度に「日本の脅威」を利用せんとする其の横暴さは、誠に卑怯千萬で憎んでも餘りある。

【支那事變と比島獨立問題】

一八九九年米西戦争の結果アメリカは比島を領有するや、國務長官ジョン・ヘイによつて極東政策を明かにし、支那の門戶解放、機會均等を絶叫した。即ち極東に對する發言權を、比島と云ふ足場を得るに及んで遽に強化するに至つたのであつて、爾來此の綱領は、米國の極東政策の鐵則となつて居る。

然るに一九三五年比島の獨立を十年後に許容すべく試政期に入つて後、幾程もなくして勃發したる支那事變は、米國

の官憲に異常なる衝激を與へ、比島の獨立問題に關しても、或は之が尙早を唱へ、又は永久獨立を主張する等、論争次第に喧しからんとしつゝあるが、之と同時に比島人の中にも、執拗に獨立延期を主張するものが少くない。而して之等獨立延期論者の主張する理由は、

(1) 經濟的理由 比島の主産物、例へば砂糖、コブラ、椰子油等の最大顧客は米國で、現在比島外國貿易の七〇%餘は米國との取引である。蓋し斯くの如き高度の對米依存性は、米比自由貿易の結果であつて、比島の獨立完成の曉には、早晩米國の比島産品に對する特惠的取扱が廢止せられるに違ひない。斯くては比島の對外貿易、延ひては比島の全産業は尠からざる打撃を蒙るべく、之が爲めに比島の生産業者、貿易業者、其の他比島に投資關係を有せる米國人産業家等は、自己の利益擁護の爲めに、各種の理由を構へて獨立に反對するのである。

(2) 政治的理由 東亞の事態が今日の如く不安定なる場合、全然米國の主權より離れる事は危険極まりなき事で、若し米國の主權が撤退せられるに於ては、直ちに日本の掌中に歸するであらうと妄想し、獨立尙早論者が、國防を眞甲に鬚して島内の民衆を煽動し、蔭にかくれて永く自己の利益を收めんとする策動も多分にある。

さて右の如き策動に對して米國の輿論は、在比米國人或はフィリピンと利害關係を有する米國人等の間には、獨立反對論が叫ばれ、之に反して米國の農業者或は比島産品と競争的地位にある米國人は、比島よりの輸入品に對して課税せしめ、以て自己の競争者を除かんとの見地から即時獨立に賛成し、又超然主義者の一派は、フィリピンの領有繼續は却つて米國をして、戦争の渦中に巻き込ましむるものであると、即時放棄を主張せる状態である。

然る處第二次歐洲大戰の勃發と、更に日・獨・伊三國同盟の成立とは、愈々比島獨立の將來に一大暗影を投じつゝある。即ち歐洲戦亂の發展に伴つて、佛國は獨逸の軍門に降伏し、英國亦獨軍の猛攻に遭つて、將に潰滅に瀕せんとする状態にあり、斯くて東亞に對する英佛の睨みが手薄となつたのに乘じて、日獨伊の三國同盟によつて益々勢いを得たる

日本は、支那より歐米諸國の權益を驅逐し、更に進んで南洋方面、特にフィリピン、蘭領印度にも手を伸すに違ひない。米國は日本の野望防止の上からも、比島を手離すことは許されないと、純正公明なる我が帝國の正義を曲解し、獨立延期の有力なる口實として利用せる現状である。

四、都 邑

【マニラ】 ルソン（呂宋）島の南西部、マニラ灣の奥に位する開港場にして、人口約三八萬、灣内には米國東洋艦隊の根據地あり、多數の艦艦が常時駐泊し、又灣口のコレヒドル島には米國陸軍の要塞が設けられ、海陸の防備嚴重を極めて、難攻不落東洋のジブラルタルの名がある。

本群島の首府として官衙、學校、寺院、博物館等壯大なる建築物が多く、市況頗る繁華を極める。更に東洋に於ける亞米利加の最も重要なる商業都市として、防波堤、繫船岩壁、大倉庫等港灣の施設完備し、殊に其の第七棧橋の如きは一萬噸級の船舶が、一時に四隻碇泊出来る程に雄大なものである。随つて商工業も頗る盛んにして、マニラ麻、コブラ、砂糖、煙草等の輸出、綿製品、鐵製品、肉類、麥粉、日用雜貨等の輸入を主として、本群島海外貿易の約八割は此の港を通じて行はれる。

慶長年間御朱印船の昔より、邦人の來往常に絶えざりし處にして、今日では日本郵船、大阪商船等の濠洲航路、南洋航路の寄港地に當り、日本總領事館あり、在留邦人は大會社、商店の支店或は出張所、個人經營の商工業者、漁民等を合して四五〇〇人に及び、中にも日本人漁夫は其の數六〇〇名を超え、橋頭高

く日章旗を翻したる漁船を操縦して、灣内或は近海に出漁し、マニラ全市に消費される生魚の約五〇%を供給して、大に水上日本の爲に氣を吐いて居る。

【イロイロ港】

中央フィリピン群島西部の良港で、パネイ島にあり、比島の主要産物たる砂糖の産地として、廣く中外に知られて居る。群島内に於ける砂糖工場の主要なるものは概ね此の地にあり、随つてフィリピン全土から産出される砂糖の約五割は、此の港を通じて取引される。貿易額は比島の七開港場中マニラに次いで第二に位し、市況殷賑、約二〇〇名の在留邦人は多く雜貨商を營み、大に此の地の商業界に活躍して居る。

【セブー港】

中央フィリピン群島中のセブー島東面の開港場にして、港外にあるマクタン島の爲めに年中海波頗る靜穩、港内亦水深くして、吃水三〇呎の大船も容易に埠頭に横着けする事を得べく、群島中ではマニラに次ぐ第二の良港である。随つて内航、外航諸船の出入頻繁にして、内國航路船は群島の諸島間を連絡して麻、コブラ、砂糖、木材等の物産を此の地に集め、外國航路船によつて海外各地に搬出す。貿易額はマニラ、イロイロ二港に次いで全群島中第三位にあり、日本人の在留するもの約五〇餘名にして、概ね雜貨商を營んで榮えて居る。

【ザンボアガ】

ミンダナオ島の西南端にある海港にして人口約四萬、本島第一の都會である。熱帯に位するも海風に和げられて氣候は年中溫和に、空は清く澄み渡り、水は美しく、樹は綠りに、誠に南洋氣分の横溢する氣持の良い街である。ミンダナオ及びスルー諸島方面の物産の集散地で、マニラ麻、ゴム等の輸出多く、我が國の汽船も寄港する。在留邦人は海に眞

珠貝を漁り、陸に椰子園を經營して、大に日東男子の意氣を擧げて居る。

【ダヴァオ】

ミンダナオ島の東南部、ダヴァオ灣の奥に位する港市にして、西方には群島第一の高峯アボの火山が聳え、廣い其の裾野は河谷の低地と共に、地味頗る豐沃、マニラ麻の生産地として、又コ、椰子の栽培地として誠に好適の處である。

市街は人口一萬五千、在留日本人は約五〇〇人位で、主に旅館、飲食店、雜貨商等を營むが、市街を中心とする附近の農園には、一萬からの日本人が在留し、マニラ麻やコ、椰子の栽培に従事して、年々巨額の收穫を擧げて居るのであるから素晴らしい。何しろ廣大な農場で働いて居るだけに、邦人所有の自動車だけでも三〇〇臺に近く、日本人の運轉手だけでも一〇〇人に上ると云ふ盛況である。随つて本市は日本郵船、大阪商船南方航路の寄港地に當り、日本人經營の小學校もあれば、病院もあり領事館もあり、諸會社の出張所の外、眞宗や禪宗のお寺さえ建てられて居る。

五、日本とフィリピン

我が臺灣島と一衣帯水の間にあるフィリピン群島は、距離が近接して居るだけに昔から彼我の交通は頗る頻繁にして、幾多の興味ある史實を今日に傳へて居るのである。

足利の末年天下麻の如く亂れ、弱肉強食の血腥い風が吹き捲つて、榮枯盛衰、有爲轉變極まりなかりし頃、悲しくも城を奪はれ主君を失ひ、浪々の憂き年月を悶々の裡に過したる不平の武士達は、狭い日本の天地に見切りをつけ、相率ゐて大に海外に志を伸べんとし、時には黨をなして支那の沿岸から、遠く本群島の邊に迄も横行し、蒼波萬里の大海を家として、八幡大菩薩の旗風に土民を縮み上らせた事がある。

豊臣秀吉の時長崎の俠商原田孫七郎は、大に征南軍を起して此の地を伐たんことを請ひたるも、時に秀吉は証明の事に急にして他を顧る暇なく、唯だ太守に降伏を勧める書を送つたのみで終つた事もあつた。其後始めて國際上の交通を開くに至つたのは、慶長十年六月呂宋の太守が我が徳川家康に書を通じ、物を贈つて隣交を修めんことを乞ひたるに始まり、爾來同太守と家康及び秀忠との間に國書の交換があり、我が國の商船にして彼の地に渡航するものも、次第に多くなつて行つた。

寛永十三年徳川家光は峻嚴なる鎖國令を發布して、國民の海外渡航を嚴禁したが、次いで島原の亂に手を焼いた幕府は外人を忌憚する念愈々深く、禁教最後の手段として、外人の血液を混ざるものは一切之を國外に放逐する方針を採り、各地を探し求めて先づ南蠻混血種二八七人を、遠くマカオに追放した。此の時の追放規準は父の血脈を本として、母の方は嫌はなかつたので、父放たれて子止まるあり、子放たれて母止まるあり、或は兄行き弟止まり、弟行きて兄止まり、夫妻相分れ、姉妹相隔てられ、生別離苦の悲劇慘狀には、流石非道な役人達も眼を蔽ふたと傳へられる。

之等の流人達は一時マカオに上陸したが、其後追々ルソンに渡つて、マニラ郊外の日本町に落付いた様で、寛永の初年頃は僅に五〇〇名位に過ぎなかつた日本町の人口は、其後之等混血族の移入、漂留者の土着等から次第に人口を増して、約五〇年後には三千人位にも殖えたと言ふ。今日マニラの郊外を探し求めても、殆んど日本町の特別な遺跡は見當らぬ。椰子の樹林亭々として緑り一際濃く、蔓草従らに茂つて往時の繁榮

を偲ぶべき何物も残らぬが、然し尊い日本人の血液が、土民の血管の中を流れて居る事は確かである。

一時杜絶したる彼我の交通も、維新開國と共に再び開けて來た。殊に明治三十八年故太田恭三郎氏がダツアオに農場を開設し、マニラ麻の栽培を始めてからは、其の成功に伴れて日本人労働者の入植するものも多く、斯くて今日では在留邦人約二萬四千名、其の投下資本も麻事業に對する四五〇萬弗を第一として、約二七〇〇萬弗の巨額に達して居る。

更に日比間の貿易關係に於ては、我が國はフィリピンからマニラ麻や煙草等を輸入し、我が國からは綿絲、綿織物、雜貨等を輸出して、從來は毎年二千萬圓内外の輸出超過を示し、日本にとつては大切な得意先であつたが、近年支那事變に基づく華僑の排日貨に禍されて、輸出額が著しく減少し、年によつては輸入超過の事態を示せる状態である。蓋し良質廉價の我が製品を供給する事は、比島土着民の生活費を低廉ならしめ、随つて彼等の勞銀を安くして、工業生産の費用を少くし、彼の地の生産業の發達を促進せしむる結果となり、所謂共存共榮の實を擧ぐるもので、假令一時的に變態を示すと雖も、早晚從前の如き常態に復することゝ信ずるのである。

我が國は東亞の後進國たるフィリピンを扶けて、一日も早く彼等の久しく熱望したる獨立自營の域に達せしめ、善隣友好の實を擧げんことを切望して、常に誠心隔意なき交際を續けて居る。或は進んで日比間の文化交換も計れば、又日比學生會議を始め、文化團體、運動選手等比島人の來朝も心から歓迎しつゝある。我

が國がフィリピンに對して領土的野心を有せざる事は、我が國民の間では聊かも證明を要せざる既定の事實であるが、然も今尙ほフィリピンに於ては種々爲めにする宣傳に迷はされ、日本に對する恐怖感の存する事は、兩國將來の關係の爲めに甚だ遺憾とする所である。

フィリピンでは今獨立期を控えて、政治的に躍動して居る。特にフィリピンの資源をフィリピン人の爲めに保存せんとする、國內産業保護の運動は勃然として起り、其の影響として外國人の入國を、一律に各國五〇〇名と規定する移民法が、昭和十五年五月比島議會を通過した。而して此の移民法が各國一率と云ふ假面に隠れて、執拗なる排日精神を包藏せるものなることは、共存共榮の新東亞協同體の理念達成に邁進しつつある日本としては、誠に不快極まる事である。

【比島の排日新移民法】

昭和十五年五月比島議會は、各國から同島への移民數を一ケ年一ケ國につき、五〇〇名と制限する新移民法を通過せしめ、之によつて將來の移民入國を規律することとした。

而して其の理由として公表する所によれば、(1)支那事變以來避難支那人が夥しく比島に流れ込むので、之を防遏する爲め、(2)ユダヤ人避難民の入國を制限する爲め、(3)各國からの移民數を平等公平に割當て、某々一、二ケ國からの多數入國を防止する爲めと云ふのである。一應成程と首肯ける處であるが、實際は之が公平平等の假面の下に、極めて巧みな排日策謀を實施しつつあるものなる事を見逃してはならぬ。

抑々比島は其の面積と資源とから見て、優に九千萬の住民を衣食せしめるに足ると云ふにも拘らず、現在の住民は僅

に一三五〇萬に過ぎず、熱帶の光と熱に恵まれた良土でありながら、國內可耕地の八八%は尙ほ未開拓の儘に放棄されて居ると云ふ實情である。

日本人は明治三十八年ダヴァオに農園を開いてマニラ麻の栽培に従事して以來、刻苦奮勵、文字通り血と汗の努力で着々功を收め、事業の伸展と共に次第に渡航するものが増加して、近來は毎年平均二七〇〇人位が入國し、同島の富源開發の爲めに獻身的な努力を續けて居つたのである。然し日本人以外は支那人の特別なるを除けば、此の國への入國者は極めて僅少にして、殆んど擧げるに足りない状態である。恐らく新移民法の云ふ一ケ年五〇〇名は愚かなこと、五〇名を送り來る可能性のあるものも無いであらう。即ち新移民法は從來あらゆる機會に、排日行動に出でんとする比島議會が、米國政府に使喚されて、之によつて日本人の入國を可能的に制限せんとする策謀に外ならないのである。

比島政府では日本移民の進出の爲めに、比島土人が職を奪はれて難澁すると云ふ様なことも、理由の一つに考へて居る様であるが、之こそ謬見も甚だしきものである。第一日本人に奪はれる様な、氣の利いた仕事をして居る比島労働者は一人も無いであらう。寧ろ日本人は比島の富を増す爲めの、具體的な貢獻をして居るのであつて、日本人の在る處、比島土民が新に職を與へられると云ふのが實際である。不撓不屈な日本人の開拓魂、其の勇氣と忍耐と勤勉、又其の智能と研究の力が無かつたならば、マニラ麻は果して今日の如き世界的な名聲を博し得たであらうか、比島人の食卓を賑はす深海産の魚貝は、抑々何人の手によつて採獲されるか、或は又コ、ア、木材、鑛山等、比島民の國家的經濟生活に重要な役割を勤める富源が、果して今日の様に開拓し得られたであらうか。

此の移民方案に關しては、我が政府からも嚴重に米國政府に抗議したるも、結果は全く不得要領で終つて仕舞つた。斯くて今や日獨伊三國の同盟成り、日本の東亞に於ける指導的地位の確認されると共に、疑心暗鬼に脅ゆる彼等の門戸閉鎖は、將來にかけて愈々嚴重を極めるに違ひない。徒らに恐日の幻影に捉はれ、共存共榮の大義に起てる皇國の眞意

を悟らず、更に過去幾十年開拓の我が厚恩を忘却して、天與の慈土を巨木荆棘の茂るに委せて顧みざる彼等の不信不義は、誠に腹立たしき次第である。

第七節 新南群島

一、位置と面積

昭和十四年三月三十日臺灣總督府の管下、高雄州の高雄市に編入された帝國南海の新領土新南群島は、高雄市から海上七〇〇哩、海南島からは南東へ約三二〇哩、フィリピン群島のマニラからは西方へ約三〇〇哩、北緯八度三九分から同一一度二八分、東經一一一度三九分から同一四度二一分に亘る、廣大な海面に粟散する小群島で、大なるものでも廣さは約三〇餘町歩、小なるものは約三町歩位に過ぎず、全面積約二平方浬、何れも珊瑚礁から成る標高二米及乃八米位な低平な島々である。

二、群島の沿革

諸島は元來無人島であつたが、大正六年高雄市在住の平田末治氏が發見して以來、屢々探險開發の企てあり、大正十年ラサ礦業會社は群島中最大の長島に於て、グアノ及び燐礦の採掘事業を開始したが、其後財界の不況時代に遭遇し、止むなく昭和四年一時事業を中止して、帝國領土たる事を明かにする碑を建て、引揚げた。

爾來久しく放任されて顧みられなかつたが、其後我が國の南進政策が大に論議されるに及んで、南海の此の要地を徒らに無人の儘に捨て去るに忍びず、島の發見者平田氏は自ら開洋興業會社を創設し、同志を率ゐて渡航し、諸島に於ける産業資源の調査の外、無電機を設置して近海出漁中の漁船に、天候氣象を通報し、或は物資の補給を行ひ、遭難船の救助に従事する等、一般公益事業を續けて熱帶烈日の下、我が南進發展の燈明臺たる任務を遂行し來つたのである。斯くて其の間には佛人が安南人を率ゐて來航するあり、時に日佛間に所屬を争ふて紛議を醸したることもあるが、幾變遷の末遂に昭和十四年、帝國の領土たることを確認されるに至つたのである。

三、開發の現状

現在ではまだ諸島の中長島以外は無人島として残されて居るので、本群島の産業的價值としては長島、南双子島、三角島等に於ける燐礦の外は、近海から採獲される鮪、鯉、鮫等があるだけで、殆んど特筆するものがない。群島中の主島長島は面積約一二萬坪、標高二米位の珊瑚礁から成る島で、亭々たる椰子の巨木を始め各種の熱帶植物が、豊かな熱と光と水に恵まれて、常緑喬木として島を蔽つて居る。帝國領土記念碑や、開洋興業會社の社宅、倉庫、無電臺等が此の島に建てられ、開洋興業の従業員數十名が島内で燐礦の開發事業を行つて居る。

氣候は一帶に熱帶烈日の下に位するので、内地に較べると頗る高温なるは勿論であるが、四周を環らす海

洋と、日に何回となく襲來するスコールによつて和げられるので、内地の盛夏に比すれば寧ろ遙に凌ぎよ
い。唯困るのは島に在住する人々の食糧の問題で、現在では之を内地或は臺灣から補給して居るが、何分絶
海の島々として新鮮なる野菜の不足には最も悩まされる。

水は天水で十分間に合ふし、四周の海には雑魚が豊かであり、又夜の満潮時に産卵の爲めに海岸に匍ひ上
る正覺坊を捕へれば、珍珠に舌鼓を打つ事も出来るが、長く保存の出来ない青物だけは、島で育たぬので手
に入れる途がない。随つて島にはマラリヤや猩紅熱の様な熱帯特有の病氣もなく、夜間に少し蚊が出る程度
で、猛獸は勿論毒蛇の心配もなく、誠に塵外の樂土であるが、野菜の不足から脚氣に犯され易いのは全く閉
口であると云ふ。之が爲めに島に多少あるバイヤの如きは、果實のまだ青い中に捲ぎ取つて野菜の代用に
使用して居るが、それ位ではなか／＼間に合はぬのである。

四、群島の價値

之等粟散の小群島が、一朝事あるの際に帝國の前進基地として、國防上に重大なる役目を擔ふものである
ことは云ふ迄もない。更に平時に於ても近年高雄港を根據として、此の方面に出漁する漁船や介取船が年
年其の數を増加しつゝあるが、母國を遙に離れて蒼波洋々たる大海原に活躍せる之等の漁船にとつて、近く
に日章旗の翻れる帝國の領土が存在すると云ふ事は、誠に心強き限りであらう。殊に此の島に無電通信の設
備を整へて、之等の出漁船に對して氣象の通報、或は内外のニュース等の放送を行へば如何計り便宜多く、

水産日本の發展に至大の貢獻を齎らす事であらうか。吾等は此の意味に於て南海新領土の編入を、心から慶
賀するものである。

さて天涯遙かの小群島、唯だ眼に入るものは椰子の密林と渺茫たる海波とのみ。何の慰安も娛樂もなき
地に於て、烈々たる陽光の下に、食物にさえも悩みながら、然も挺身よく帝國の南進發展の先驅者として、
我が國防上の前哨基地を固めつゝある同胞諸氏に對して、國民は須らく滿腔の敬意と感謝とを捧ぐべきであ
る。

第四章 シベリヤ(西比利亞)

滿洲、支那、南洋と、大東亞共榮圏の地理を概説し來りたる著者は、今茲に筆を擱くに當つて翻つて想ふに、帝國が此の廣大なる共存共榮圏を確保し、東亞新秩序建設の道義的大業を完遂せんとするに當つて、向ふ前途に幾多山の如き難關の横はるものあるを知る。愈々國民は一億一心、新たなる元氣を奮ひ起し、總體當りの意氣を以て此の大使命達成に邁進することの、極めて緊切なる事を今更ながら深く痛感するものである。

即ち帝國の東亞民族解放の大運動を喜ばざる英・米の兩國は、現状維持擁護の爲めに日本の躍進を阻止せんとし、援蔣行爲を續行して支那事變の永續を謀り、帝國が指導權を執る大東亞共榮圏の結成を否定せんとする。

殊に米國は自ら東亞の番犬を以て任じ、帝國の冀求する處のものが何等侵略的の要素を含むものに非らず、久しく虐げられたる東亞民族の解放と救済とを目標とし、東亞の諸國をして共存共榮、有無相通する親和の大精神に則り、花は紅に、葉は綠りに、夫々其の處を得しめんとする道德的基礎の上に立てる、新秩序の建設なる事を理解せず、單に感情的乃至功利的見地から妨害を試み、帝國に對する重要物資の輸出を禁止せるに止まらず、英國と必死の合作を行つて瀕死の蔣政權に借款を供與する一方、太平洋方面に對しては加奈

陀、米本國、ニュージラランド、濠洲を結ぶ廣大なる太平洋戰略線を布陣して、帝國に對して懸命なる恫喝的惡態を示しつゝある。

更に新東亞建設に對する他面の恐るべき障礙は、北方に國するソ聯の動向である。彼は巧みに尙ほ歐洲戰亂の圏外に立ち、東西兩半球に向つて和戰兩様の態勢を保ちつゝ、然も其の間漁夫の利を占めて、今や邊周の領土を綜合する尤大なソ聯ブロックを、歐亞の北方に跨つて結成し、愈々世界ソヴェート化の理想達成に向つて邁進せんとしつゝある。嘗つて滿洲事變を契機とする日本の對滿政策の波動と、ソ聯の五ヶ年計畫の建設に際するシベリヤ或は極東開發政策の波動とが、極東に於て相剋し、其の結果極東赤軍の擴大となり、ソ滿國境一觸即發の危機を孕藏して、或は張鼓峯事件となり、ノモンハンの慘劇となり、可惜幾多の忠勇なる皇軍將士の尊き血潮を以て、邊境の夏草を唐紅に染めなしたることは、今も國民の痛憤措く能はざる處である。

支那事變を中心とするモスコ政府の對蔣援助は、從來頗る露骨極まるものであつたが、其の後打續く蔣政權の敗北と、北支、蒙疆、中支、南支に亘る日本面積の約三倍に當る廣大な地域が、東亞新秩序建設の勢力下に包含された爲めに、今やソ聯の對支政策は一句切を劃し、却つて日ソ關係調整への友好的展開へと、進轉せんとする情勢を示す様になつたが、然し之とても歐洲戰局の深刻化に伴ふソ聯の西歐政策の強化、殊には日獨伊三國の聯繋による世界新秩序建設の澎湃たる潮流を、早くも見てとつたモスコ政府が、戦後の

世界新體制に有力なる發言權を目標としたる、對獨接近の媚態より派生したるもので、彼の眞意の那邊に存するかは、容易に腹を許せないものがある。

抑々廣大なる沿海州の全地域は、僅々八十年前迄は清朝の領土たりし所である。一八五八年の愛琿條約に於て、ロシアのムラビヨフ伯は清國の代表奕山將軍を相手として、沿海州を露支兩國の管理にすべきこと、並びに黒龍江の北岸、即ち今のブラゴエシチェンスク市東方に於ける所謂江東六十四ヶ屯の支那農耕地區を、以後露領に編入すべきことを強硬に老衰清國政府に要求し、遂に其の後一八六〇年の北京條約に於て、廣大なる沿海州を無理矢理露領に編入して仕舞つたのである。

此の儼然たる歴史的事實を想起し、而も之等舊清國の領土が、今日の滿洲國の外廓的連續地帯であること考へると、さなきだに野望に燃ゆるソ聯今後の動向こそ、東亞共榮圈確立の上から、吾等國民が不斷の注視怠るべからざる所のものである。

されば新東亞建設の道義的の大使命達成の爲めには、國民は常に風波日毎に高まり増さり行く太平洋の問題と共に、一方其の背後を脅威するソ聯今後の動向を詳かにする必要がある。こゝに於てか吾等は更に筆を國境の彼方に進めて、東亞の失地にして又ソ聯策動の基地たるシベリヤの地理に就ても、之を茲に概説附加するの必要を痛感するのである。

一、位置と面積

一望無限、老大な版圖を意味する代名詞として使はれるシベリヤは、ソヴェート聯邦の亞細亞に於ける領土中、中央アジアの部分を除きたる廣大な地域を意味する。北は堅氷とさす北極海に面し、南は黒龍江によつて滿洲國と、又アルタイ山脈・サヤン山脈等によつて外蒙古と境し、西はウラル山脈から東は太平洋に亘つて、東西の最大延長六五〇〇浬、南北は三二〇〇浬、面積凡そ一三〇〇萬方浬にして、亞細亞大陸の四分の一餘、地球上陸地の九分の一、日本全面積に較べて約十九倍もの廣さがある。

地域が廣大なだけに、勿論地帯の構造からは纏つた一單位をなして居ない。即ち西部と東部とでは可なり異つた相貌を呈して居るが、之等は全地域が、

- (1) 北方北極海に向つて排水されて居ること。
 - (2) 氣候の状態が略ぼ同様であること。
 - (3) 動植物の分布關係が相似て居ること。
 - (4) 住民並に其の文化が大體同様な標型を有すること。
- 等から、一般に單位的な印象を與へて居るのである。

假令面積が如何に廣大であるとしても、國土の天然資源の包有率が低ければ、敢て刮目するには當らないが、シベリヤは其の茫漠たる全地域に亘つて、無限の地下資源、森林資源、水力資源等、莫大な富源を包有し、經濟開發の基礎的條件を具備して居るのであるから素晴らしい。

然し此の廣大なシベリヤの天地も、今から凡そ三百餘年前、ロシア人が此の地方に現はれる迄は、全く世界に知られない國土であつた。十六世紀の中頃イヴァン四世の時、ウラル山脈東麓の地を授けられたるグレゴリー・ストロノゴフが、部下のコザックの頭目エルマークに命じ、兵を率ゐて東進せしめたのが、露西亞の東方經略の最初である。コザックは世界でも名高い慍悍な民族である上に、彼等は貪婪飽くなき征服慾に驅られて、無限の大膽さと忍耐とを以て未知の世界への驀進を續けたので、爾來僅々一世紀半の間に、ウラルからカムチャッカに至る全大陸が征服し盡されて、其の廣大な版圖と包藏する無盡の富源が露西亞の手に收められたのである。

唯だ其の位置が北に偏して、大體北緯五〇度以北を占め、其の最北端のチェリウスキ岬の如きは、七度三七分にも及んで居ることは、折角の廣大な地域にも拘らず、價値を減殺されることが少くない。其の海岸線の如きは北極沿海が約一萬六千軒、又太平洋沿岸が一萬二千五百軒にも及んで居るけれども、概ね寒氣酷烈、堅氷固く鎖ざして、海洋への進出を傳統的國是と念願するロシアに、依然海への出口を與へない。廣大無邊、アジアの北邊を覆ふ此の大陸も、酷寒の二字に封鎖し盡されて、茫漠たる凍原の連續、白雪と寒波の物凄いやを連想するのみ、事實ロシアの政治・文化の振興にも、國民經濟の發達にも、及ぼす所の影響は誠に消極的であつた。

現今行政上からは之をソヴィエト聯邦の直轄地たる極東、東シベリヤ、西シベリヤ、及びウラルの各地方と、ヤクーツク及びブリヤート・モンゴルの二自治共和國、オイラート及びハカスの二自治州等に區分される。

【シベリヤ地名の起原】 コザックの頭目エルマークが慍悍な騎兵を率ゐて、西比利亞侵略に向つた一五八一年（我が天正九年信長本能寺の變の前年）の當時は、オビ・エニセイ兩河の地方は、蒙古の拔都の弟の昔班の後裔に當るクチュム汗の支配下にあつた。クチュム汗は今のトボルスクの東南、オビ河の支流イルチシ河に沿へるシビルと云ふ町に城砦を構へて、附近に號令して居たが、エルマークは破竹の勢ひを以て東進し、クチュム汗を滅してシビルを占領し、此の地方を最初にイヴァン四世に献上した。シベリヤと云ふ名稱はエルマークの最初の占領地である、此のシビルから起つたものであると云はれる。蓋しシベリヤ大陸が往昔吾等日本人と同種血縁關係のアジヤ民族によつて居住され、其の政治生活が營まれて居たことは、新東亞建設のスローガンの下に、澎湃として大陸發展の民族的潮流が一世を風靡して居る今日、新しい角度から一般國民の再認識を要する點である。

二、地勢

(1) 海岸 東海岸は出入が稍多、日本海とオホーツク海が之に沿ふて横はり、樺太島が其の間にあつて之を別けて居る。

東北部にはカムチャッカ半島が南に突出して、我が千島列島の北端占守島と一衣帯水の千島海峡を隔てて相對する。半島は廣さが日本の本州と九州を合せた面積に略ぼ匹敵し、有名な火山島で、殊に其の東海岸には火山が多く、最高峯四九一六米のクルチェフ山を始めとして活火山が十七もあり、火山帯に沿うて

幾多の温泉が湧き出て居る。中央を南北に貫通する二つの山脈が骨格となつて、極東シベリヤの地帯に連接して居るが、何分寒氣酷烈、住民は僅に三萬に過ぎず、今日でもまだ内部の探險は十分に届いてない。特に面白いことは此の半島では、東海岸は西海岸に較べて氣候が遙に暖く、十二月迄も船の航行が可能で、其の東海岸にある首都のペトロバウロフスクは、一小市街に過ぎないが、灣は極めて深くて良港である。

ロシアが此の半島を獲得したる十八世紀の頃、既に我が間宮林藏、近藤重藏、或は錢屋五兵衛、高田屋嘉兵衛等北進の先覺者等は、遠く此の方面に迄渡航したる形跡あり、若し徳川幕府の嚴重なる鎖國政策がなかつたならば、或は今日の露領カムチャツカ半島は、日本地圖の中に加へられて居たかも知れぬ。尙ほ世界でも有名な臘牒獸の棲息地コマンドル諸島は、此の東方約二百軒の地點にある。

シベリヤの極東部では狭いベーリング海峡を隔て、新舊兩大陸が相對して居る。海峡は其の幅が僅に一〇〇軒を隔てるに過ぎない上に、冬は一面に凍結して、兩大陸は數ヶ月の間氷原を以て連絡する。昔ピートル大帝時代には、米大陸とアジャとが陸續きであるか否かは西歐學界の宿題であつた。大帝の命を受けて、此の問題を解決したのが丁抹人ベーリングである。

【薄命の探險家ベーリング】

ベーリングは一六八〇年（我が徳川五代將軍綱吉の治世）丁抹のホルセンズに生れ、二十四歳の時ロシアの海軍に入つたが、ピートル大帝から極東探險の命を受け、一七二五年にはカムチャツカに到着し、

諸般の準備を整へて一七二八年、四十八歳の時いよいよ北に向つて航海し、遂にアジャ大陸の東北端に達し、新舊大陸は海路を以て全く相隔たることを明かにして歸航した。其の後一七四〇年、六十歳の時にはカムチャツカにペトロバウロフスク植民地を設定し、二隻の探險船を建造して、翌年アラスカに向つて出帆したが、途中暴風に見舞はれて船は別れ別れの難航となり、ベーリングの船は辛うじてカヤツク島附近に上陸することが出来た。然し此の邊りの自然は極めて悪しく、野菜の供給が不十分なために壞血病に悩むものが多く、危機漸く迫つたので、再びカムチャツカに歸還することに決し、折柄十一月の寒天の下、悲壯な決心で船を整へて出發したが、途中不運にも再び凶暴な嵐に見舞はれ、辛うじてベーリング海の西南部に横はる無人島の一灣内に漂着した。砂濱に上つて帆を圍ひ、しばしの寒氣を防ぐ小屋を作つたが、飢えと寒さと疲勞とはヒシ／＼と身に迫る。悲惨にも飢ゑた野獸群の襲ふ所となつて、病人は生き乍ら食ひ裂かれた。喰ふに食なく着るに衣なく、重い壞血病に犯されて壯者も次々と空しき骸を氷上に横へた。不幸なる老隊長ベーリングも、餘りの悲痛と饑餓と寒氣との爲めに狂死して、尊き屍を白雪原頭に曝したのである。時は實に一七四一年十二月、處は是れ彼の偉大なる功績を永久に記念する爲めに、特に彼の名を採つて名づけられたベーリング島（コマンドル諸島中の最大島）である。

北極海の海岸は比較的單調にして、中央に突出するタイミル半島が特に目立つ位で、海岸には一の不凍港も見られない。

毎年七・八月の候解氷期には、土人に必要な織物類やマッチ・砂糖・酒、或は麥粉・鐵器・獵銃等を積み込んで、北極海沿岸航路の船が浦鹽斯德を根據地として出帆する。之等の船はベーリング海峡を越えて遠くレナ河口迄辿りつき、其の途中でヤクーツク人やチュクチ人などの部落に寄港し、一年の間に土人が

集めて居る高價な毛皮や、マンモスの牙など、物々交換して歸るのである。流氷の漂ふ北極の海で、或は濃霧に悩まされ、或は氷山に苦められる等危険極まりない上に、下手をすると次の解氷期迄の一年間を、北極の氷の間に船諸共閉ぢ込められる様な、憂目を見ることさえあると云ふ程に、恐ろしい冒険のある代り、此の一夏僅か一回の航海が齎らす利益は頗る莫大なもので、命知らずの船乗り達は、毎夏盛んに此の氷の海へと船出するのである。

之を要するにシベリヤの海岸は、北極海の沿岸に約一萬六千軒、太平洋岸に約一萬二千五百軒と云ふ長い海岸線を持つて居るが、何分位置が北に偏するので寒さが甚だしく、冬は一面に凍結して、船舶の航海を許さない。海洋への出口を求めて止まないロシアが、シベリヤを占領し、浦鹽斯德を軍港としても満足が出来ず、更に朝鮮を狙ひ、關東州を窺ふ譯けも亦こゝにあるのである。

【北極海の開發】 雄心勃々たるヨーロッパの探險家達が北極海を經由して、東洋に至る捷路を發見し様と努めたのは随分古い事であつて、既にコロンブスのアメリカ發見があつてから五年の後、一四九七年にはヴェニス商人ジョン・ガボットが、英吉利のプリストル港を出發して北航し、北緯六七度三〇分、デーヴィス海峡の北端に到達した。爾來茲に四百餘年、幾度となく探險隊は出發したが、堅氷固く鎖す北極の海は、容易に人類の侵入を許さない。優秀な探險家は次々と、怨みを呑んで白雪原頭に尊き屍を横たへ、出發した儘の姿で歸つて來たものは、殆んど全員の三分の一にも足らなかつた。怖るべき酷寒、凍傷、饑餓、氷山との衝突、難船等悲劇の連続であり、依然渺茫たる海洋を被ふ氷の下には、何が潜んで居るか、又其の海の彼方には果して何が横はつて居るか、總て是れ未解の謎であつて、まして歐亞を連

絡する北洋航路の開拓などは、全く痴人の夢として嘲笑される程であつた。

處が此の北極神祕の世界も、人類の不斷の努力、不屈不撓の勇猛心によつて、遂に征服される時が來た。一九〇九年（明治四十二年）四月六日、北氷洋の一港から出發したアメリカの探險家ピヤリーは、氷原上を強行して遂に北極に到着し、過去五世紀に亘る努力の目標であつた榮冠を獲得した。次いで航空機の時代となり、一九二六年（昭和元年）諾威のアムンゼンは飛行船に搭じて極上を飛び、又亞米利加のバードも時を同じくして飛行機で極に到達した。

更に堅氷と濃霧に鎖された北極海岸を縫ふて、歐亞を連絡する北極海航路の開拓も、一九三二年（昭和七年）ソヴェエト聯邦のシュミット教授によつて完成された。此の航路はスカンディナヴィヤ半島の北端ノースケープを過ぎ、ムルマンスク・白海を通つてノヴァゼムリヤに達し、海峡を経てカラ海に出る。之からタイミル半島のチェリウスキン岬を廻り、ノルデンショルド海を経てニューシベリヤの南を過ぎ、東シベリヤ海に出てウランゲル島の南を通り、ベーリング海峡からベーリング海に出で、カムチャツカ半島の南を過ぎてオホーツク海に出で、遂に浦鹽斯德に達するのであつて、一九三五年（昭和十年）ソ聯政府は碎氷船によらない普通の汽船によつて、此の航路の完成を命令したので、シュミット教授指揮の下に、各二隻の汽船が浦鹽斯德とムルマンの兩方の港から出發したが、之等は何れも貨客を満載し、途中各寄港地に貨客を積卸しつゝ、夫々無事に目的地に到達したのである。

斯くて北極海航路の實用化時代は目前に迫つて來た。氷雪皚々、年の半ばは長夜の闇に月のみ巡り、又他の半歳は落つるひまなき日の影が、夜を日に繼いで遙に低く地平線上を廻る北極地方、氷の別れ目には黒澄んだ海の色も見られ、陰鬱そのものゝ様な霧が晴れれば、コバルト色の空も見える。然しそこには森の緑りもなければ、秋を彩る紅葉もない。僅に短かい夏の間、可憐な小草が島の岩間に花を開いて、馴鹿の姿がツンドラの彼方に見られるだけで、海を被ふた渡り鳥の群が、南の空に消える頃にはまた一面に雪と氷の世界で、沖に漂ふ氷塊の間に白熊が彷徨し、海豹が凍

つた海岸に鰭をのたくらせて居るのを見るのみ、荒涼たる其の景觀、蕭條たる其の情調、誠に侘しき限りである北極の海岸に、幾多の町々が作られ、豊富なる其の天然資源が開拓される日もさして遠くない。現に今日既に毎年約二〇〇隻の汽船は北極海を航行し、建築材料、食料品、狩獵用具、各種の工業品等、約三〇〇萬噸の貨物が輸送され、北極海は新たに世界經濟の大舞臺に、華々しく登場することになつたのである。

尙ほ北極海航路は歐露のバルチック海と極東間の連絡コースに於て、スエズ運河、印度洋經由の南方航路に較べて、距離を三分の一に短縮出来る。往年の日本海々戦に於てロヂエストウエンスキー提督麾下のバルチック艦隊は、遠くアフリカの南端を廻航して千里の波濤に揉まれ、氣息奄々漸く對島海峡に到着したが、來るべき日ソ將來の海戦には、バルチック艦隊は自國の領海を然も短時日に航破して極東に來襲する事が出来る。勿論北極海航路は夏期に限られる點に於て、一朝有事の際どれ程の効力を發揮し得られるか疑問であるが、モスコイ當局が此の難點解決に至大の苦心を拂ひつゝあることは事實である。

(2) 内 陸

内陸の地形は東南部から西北部に開けて、自ら二部に分たれる。

西部シベリヤは其の大部分が極めて廣漠たる大平原で、北西の方向に低く、随つて大河は皆北に流れ北極海に注ぐ。即ちオビ(五二〇〇杼)、エニセイ(五二〇〇杼)の兩大河は多くの支流を集め、非常な蛇行をなして曠野の間を流下する。

元來シベリヤは雨量が甚だ少なく、一年僅に二、三十耗に過ぎないにも拘らず、斯くの如き大河を生ずる原因は、

(1) 南方にある連山が水蒸氣を冷縮して、雨雪を降らせて水源を養へること。

(2) 氣候が寒冷にして、流域地方の流水を蒸散せしめないこと。

(3) 地面は年内の大部分凍結して、水分を浸透すること少なく、悉く河流に向つて放流すること。等の理由からである。

然し之等は孰れもツンドラの地帯を流れて、氷山浮動する北極の寒海に注ぐ上に、冬は下流から次第に凍結し、夏は上流先づ解氷して、海との連絡を遮断する日が多いので、航運上に利用されること少く、寧ろ冬期堅氷厚く張りつめたる時、橇道として利用される事が多い。落葉松の原始林を左右に眺めて、寒風吹き荒ぶ中を馴鹿の群が、蹄の音を高く響かせながら河道を眞一文字に駛せ過ぎる其の光景は、誠に雄大無比であると云ふ。地物の價値は先づ位置によつて決せられる。折角の大動脈も全く硬化して、人類に貢獻することの甚だ貧弱なのは止むを得ない。

其の中央以南の土地は、卑濕の低地を除けば地味概ね肥沃にして、農産物が多く、シベリヤの穀庫として貴重される。更に南端に連亘するアルタイ山脈は、數條の並走する山列から成り、最高峯の海拔四千米に達するビルチャ山を始めとして、三千米以上に達する秀峯が多く、是等の山峯は何れも雪線以上で、常に氷河に覆はれ、谷に沿うて低い所迄も押し出して居る。山脈中には金・銀・銅・寶石等の鑛脈を包藏する處が多く、其の採掘は既に有史以前から行はれて居た様で、今も往昔の名残を止むるものあり、今日も盛んに採掘が行はれて居る。

シベリヤの西部にはウラル山脈が南北に走り、全長約二四〇〇軒に亘つて、歐亞の境界をなす。ウラルの名は壁と云ふ意味で、ウラル山脈は亞細亞と歐羅巴の中間壁に當るものである。

ウラル山脈と云へば名前が有名なだけに、如何にも高峻な大山脈の様に連想されるが、實際は高度の低い山地の連続で、其の最高峯のサブリヤ山でも海拔僅に一六四七米に過ぎない。嘗つて日本の福島安正大將が、明治二五年七月少佐の當時、愛馬に鞭つて單騎シベリヤ横斷の壯舉を決行された途中、此の山脈を越ゆるに當つて、峠に馬を停めて「吾れウラルよりも高さこと幾尺」と、鐵蹄下にウラルを蹂躪する痛快さを叫ばれたと云ふことであるが、實際今でも歐羅巴の方から汽車で此の山脈を横切ると、殆んど山の感じがないで通過して仕舞ふと云ふ。蓋し高度アルプスの $\frac{1}{3}$ にも足らぬ此の山脈が、さ程世に有名になつたのは、其の位置が歐亞の境界に跨つて、然も其の延長が略ぼ東經六〇度の子午線に沿つて、緯度實に二一度に亘り、長さの點では歐洲の山脈中最長のものであること、更に山脈の兩側が連綿たる大平原で、他に山らしきものが全く目に入らない。殊に東側には傾斜も稍急で、シベリヤの西部平原から之を望むと、如何にも大山脈らしい相貌を示して居るからであらう。山脈の中央部附近は金・白金等の埋藏が頗る豊富で、殊に白金は世界全産額の約九割五分を此の邊りから産出する。

東部シベリヤは、エニセイ河を越えて進むに伴れて地形が全く一變し、之と東方の巨流レナ河(四六〇〇軒)との間は、南方をバイカル湖やサヤン山脈で境した廣大なテールランドの地帯を作る。高さは平均海拔七〇〇米、大部分が殆んど斧を入れる餘地もない程に、幹と幹とを相接して林立する千古の大原始林で、道もなければ家もない、稀に土人の狩獵者が毛皮獸を追ふて出沒する位である。

【世界最深のバイカル湖】 長さ八一〇軒、幅は廣い所で約一〇〇軒、面積は凡そ三萬八千方軒で略ぼ我が臺灣島と等しく、東半球第一の淡水湖で、又最深部は水面以下一六二〇米に達し、實に世界最深の湖である。海拔五一二米の地に位し、湖畔はシベリヤ鐵道沿線中の最高處に當る。周圍の山脈は湖に向つて急傾斜をなして居るので、湖岸は絶壁をなし、水は冷たく清く、湖面は綠色を帯び、景勝沿線中第一と稱せられる。毎年十二月から翌年の五月迄は、湖面が全く結氷して、氷の厚さは一・五米に達する。嘗て日露の戰雲が急を告げた時、露國政府は極東への兵員・軍器の輸送を焦りに焦つて、此の湖の堅氷上に鐵道を敷設して汽車を通じたが、折角の名案も鐵路と共に、見事湖の底深く沈んで仕舞つたと云ふ珍談さえある。湖畔には都市は勿論、漁業も行はれず、航業も極めて振はない。僅に夏の間は汽船を通ずるが、冬は堅氷上を郵便馬糧が疾走するのみ、但しザバイカル州に農産物の多いのは、此の湖の水に灌漑されるからである。

バイカル湖の東には、ヤプロノイ山脈が西南から東北にかけて連亘し、其の表側東南部の水は黒龍江となつてオホーツク海に、又裏側西北部の水はレナ河となつて北極海に注ぐ。ヤプロノイ山脈は最高部と雖も海拔二五〇〇米内外に過ぎないが、海に對する山脈の方向の關係から、其の表と裏とでは地理的景觀が著しく相違する。其の表側に當る黒龍江の支流ゼーヤ河の流域は、シベリヤでも有名な砂金の産地で、此の邊の土人が砂金帶を踏み歩く時に、其の濡れた靴底に附着した砂の中だけにでも、優に片方百圓づつ金の含まれて居るとさへ噂される處である。

沿海州地方ではシホタ山脈が、日本海岸に向つて弧を描いて南北に走り、其の南端には極東シベリヤの最良港で、軍港として又商港として名高い浦鹽斯徳の港が、ビートル大帝灣の奥深く開けて居る。更に黒龍江の江口に近く、間宮海峡を隔て、樺太島が横はる。其の南半は日本領で、北半はロシア領である。

シベリヤ大陸が古來世界文化の潮流に浴する事が少なかつた理由は、勿論其の位置が北半球の邊僻に位したることにもよるが、他の重要な理由は南部の境界が一帶に山嶽地帯で繞らされ、南方への門戸が鎖されたる爲めである。然し一方では之等の諸山脈は、金・鐵・石炭等無盡の資源を包藏し、今日シベリヤ重工業建設の基礎を賦へて居るのである。

三、氣候

シベリヤは土地極めて廣く、且山地平原等種々であるので、氣候も處によつて多少の差はあるが、一般に(1)緯度の頗る高い地域を占めること、(2)地形が南に山脈の障壁があり、北は北極の寒海に向つて開いて居ること、(3)北極海の寒流の影響が直接であること等の地理的な理由によつて、概して寒さは頗る酷烈であつて、海に臨んで緯度低く、氣候の溫和なことで有名な浦鹽斯徳でも、一年の平均は攝氏四度半であるから、勿論シベリヤ全體としての一年の平均は、遙に零度以下である。

殊にシベリヤでは西から東に、又南から北に行くに伴れて、寒さが次第に加はる傾向があり、随つて東北部は最も寒氣酷烈で、特にヤナ河の畔にあるヴェルホヤンスク市の如きは、大陸的の氣候が最も甚だしく、

冬の平均溫度零下四七度(攝氏)、一年の平均は零下一七度で、世界の寒極と稱せられ、眞夏の頃でも地表下僅に半米位しか、氷が解けない程である。

而もこんな苛烈な寒さにも拘らずロシア人は克く堪えて農業を營む。ロググハウスと云ふ石の壁の家に住み、外出の時には厚い毛皮を着るが、家に居る時は家屋の中央に設けた大きなペーチカで、ドン／＼と火を焚くので、シャツ一枚で通して居ると云ふ。忍耐力が強く、行動の鈍重なロシアの國民性も、斯くの如き自然の懷で育てられたものであらう。

降水量も亦西から東に向つて漸次に減少し、西部シベリヤでは年雨量三〇〇耗から五〇〇耗であるが、東部では二〇〇耗以下に減る。而も是等降雨の大部分は夏に現はれるが、夏の氣温は割合に高いので、雪線の境界も可なり高められて、シベリヤでは萬年雪を戴く南部山地の數峯を除けば、氷河は何處にも發見することが出来ぬ。

一帶に南から北に向つて傾斜し、緯度に沿うて其の延長が頗る廣大なるが故に、シベリヤでは氣候と地勢の上から、一般に土地が次の様な四帯に分けられる。

【高地帯】

最南部の地域で山岳又は高臺より成る。外蒙古との境にはアルタイ山脈やサヤン山脈が横はり、更に其の東にはヤブロンイ山脈が走つて、遠くスタノヴォイ山脈と相呼應する。一帶に土地高峻で、氣候も比較的寒冷であり、交通も不便で利用價值が少ないが、然し之等の山脈の北側は土地が次第に低下し、且其の斜面には森林が繁茂して、中に

金・銀・鐵・石炭等の豊かな蘊脈を包蔵する。

【草原帯】 北緯五七度以南の廣大な平原で、殊に西南部は最もよく開け、地味も肥沃であり、短い夏の間でも日照時間が長いので氣温も割合に高く、農業・牧畜に適して麥・豆類・馬鈴薯等の産出が豊かに、シベリヤの穀物倉の名がある。然し農業の發達は主として、近年スラブ民族の東方侵入以後のことであつて、依然として原生の土人達は、今も羊・山羊・馬・牛等の家畜を牧養し、水草を逐うて轉々居所を移して居る。遊牧生活は彼等の誇りであり、衣食住一切の資料を供給する牧群は、彼等にとつては無二の財産であるが、然し彼等の其の遊牧の生活も大抵短い夏の間だけで、冬ともなれば各自の防寒のため、或は無二の財寶たる牧群の庇護のため、或は又不斷の飲料水を得るため、また他民族の侵襲から保護される爲めに、要害のよい丘陵の蔭や河の岸等に、簡単な天幕生活の聚落を作る。雨量が少なくて樹木が生育しない茫漠たる大草原を活動の天地として、寒波に脅えながら、貧しくとも楽しい生活を續けて來た是等の土人達も、今では井戸を掘つて灌漑の法を講じ、機械を用ひて耕作に努むる比較的文化の高い露西亞人の侵入を受けて、次第に奥地へと其の生活地を縮められて居るのである。

【森林帯】 大體北緯五七度から六五度に至る間の地方である。濕地には松、杉、樅等千古斧を入れた事のない大原始林が密生し、各種の狐、黒貂、栗鼠、河獺、熊等の貴重な毛皮獸が其の間に棲息して、全く狩獵人活動の天地である。冬は寒氣が頗る酷烈で、氷點下四〇度乃至四五度に降ることも稀でない。野鹿は幾千となく群をなし、肩と肩とを摩り合つて暖をとり、犬は積雪の中に穴を深く掘つて棲む。風雪の害甚だしく、殊にブルカと稱する暴風の如きは、一度起る時は飛雪猛烈、天地暗澹として旬日に亘り、荒れ狂ふ激しい風の爲めに、人間の生血は氷點下十五度に於て血管中に凍り、如何なる防寒具を以てしても防ぐことが出来ない。土人は唯だ家屋の中に閉ぢ籠り、盛んに火を焚いて凍死を免れるのみ。大自然の暴威の下には、何物も抵抗し難い程の物凄さであるが、之に反して又夏の炎熱は殊に甚だしく、風力も林

間に及ばず、恰も蒸釜の中にあるが如くで、剩つさへ幾萬とも知れぬ蚊や虻が發生し、猛然として人畜に襲ひかゝるので、猛獸も高地の方面へ逃げ出して仕舞ふ。土人は常に顔に網を覆い、煙を燻して僅に之を防いで居ると云ふ。

【凍地帯】 北緯六十五度以北にして、北極海沿岸一帯の地域を占め、地勢は極めて低平である。冬は一面に厚く氷雪に覆はれ、怒濤も亦岸に上つて直ちに氷結するので、水陸の分界さえも明かでない。海岸は凍結地下約二〇〇米にも及び、禽獸も此の季節には南方森林帯に移動する。夏になると凍土の外表面僅に一米計りが融けて、渺茫たる沼澤を生じ、根の浅い地衣或は蘚苔等の植物が其の間を點綴する。そこで之等を食物とする無数の水禽や馴鹿が來つて夏を送るが、其の期間は極めて短かく、先づ地球上では最も天恵少なく、最も原始的な經濟空間をなせる所である。

四、住民

シベリヤの人口は凡そ一千四百萬にして、我が國內地の約五分の一に當るが、土地が極めて廣大にしてアジア洲の三分の一にも達するので、人口密度は甚だ低く、一方糶につきて僅に一・一人に過ぎず、カムチャツカ半島の如きは〇・〇三人と云ふ淋しさである。殊に其の疎密の割合は南部に多くして北部に少なく、北極海岸の一帯の如きは面積約一〇〇萬方糶にして、人口は僅に五萬に過ぎず、小さな村から隣の村まで、四〇糶から六〇糶も離れて居ることが珍らしくない。

されば之が増殖については、ロシア政府の最も焦慮したる處であつて、始めは罪人の流謫地として、時には一ヶ年に二千人乃至二萬人の囚徒を送りたることあり、次第に東方へと範圍を廣めて、後には黒龍江地方の鑛山を主として、シベリヤに送られた流謫人の總數は、最初からでは約五〇萬人にも達すると云は

れる。「復活」の可憐な乙女カチューシャが流刑の身となつて、吹雪の荒れ狂ふ曠野をさまよつた憐れな物語を始めとして、氣の毒な流人達の生活は多數のロシア文學に描寫されて居るが、恐らく當時之等流謫の刑人達にとつて、シベリヤの名は絶望の淵、奈落の底の感じを與へたことであらう。

然し其の後之等兇惡なる流謫の刑人達だけでは、到底開發の目的が達せられないのを悟つたので、十九世紀に入つてからは盛んに一般移民を奨励し、鐵道料金の引下げ、賃金の割増支給、租税の免除等幾多の恩典を與へたので、自由移民が次第に増加し、次いでシベリヤ鐵道の開通以後は土地の開發、殖産工業の發達と共に、年々農民の大集團的移植が行はれて、今日に及んで居るのである。

最近ソ聯政府では「ヘタグロツ運動」と稱して、新聞紙上其の他を以て荐りに宣傳これ努めて、極東への女子移民運動を熱心に行つて居る。

「ヘタグロツ運動」とは極東移民中男女の比率が十對八の割合で、女が少ない爲めに除隊兵や獨立移民を極東に定住させる事が出来ない點に着目して、政府が之等移民に家庭を作らせ、極東に安住させることを目的として、其の提唱者たる極東赤軍將校の妻たるヘタグロツの名を冠して、極東移民奨励策に利用したのである。

此の移民奨励策は政治上及び經濟上に、かなり重要な役割を果して居る。即ち此の運動に應じて極東に送られた十六、七歳のあらゆる職業の少女達は、既に十萬人にも達するものと見られるが、之等少女は多數

の青年労働者、除隊兵を極東に引止め、或は更に引寄せ、又家庭を作ることによつて、極東人口の自然的増加を齎らすのみならず、之等の少女は愛國運動の名に於て、反日滿的意識を吹き込まれて居るので、移民即國防の目的をも達することが出来る。斯くて廣大なるシベリヤは着々ロシア化して行くのである。

現今シベリヤにあるロシア人の數は約一千二百萬にして、多く南部の鐵道沿線及び大河の沿岸地方に住み、人口數に於ても、政治經濟上に於ても、又文化の發達に於ても、シベリヤに於ける最も優勢なる位置を占め、殆んど其の全權を握つて居る。

土人はオビ及びエニセイ河畔に住み、牧畜・漁業を營み、又マンモスの遺骨採取に従事せるフィン族、或は西シベリヤの北部に住み、常設の土小舎を作り、沿岸に出で、漁業に従事し、密林に入つて狩獵を業とするトルコ族、又エニセイ河からレナ河、更に沿海州・樺太にも廣く分布して、馴鹿を牧養し、馴鹿が草を探して行くまゝに放浪の旅を續ける、古い滿洲族の倂あるツングース族、或はバイカル地方の草原に遊牧し、ブリヤートモンゴル自治共和國を作れるブリヤート族等を始めとして、實に十餘種にも及ぶが、何れも文化の程度甚だ低く、多くは高價な毛皮や漁獲物を、文明人のためにアルコールと引換へに捲き上げられる計りでなく、無茶なアルコールの飲用によつて身心を害し、又瀰漫せる性病に侵されて人口も次第に減少し、今では種族の絶滅に瀕せるものもある程である。

尙ほ之等の土人間には、一帯を通じて一夫多妻の風が行はれ、中には妻は夫の死亡後は其の兄弟の所有

に歸すると云ふ、蠻風の存する所さえあり、又或る種族では人が死する時は、近親集つて其の屍體を地上に投じ、野獸に食はせて、死者の爲めに最大の供養とする所もある。殊にヤクト種族の如きは子供が生れると、直ちに氷雪或は寒水で、洗禮する奇風があると云ふから物凄しい。

此の外ウスリー地方の南部や日本海の沿岸地方には、朝鮮人の移住者が約九萬人も住んで居た。彼等は外國人の生活に容易に同化せず、白色人種であれ、黄色人種であれ、異人種を非常に毛嫌ひして、自己の民族だけで部落を結成し、本國とスツカリ同じ生活を營んで居た。又支那人の移住者も南部鐵道沿線を主として、十萬人にも上つて居たが、之等の朝鮮人や支那人の農民達は、國境防備の見地から大量的に歐露或は中央アジアへと強制移住が行はれたので、今は其の數も著しく減少した。

五、産業

シベリヤは土地が頗る廣大なだけに、天産も亦少くないが、何分土地が北に偏して氣候が頗る酷烈な爲めに、住民も稀れにして、未開の土地が多く、富源空しく地に棄てられて居る状態で、嘗て大正十四年の日ソ基本條約にも、「ソ聯は極東の富源を提供するから、日本は資本と技術とを持ち込んで、遅れた極東未開の處女地を開發しても結構」と云ふ意味の、條項さえ加へられた程であるが、此の事情は爾來數年ならずして一變して、一國社會主義を方針とし、五ヶ年計畫に邁進して、一舉に國力を挽回せんと始めたソ聯邦は、近年俄にシベリヤの開發に眼を注ぎ、殊に滿洲事變、滿洲國の成立に當面したる以後は、様々なる反

日的宣傳を以て國民の注意を極東にひきつけ、「面を極東に向けよ」のスコーガンの下に、只管此の廣大な土地、豊かな森林、千古の埋藏礦物等、寶の山を目指して産業建設の爲めに、大膽な活動を始めて居る。而してソ聯邦の産業向上を目指す數次の五ヶ年計畫は、近年從來の農本的な構成を改めて、専ら工業の躍進的發展を第一目標として進んで居るが、勿論地理的條件を異にするシベリヤでは、直ちに此の方針に合致する譯けには行かぬ。隨つて今日シベリヤの産業は、西部シベリヤのウラル・クズバス經濟地域、東部シベリヤのアンガラ・バイカル經濟地域等特殊な地帯を除けば、未だ工業を主とする状態ではなく、農牧、水産、鑛産等の原始的産業が主となつて居るが、然し最近では豊かな鑛産資源を開發して、各地方に工業、殊に重工業の勃興が次第に顯著となり、素寒な原野に忽ち各種の工場が建ち連り、轟々たるタービンの響き、紅蓮の焰を擧げる熔鑛爐が林立すると云ふ有様で、彼の目指す軍事的目標たる所謂「東西兩面の同時的獨立作戰」の戰略、即ち極東及び東部シベリヤを歐羅巴ロシア、ウラル地方から經濟的、軍事的に獨立せしめんとする要望を次第に達成せしめんとしつゝある。滿、ソ、蒙の國境紛争を契機として、日ソの對立關係が愈々尖鋭化しつゝある今日、帝國として絶大の關心を要する問題である。

(1) 農業 シベリヤは氣候が峻烈であるが、草原帶地方では夏は日照時が長く、温度も著しく上るので、農耕の業には差支がない。其の上土地が頗る廣大であるから、換田法を用ふることが出來て、肥料を施さなくても收穫は頗る多い。殊に西南部のオビ・エニセイ兩河の上流地方は、地味が最も肥沃にして、土壤

は多量の有機質を含み、其の色が黒いので黒土の名がある。

【肥沃なる黒土帯】 黒土は温帯の割合に雨の乏しい地方に發達した、腐植質を多量に含む黒色の土壤である。此の地方は植物の生育期には降水量が多く、爲めに植物は盛んに繁茂するが、夏から秋にかけて極端に乾燥し、且つ冬は寒さが厳しく、枯草の分解が著しく阻碍され、半分解生成物の腐植質が厚く堆積して、黒色の層をなして長く連る。而もソ聯邦の黒土は單に腐植土ばかりでなく、氷河の堆石が粉末状態になつた漂土を混じて出來て居る。黒海西北岸のベツサラビヤ地方から、ウラル山脈の東麓スウェルドロフスクに至る線以南の一帶に展開して、所謂黒土帯をなして居るが、此の黒土帯は雨が一般に少ないので、作物の要素として必要な石灰分が流出せず、空氣の流通も良好で、分解が十分に行はれ、土壤は概ね中性で、農業上の價値は極めて大きい。

されば此の地方では小麦、燕麥、大麥、馬鈴薯、煙草、豆類等の産出が極めて多く、シベリヤの穀物倉と稱せられ、全土中土地が最もよく開け、人口稠密にして、全人口の約三分の二を此處に集め、産業が發達して都會も各所に繁榮して居る。

其の他外バイカル地方に於ても麥類、麻及び甜菜等の産出があり、又黒龍江やウスリー江の流域等、夏に比較的高温な滿ソ接壤地帯にも、麥類を始め穀物の生産が多く、共に穀庫としての將來を大に注目されて居るが、然し今日シベリヤの既耕地は、其の全面積に比して僅に〇・三%に過ぎない状態であるから、農業の發達は總て今後の開拓に俟たねばならぬ。殊に東部シベリヤの如きは、沿海州とブリヤート蒙古共和國を合せて、人口約二四〇萬に過ぎないにも拘らず、其の間に駐屯する極東軍は一時四〇萬にも達した。

されば斯かる尨大な赤軍の食糧迄も生産することは容易の業でなく、毎年西部シベリヤや歐露からする多額の輸入を以て、辛うじて供給する實状であつた。此の状態から觀て赤軍當局は、一朝有事の際を見越して石油其他の軍用資材と共に、食糧品の貯藏に全力を擧げて居るのであるが、此の點からも戦時の食糧自給を目標とする極東農業の振興は、ソ聯にとつて今日急務中の急務である。

尙ほシベリヤの農業で特に面白いことは、非常に寒い處と思はれて居る此の地方に、米作の行はれて居ることである。勿論主として朝鮮との國境に近い、興凱湖附近の水田からであるが、元來水の嫌いなロシア人は、跣足で水田に入ることを好まないで、随つて米作は大抵歸化した鮮人農夫が従事する。今日の年産は約五萬噸、然も將來大に擴張する可能性が十分なので、ソ聯の官憲では大に此の方面に本國から移民を送つて、次第に水田の經營を、自國人にも覚え込ませたいと焦慮して居る。近年朝鮮人の中央アジアへの強制移住が實現された結果、極東の米産額は著しく減少したが、収益多き斯業は今後必ず露人農夫によつて繼承される事であらう。

(2) 林業 シベリヤの森林面積は約九五〇萬平方呎にして、世界森林面積の約二二%に及び、而も今日迄に伐採されたのは僅に河川や鐵道の沿線等、其の中の十餘%に過ぎない。北方ツンドラ地帯を除く殆んど大部分が森林であることを想起すれば、略ぼ其の林地の廣大さが理解されるであらう。

殊に中部以南には千古斧を入れざる原生林が、二億町歩以上にも亘つて展開し、唐檜類、落葉松類等の

針葉樹、白楊、樺等の濶葉樹を主として、其の廣大なる森林面積と豊富なる樹種とは、誠に燦たる寶庫である。

何しろ現在の伐採量は、年々樹木の發育量に比して一五%乃至四〇%に過ぎないと云ふから、今後永く或は建築用材として、或は坑木・マッチの軸木・パルプの原料等として、無盡の木材を世界に供給し得るだけの蓄積が十分であると云ふ。従来日本は毎年約二千萬圓の木材を極東地方から輸入して、之が日ソ貿易品の首位を占めて居たのである。

(3) 牧畜業 氣候の關係からシベリヤの土地は、牧場としては良質のものとは云ひ難いが、何分土地が廣大で草原が多い關係上、農業に較べて手数の要らない牧畜は、早くから住民の主生業となり、今も原住の土人は概ね之に従事して、彼等の衣食住一切の資料を牧群に仰いで居る。

現今牧畜の最も盛んな地方は、西南部のキルギス草原の北邊から、シベリヤ鐵道の沿線にかけての草地で、大抵は農家の副業として營まれ、其の家畜の種類も牛を第一として、馬・羊・豚等之に次ぎ、更に北方極寒の地帯では、馴鹿が無二の役畜として普ねく飼養される。

其他野獸の中にも貴重有用なものが少くない。殊にシベリヤには約五十餘種類の毛皮獸が棲み、曾てロシアの移民を此の地に誘つた第一の好餌も、實に此の毛皮類であつたのである。中でも黒貂、狐類、栗鼠、熊、山猫、兎等は其の主要なもので、栗鼠の如きは形こそ小さけれ、年々數百萬頭宛も捕獲されると云ふ

のであるから馬鹿にならぬ。中部シベリヤ鐵道の沿線に展開する大森林は、之等獸類の無限の繁殖場で、實に高價な毛皮の無盡の寶庫である。鐵道沿線の住民は、殆んど全部が獵師だと云つても差支へない程で、之等の獵師の獲つた毛皮は、加工せずに其の儘イルクーツクやクラスノヤルスク市邊りの市場に持ち出され、商人の手を経てアメリカに送られ、加工されて世界の市場に運ばれる。近年沿線の著名な都市にはロシア人の經營する毛皮工場が、次第に勃興する様になつて來た。

【土人の至寶馴鹿】 極地に住む土人の無二の財寶は馴鹿である。性質温順にして馴れ易く、普通の鹿と違つて牡も牝も大きな角を持つ。日常雪の上を棲家とし、地上何尺と積つた氷雪を蹄で掘つて、其の底に生えた苔の類を食つて生きて居るので、其の足の蹄は頗る幅廣に大きく出來て居て、ツンドラの濕地を歩くのに誠に都合よくなつて居る。其の毛皮は此の上もない暖な被服資料となり、其の乳は牛乳以上に良質なもので、又其の肉は美味くて頗る滋養に富む。骨も角も或は魚を捕へる釣鈎や、ナイフの柄、其の他日用器具に作られて捨てられる所がない。

馴鹿はまた力が甚だ強く、橇に人を乗せて一日に平均四〇軒から六〇軒、急ぐ時には一六軒迄は走り得られるので、運搬用の動物としても頗る重寶である。されば極地の土人達は競ふて之を愛育し、其の飼養する頭數によつて各自の貧富を決する程であると云ふ。一般に群棲する性質を有し、常に大群をなし、時期に隨つて移動する。即ち冬は海岸に近い平原や谷の様な所に出て來て、雪の下に埋められて居る苔類を掘つて食べるが、夏になると山地に登つて、草木の芽や葉を食物とする。蓋し夏の間山に登る一つの原因は、更毛の時期を利用して皮膚の表面に卵を産みつけ、激烈な病氣を發生させる、怖ろしい寄生蛇の襲撃を避ける爲めである。

(4) 鑛業 毛皮と共に有名なシベリヤの天産物で、將來シベリヤの發展は鑛業にあるとさえ云はれる。土

地が廣大な關係から、今日調査を経た所は南部の鐵道沿線、或は河川の沿岸地方等、比較的人口の稠密な地方だけであるが、それでも到る處其の埋藏は極めて豊富にして、金・銀・銅・鐵を始めとして鉛・石炭・亞鉛等、所によつて無盡藏と稱せられる。殊に金は鑛産物中の第一位を占め、年産額約九萬噸、今日ソ聯邦が南阿聯邦に次いで世界第二の産金額を誇れるに與つて力あり、中にもレナ河の中流のボタイボ地方、及び黒龍江の支流なるゼーヤ河流域地方は、主要なる産金地として知られ、何れも砂金の中心地で、主として流謫人或は其の子孫によつて洗鑛が行はれる。砂金は金鑛脈の崩潰によつて生じたもので、普通は砂の様な形をなし、砂礫に混じて産出する。採集法は極めて容易にして、今日行はれて居るのは大抵其の比重の大きいことを利用した原始的のもので、即ち幾本もの長い樋を作つて、其の底に縦横に格子目を設け、中には水を流し、之に合金の土砂を投入して流し込むと、比重の軽い砂礫は水と共に流れ去るが、重い砂金は格子目に引掛つて殘留するのである。此の外シベリヤには豊富な金鑛山も少くないが、何分之等の産金地が鐵道沿線や船着場から、數百軒も奥へ入つた僻地で、勞働者や糧食物資の輸送に多大の經費が要するので、埋藏の豊富な割合に、捗々しく産金のないことは惜しむ。

其他石炭もまた到る處に産し、殊にアルタイ山脈の北縁、沿海州及び樺太北部には埋藏が極めて豊富で、全シベリヤの埋藏總量は實に六六〇〇億噸、全ソ聯埋藏量の四〇%に及ぶと稱せられ、從來の「森林や漁業の極東露領」に代るに、將來「石炭の極東露領」時代の出現が豫想されて居るが、今日では何分資

金に乏しいのと、又燃料としては廉價な薪を供給する大森林が附近に存在する爲めに、其の採掘額は僅に五〇〇萬噸内外に過ぎなす。

石油は北樺太の地質的埋藏量は約三億四千萬噸、カムチャツカは同約五億噸と稱せられるから、是れ亦素晴らしい富源と云はねばならぬ。現在ソ聯の採油量は北樺太で年額三〇萬噸程度であるが、それでも我が北樺太石油會社よりは、ズツと遅れて着業されたにも拘らず、今では之を追ひ抜ひて仕舞つたことは、ハバロフスクに近代的な製油工場が新設されて、其の能力が逐年増加しつつあること、共に、頗る注目すべき處である。兎も角鐵、石炭、石油等の資源が頗る豊富であることは、將來シベリヤ工業化の基礎として、大に重要性を増して來るものと思ふ。

(5) 漁業 カムチャツカ半島の沿岸からオホーツク海の沿岸、沿海州の沿岸等、シベリヤの東部海岸地方の一帶は、所謂世界三大漁場の一として知られる豊魚帶で、鮭・鱒・鯨・鱈・蟹・鯨等の棲息乃至回游に於て、誠に海の幸の大寶庫である。

随つて之等水産物の漁獵は頗る盛んで、漁船も罐詰工場も年毎に増加し、漁期には沿岸の一帶は俄に賑を極める。而もロシア人は漁業には餘り巧者でなく、殊に沖合漁業は一向行はないので、此の方面の漁業の發達は、主として勇敢なる日本人漁夫の努力によつて開拓されたのである。現に我が國は日露戰爭講和のポーツマス條約によつて、露人と同様に沿海漁業を經營する權利を獲得して、近年は約三〇〇萬ルー

ブルの借區料を支拂ひ、約三四〇の漁區を經營して居る。

毎年漁期には北海道、青森、秋田等を主として、各地より集まり来る漁業労働者は其の數一萬五千人を超え、其の漁獲高も年々五千萬圓に近い。五月の始め櫻の花が函館の街を彩る頃、各地から集められた邦人漁業労働者達は、大小數十隻の漁船で北方の漁場に送り込まれる。カムチャツカの東海岸は五月下旬から、又西海岸は六月に入つてからが夫々漁期で、鮭や鱒が海を膨れ上らして、産卵のため河川へ突進して来る。盛漁期は大抵十日間位で、此の間が大漁か不漁か、一年の運命がきまるのであるから、漁場は恰も戦場の有様で、漁獲物は直ちに冷凍する、罐詰にする、暗雲低迷し、狂瀾怒濤の渦巻く海上で、不眠不休の活動が続けられる。斯くして之等の漁獲物の中鮭は日本に、鱒は支那や南洋に、蟹の罐詰などの水産製造物は、歐米諸國にも多く輸送されるのである。

されば沿海漁業は一方では日本國民の保健上に、極めて重要な榮養素を供給し、更に他面には輸出品としても、躍進日本の國民經濟を潤うことが少くない。随つて從來其の經營も我が國策に基いて行はれ、外務、農林、海軍の各省が綜合的に、斯業の擁護指導に乗り出すと云ふ程の肩の入れ方であつた。所が偶々日ソ漁業條約が昭和十一年五月に満期となるので、取急いで邦人漁業權の確立を内容とする新漁業條約の締結を期し、當時の太田駐露大使とソ聯の外務人民委員部との間に、數次の折衝を重ね、漸く議熟して正に昭和十一年十月には、正式調印の運びと迄なつて居たが、折悪しく日獨防共協定成立の内報がモスコ

ーに傳はると、急にソ聯ではツムシを拵げて、容易に正式調印を肯へんじない。止むなく今日では便宜の方法として、一ケ年有効の暫定協約の下に、日本人は出漁を續けて居るが、何分相手が無法なソヴィエト聯邦のことであるから、此の重要な既得權益の將來も、頗る不安極まる状態である。

(6) 工業 シベリヤは土地の天産が豊富であるけれども、人口が稀薄で勞力が不足なものと、極めて廣大な土地を少ない人々で利用して居たので、勢ひ手數のかゝらぬ牧畜や農業が主生業となり、随つて工業は發達頗る遅々たる状態であつたが、近年ソ聯邦の國防建設に基く數次の五ケ年計畫進捗に伴つて、俄に革期的な工業大建設が具現される様になつて來た。

而して就中最も目覺しき工業發展を續けつゝあるのは、西部シベリヤのウラル・クズバス綜合企業と、東部シベリヤのアンガラ・バイカル綜合企業とである。

〔ウラル・クズバス綜合企業〕

西部シベリヤのクズバスの炭田は埋藏量四四五〇億噸（ソ聯邦石炭總埋藏量の三〇％）に及び、若し世界の石炭消費量が現在の儘だと假定すると、全世界に供給しても尙ほ優に三五〇年間を支へ得ると云ふ。此の豊富無盡の大炭田に加ふるに、ウラル山脈一帯に包藏される大鐵鑛床は約二五億噸で、全ソ聯邦の二〇％に達する外、附近には又無數の化學原鑛産地がある。

そこで此の四千四百億噸の大炭田と二五億噸の大鐵山の二つを獲得すれば、シベリヤを一躍大規模の重工業國に改造することが出来るとの觀念から、早くも第一次五ケ年計畫の中心事業として着手されたのが、ウラル・クズバス綜合企

業の建設である。

其の上近代兵學の進歩によると、軍用重爆撃機の空襲距離は今日では一千軒以上に及び、此の間敵國領土のあらゆる工業地帯を木葉微塵に粉碎することが出来るが、然も之迄のソ聯の冶金地帯であるウクライナは、西部國境から數百軒しか離れて居ない。ソ聯は西からする獨逸の進攻に對して不斷の警戒を怠らないと同時に、又滿洲事變以來日本勢力の滿蒙進出に對しても、甚だしい不安の念を抱いて居る。随つて重工業の中心地をソ聯領土の奥地にして、且無盡の資源を包蔵するウラル・クズバスに移すことは、軍事的、政治的に一石二鳥の良策であると考へたのである。

斯くて五ヶ年計畫の數年間に、ウラル・クズバスの工業建設が強行された。今ではウラル南麓のマグニトゴルスクには、年額三〇〇萬噸に及ぶ大製鐵場を始め、コークス化學工場が建設され、又チェリヤピンスクには年額四萬臺のトラクター工場が、スエドルフスクには大化學工場や機械工場が建てられ、機械化されたクズバスの大炭坑と共に、雪と氷に鎖された未開の僻地に、忽ちに黒煙濛々たる大煙突が林立し、紅蓮の焰を擧げる熔鑛爐が並び建てる、大工業地帯が現出されたのである。

最近までシベリヤ鐵道の一寒驛に過ぎざりしマグニトゴルスクは、今や人口二五萬の大都市となり、佗しき丸木小屋の寥々たりしスタリンスクは人口二〇萬を超え、其他新興都市が俄に簇出して、ソ聯重工業の大中心地として榮えて居る。

【アンガラ・バイカル綜合企業】

バイカル湖の排水路たるアンガラ河は、一千六百萬馬力と云ふ驚異的な動力を持つて居る。而もバイカル湖の西南岸からブリヤート・モンゴルの山地にかけて、二億噸の鐵鑛と一千億噸の石炭の埋藏を始め、銀・銅・亞鉛・アルミニウム等を大量に含み、又北部にはソ聯有數のボダイボ金山もある。そこでアンガラの水力電氣を以て之等の地下富源を

開發し、東部シベリヤをブリヤート土人の遊牧地帯から、一躍大經濟の工業地に改造し様と云ふのが、アンガラ・バイカル綜合企業である。

アンガラ河の上流には一三〇萬キロに及ぶ二個の大發電所が建設されつゝあり、又ネルチエンスクには年額四萬噸の亞鉛工場と、二萬噸の鉛工場を綜合した大規模な卑金屬工場が建設され、其他附近には大製鐵工場や化學工場も建てられて、之等の重工業製品を配給して大に極東産業の基礎確立を計らんとして、素晴らしい意氣込みを以て企畫されて居るのである。

さて之等の工業發展に伴つて、近年目覺しい活躍を示して來たのが極東沿海州である。太平洋岸の大勢力日本に直面する沿海州が、從來の様な伐木・採金の自然獲得經濟による人煙稀疎な植民地状態では、對日滿政策上由々しい問題であるとして、或は開拓の爲めに數十萬の農民の招致があり、數萬の工場労働者の移住があり、森林や地下富源の開發と共に、浦鹽やハバロフスクの大機械工場を始め、大造船所、化學工業、軍需品工場、食糧品工場が各地に建設せられ、之等全面的な工場の建設は當然其の重要地點を連絡する交通網の發達となり、鬱蒼たる大森林に鎖されて吹雪に明け暮れたる原始境シベリヤの姿は、最早永遠の過去に葬り去られて、之に代るに活氣横溢の新シベリヤの誕生へと、刻々に進んで居るのである。

(7) 商業 從來原始産業を主としたるシベリヤの貿易は、大體、農、牧、林産、水産、鑛産物等を輸出して、日用品、雜貨、機械等を輸入する状態で、取引はソ聯本國との間を主とし、對蒙古及び對滿洲國との國境貿易が之に次ぎ、又海を通じての取引は、主に米國及び日本との間に行はれ、殊に日本へは木材を輸出

して、日本からは主に機械類を輸入した。然し此の對日本との貿易も、日ソの關係が緊迫するに伴れて漸減の一路を辿り、元は二千萬圓を下らなかつた木材取引も、今では僅に四百萬圓位に減じて仕舞つたのである。尙ほシベリヤ内地の商業は以前は各地に盛んな定期市が開かれて、家畜、毛皮類其他日用品等の大規模な取引が行はれたが、今ではソ聯政府の國內商業の國營方針によつて、此のロシア名物も全く影を潜める様になつた。

六、交通

シベリヤの廣大な地域に關する交通の幹線をなすものは、シベリヤ鐵道と之から分岐する二三の支線とで、それを除くと一般には極めて不便な状態で、今も尙ほ橇や丸木船、馬や驢による幼稚な方法が重要な役割を果して居る。

北から東にかけての海岸線は決して短くはないが、其の面する海岸は日本海を除けば、一年の大半凍結し、漸くエニセイ河の以西及びオホーツク海で、夏の三ヶ月餘航行が可能であるに過ぎない。河川もオブ、エニセイ、レナの三大河を始めとして、之等に注ぐ無數の支流が、網の目の様に縫つて流れて居るにも拘らず、合憎シベリヤの大河は總て北方に流れて居て、交通に便利な下流がツンドラ地帯を通じて長い冬の間全く氷に鎖されて居る上に、晩春の頃には先づ上流が解氷を始めるので、洪水氾濫の禍があり、蒸發の少ない地域を流れて居るだけに水量は相當豊富であるが、交通路としての利用には頗る恵まれて居ない。

更に陸路交通では、近來ソ聯政府は着りに自動車交通の普及發達に努め、殊に浦鹽斯德からモスコイに至る幹線の如きは、屢々道路の改修を行ひ、現に浦鹽斯德とハバロフスク間の如きは坦々たる道路が完全して、自動車は僅に十三時間で走破出来る程に立派に築造されたが、然し之も一步幹線から奥地には入ると、まだ概ね頗る不便で、夏には馬車が用ひられるが、之も土地が屢々泥土となつて妨げられることあり、却つて冬には凍土の上に馬橇を動かすので便利である。此の交通の頗る不便なこと、而も道路を作るには巨費を要してなかく出来難いこと、之が無盡の天産を擁するシベリヤにして、尙ほ開發の容易に及ばない主因である。

【シベリヤ鐵道】 ロシアの東方侵略の軍事上、政治上の目的から敷設されたもので、明治二十四年ニコラス二世皇太子（後の廢帝）の時、浦鹽斯德に於て起工式が擧げられた。明治二十四年五月滋賀縣大津市に於て、偶々觀光中の此の皇太子を、折柄路上警備中の巡查津田三藏が、突如佩劍を抜いて後頭部に斬りつけ、一時日露の國交を危殆に瀕せしめる大問題を惹起した有名な大津事件は、恰もニコラス皇太子が父皇帝から、シベリヤ鐵道の起工式に臨席すべき命を受けて、極東巡遊の途上にあつた時で、當時我が國上下を擧げて、ロシアを侵略的な大國として如何に怖れ、又如何に憎んで居たか判る。

かくて爾來十ヶ年の日子と約十億圓の國費を擲つて、明治三十四年に至つて全線開通したるもので、勿論當時は總て單線であつたが、今日では全部複線を用ひる。本線は浦鹽斯德からハバロフスクに至る七六〇軒のウスリー線、ハバロフスクからカリムスカヤに至る一八六一軒のアムール線、カリムスカヤからイルクーツクに至る一五一七軒の外バイカル線、及びイルクーツクからチェリヤビンスタに至る三三四三軒の内バイカル線に四區分され、全長七四八一軒、之に

支線を合せると一三、八〇〇軒に上る。シベリヤの開拓鐵道として、此の鐵道が其の經濟開發に寄與したる功績の莫大であることは云ふ迄もない。實に此の鐵道があつてこそ、シベリヤは世界經濟の一環たる地歩を得たのであるが、更に此の鐵道が、極東と歐羅巴を連絡する唯一の世界交通幹線として、世界一周の最短路の一部をなして居ることも見逃してはならぬ。即ち我が敦賀から海上四九〇哩の浦鹽に出で、是處からシベリヤ鐵道を利用する時は、露都モスコウ迄は急行で約十日、更にパリを経てロンドン迄僅に十四日間、之を若し海路による時は五十餘日を要するの比較すると、著しく時日を短縮し得て、世界比隣の事實を愈々明かにしたものである。

毎週一回宛浦鹽斯德とモスコウの間を駛る直通急行列車は、所要日數約一〇日、金色燦爛として、まるで宮室の様な贅澤極まる寢臺車が連結されて居るので、金に苦勞のない殿様旅行者は、ホテル住居の様な氣持で樂々と旅行が出来。然し一般の旅行者はそうはゆかぬ。日本人など馴れぬシベリヤの旅行では、困ることが幾らもあると云ふ。

先づ第一に大陸の空氣が乾燥して居るためと、今一つは食物の關係とから、シベリヤの旅行では水分をひどく要求するが、困ることはシベリヤ鐵道の各驛では、日本の停車場などで見るとは居ない。そこで旅客は汽車が停車場に停ると、豫ねて用意の藥罐を下げて、驛に備へつけられた供湯所に行つて、湯を汲むのであるが、短い停車場の間に多數の乗客が、一列になつて進むのであるから氣が氣でない。それにシベリヤ鐵道の停車場には、餘程の大停車場でない限りプラットフォームがないので、線路から踏み段に攀ち上つて車輛に入るのであるが、之は脚の短い日本人には、容易ならぬ骨の折れることであると云ふ。

更に今一つ困ることは、シベリヤ鐵道では日本の鐵道の様に、線路に砂利が敷詰めてない。されば降雨が少くて日射の強い夏の日などには、線路の上は灰の様に乾燥する。其の上を汽車が駛るのであるから、車輛の下には濛々たる砂塵が渦を巻き、之が列車全體を取り圍んで、車輛の隙間と云ふ隙間から、車内に侵み込んで來るのであるからたまらな

い。夜など寝て居る上に砂塵が積つて、灰を被つた様になる。所がまたシベリヤでは良質の水が極めて少ないので、水は頗る大切で、顔を洗ふにも十分に使へない。之は平素水を豊富に使ひ馴れて居る日本人にとつては、誠に我慢の出來ない不愉快さであると云ふ。

然し何と云つても歐亞連絡の大動脈として、曠野の間に敷設されたシベリヤ鐵道の、文化の進展上に齎らした其の功績は、誠に素晴らしいものである。

所が近來日ソ關係の惡化するに伴れて、ソ聯邦では極東への軍事的進出に備へて、新シベリヤ鐵道の敷設を計畫し、目下荐りに工事を急いで居る。此の新鐵道が即ちバム鐵道である。

【バム鐵道】 新鐵道はイルクーツク市の西方にあるシベリヤ鐵道のタイシエト驛を起點とし、遠く黒龍江口のニコライエフスク、及び間宮海峡のソウガワニに達する約三七〇〇軒の大鐵道で、バイカル及びアムール鐵道の略稱からバム鐵道と云ふ。此の鐵道は日本に對する、シベリヤ鐵道の補強と云ふ軍事的目的の外に、途中から幾多の支線を出して、鑛産地帯を連結し、極東地方に大工業地帯を建設せんとする、經濟的意味をも多分に有するものであつて、何分目下鎖國状態にあるソ聯邦のことゝて、建設狀況も餘り明かにされて居らぬが、一部は既に開通して活動中であり、他の部分も晝夜兼行で工事を急いで居る様である。

バム鐵道の終點として豫定されて居るソウガワニは、間宮海峡に臨んだ小灣で、帝政時代にはギリヤーク人やオロチヨン人等が、僅に三〇〇人計り居住する沿海の僻村に過ぎなかつたが、近年バム鐵道敷設の聲を聞いてから急に發達し、今や人口約一萬、罐詰工場や製粉、製材等の工場が續々建設されて居る。近來ソ聯邦政府は、沿海州北部海岸に於ける唯一の港灣として、こゝに大規模な築港工事を始めて居るが、之が完成の曉には第二の浦鹽斯德として、其の將來は大

に注目される。元來間宮海峡はポーツマス條約によつて、非武装地帯たることを規定されて居るが、相手が無謀なソ聯邦のことであるから、一旦緩急あるの際には、對日策戦上の重要な軍港として、我が北門の一大脅威たるに違ひない。地上の交通當達に幾多の障害があるシベリヤでは、近來之等の障害物を超越したる航空交通が、頗る急速な勢ひを以て擡頭しつつある。

長い冬の結氷状態も、解氷期に起る怖るべき洪水も、密林空を閉づる大森林帯も、航空交通には一向差支へにならぬ。寧ろ悪氣流を生じ易い高峻な山地に乏しい平原性の地形や、暴風雷雨等の氣象的障害の少ない其の自然は、國土の尤大性と相俟つて、航空發達には頗る有利な状態にある。それに一方ソ聯政府は世界大戰後「萬事を措いて空へ」の旗幟を樹て、専ら航空路の開拓に精進したが、然も其の重點を主にシベリヤに置いたので、其の發展も亦頗る目覺しいものがある。現在開設されて居るシベリヤの主な航空路は、世界最長航空路の一つである浦鹽斯徳とモスコイ間の、延長八一九〇杼の定期郵便航空路、イルクーツクとヤクーツク間の二七〇六杼、ハバロフスクと北樺太のオハ間の一一三〇杼等で、殊にモスコイ浦鹽線は所要日數四日、途中は多くシベリヤ鐵道の線路に沿ひ、其の主要都市を中繼地として、シベリヤの經濟及び文化の發達に重要な役割をつとめて居る。

七、都 邑

(1) ウラヂウオストツク(浦鹽斯徳) 北陸の敦賀を正午に出港して北進すると、海上約四〇時間で二日目の

早朝には、船は浦鹽斯徳の港にはいる。浦鹽斯徳はシベリヤ第一の開港場で、ペテロ大帝灣の支灣アムール、ウスリーの二灣の間に突出するムラヴィヨフ半島の南端に位し、前方にルスキー島を控えて居る。附近に丘陵を繞らし、島嶼を控え、何れの方向からする風波に對しても、絶對安全な天恵の好錨地で、而も港内は長さ六・四杼、幅は一・六杼、水深また一〇乃至二〇米、埠頭の設備もよく整つて、一時に四、五千噸級の船舶約六〇隻を碇泊せしめて、尙ほ餘裕あり、誠にシベリヤ大平原の堂々たる表玄関である。

元來此の地は滿洲人の一漁村であつたが、一八六〇年(萬延元年)早くもウスリー地方と共に、ロシアに併吞せられ、極東に於ける彼の野望實現の根據地として、政治、經濟、軍事の各方面に亘つて種々の施設が加へられた。現にウラヂウオストツクなる名稱も、「東洋を領有せよ」と云ふ意味で、舊ロシア帝國主義の名残りを止めたものであると云はれる。背後の丘陵は防備嚴重を極め、金角灣頭の軍港はソ聯太平洋艦隊の根據地で、要塞、船渠等の施設完備し、幾百の潜水艦は、常に東洋平和攪亂の機會を狙つて居る。

シベリヤ鐵道の起點に當り、歐亞連絡の門戸たるのみならず、又北滿鐵道とも連絡があるので、滿洲の特産物たる大豆、豆粕の輸出港として、大連と競争の位置にあつたが、今では北滿鐵道が滿洲國に買収され、又京圖鐵道の開通等もあつたので、此の方面では昔日の盛況は見られない。人口約二五萬、近年ソ聯の極東進出が頗る活潑であるに伴れて、本市の人口増加も亦素晴らしい勢である。

港の優秀なるに反して、陸上の地形は甚だ險峻で、市街は山の斜面に發達して居るが、平地に乏しく、

家屋は多く急斜面に階段状に建てられて、道路も狭い。主要な街路は立派な敷石で舗装されて居るが、一度横通りにはいると、玉石がゴロ／＼して居て交通が不便である。又給水の便が悪しく、之程の大都會でありながら、上水道の設備さえ完全に居ない。尙ほ港としての唯一の缺點は、日本の小樽と略ぼ同緯度に位するにも拘らず、寒流の影響から毎年十二月から翌年四月の上旬にかけて、百餘日の間港内一面に結氷すること、碎氷船を用ひて船舶の出入を助けて居る。

廣大なる大陸を背後に控えて、太平洋方面への唯一の出入口であるだけに、大豆、木材、礦産物の輸出、茶、食鹽、穀物、石炭、蔬菜、果實類等の輸入が頗る盛んで、各地から航路を通じ、我が國の日本郵船、大阪商船も亦定期航路を開き、敦賀、函館、小樽、長崎、門司等の開港場と結んで居る。我が國の總領事館あり、在留邦人も大正八年日本のシベリヤ出兵の當時には、千餘人にも達したが、其の後ソ聯の露骨な東方進出から、國交兎角圓滑ならず、強壓と猜疑に苦められて引揚げるものが多く、今では日本政府から派遣された官吏を除けば、殆んど幾人も残つて居ない、誠に寥々たる淋しさである。

(2) **ヲロシロフスク** 浦鹽斯徳の北約七〇軒の地に位し、舊名をニコルスクと云ふ。人口約五萬、昔勃海國の首府として繁榮した處で、附近には我が國と關係の深かつた勃海や、女眞時代の古城の遺址がある。ウスリー鐵道と北滿鐵道の交點に當り、日ソ關係の緊迫に伴れて、重大な軍事的の意義を持つ。小麥、亞麻等の豊産地として知られる附近大平原の中心市場で、商業が盛んに行はれ、滿人、鮮人の歸化在住するも

のが多く、附近には職工一千人以上も使用する、國營バター製造所も建てられて居る。尙ほ此の地は位置が比較的南部に位して、シベリヤでは最も住みよい所であると云はれるが、それでも冬の寒さは誠に想像以上で、長い冬の間地表は全く凍結し、萬物總て氷に包まれて仕舞つて、吹雪の時などは全然一步も、屋外には踏み出し得ないと云ふ程であるから、之から考へても更に北方に展がるシベリヤの天地が、如何に酷寒物凄いかは察せられる。

(3) **ハバロフスク** ウスリー江と黒龍江との會點に位して、人口約二〇萬、浦鹽斯徳からは鐵路約一晝夜で到着する。黒龍江、ウスリー兩鐵道の接續點である外、至便な水路によつて四方に通ずる誠に水陸交通上の要地である。即ち黒龍江を溯れば一方は松花江を通じて、哈爾濱を始め北滿の諸都市に達し、又本流を溯れば江畔の大邑ブラゴヴェシチェンスクにも達する。更にウスリー江によつて流域の肥沃なる耕作地と結び、又江を下ればニコライエフスクを経て、オホーツク海にも出られる。誠に交通上極東地方の死命を制すべき樞軸的位置にある。されば一九二四年（大正十三年）極東地方の首府となつてから急激に發達し、軍需工場の建設されるもの多く、極東第一の機械工業中心地として榮え、人口も約十年間に五倍も増加した。

附近農産物の集散の外、毛皮の取引、製革、醸造等の工業が、僅に行はれるに過ぎなかつた田舎町が、一躍共産黨の極東に於ける大根據地となり、極東赤軍司令部を始めとして、各種の本部が建ち並んで、堂

堂たる大建築物は、怖るべき赤化の魔手を包んで人民を威壓して居る。尙ほシベリヤの地名に何々スクと稱するものが甚だ多いが、スクと云ふのは我が國の町又は市と云ふ露語で、ハバロフスクは一六五〇年の頃諸所に城砦を築いて勢力を張つて居たハバロフの名をとつて、彼の開いた市と云ふ意味である。

【コムソモリスク】ソ聯の極東建設が進むに伴れて、今迄全然知られなかつた一寒村が、軍事的・經濟的の觀點から、僅か數年の間に堂々たる大工業都市に發展したものが少くない。此の點で最も目立つた例が本市である。一九三二年の春モスクワ、レニングラード、オデッサ、ゴリキー市等から選拔された三千名の移民の手で、黒龍江沿岸の原野に打立てられたのであるが、今日では約十萬人の大都市となり、造船、機械製作其他の軍需工業の最も重要中心地となつて居る。

其他バム鐵道の終點ソフガワニは日本海第二の海港として、又北樺太のオハは極東唯一の石油業の中心地として、ウオロシロフスク(舊名ニコリスク)は製糖、製油工場の所在地として、コムソモリスク同様に躍進したる工業都市である。

(4) ニコライエフスク 黒龍江の河口から約四〇浬上流の北岸に位す。一八五〇年(嘉永三年)露領となつた時、當時の皇帝の名をとつて命名したるもので、一時は軍港として大に榮えたが、其後一八七二年浦鹽斯德に軍港が移されてからは次第に衰微し、今では附近漁業の中心地として、又黒龍江航路による商港として僅に餘喘を保つのみ。河口に於ける水深は漸く四米餘に過ぎず、大船の出入を阻まれる上に、毎年十一

月から五月にかけて海面が凍結して、外海との交通が杜絶する。然し其の反對に夏の漁期には、漁民が雲集して俄に活氣を呈するのである。市街は大正九年バルチザンの兵火に罹つて焦土と化し、今日も復興の途上にあつて、人口は僅に一萬に足らなう。

【尼港事件】 大正七年七月日本は米國政府からの提議を容れ、チェッコ・スロヴァキヤ軍救援の目的を以て、米國と共にシベリヤに出兵し、浦鹽斯德を根據地として着々進撃を續け、バイカル湖以東を概ね日本の勢力範圍に收め、白系オムスク政府のボルチャコフを助けて、大正九年の始め頃には略ぼ其の目的が達せられた。

所が我が國が位置的關係から自衛の必要上、遠くシベリヤの内地に迄大兵を送つたことに關して、恰も領土的野心でもあるかの様に誤解して、途中から米國は再三抗議を申立て、やがて撤兵を斷行したが、我が國は未だシベリヤの秩序も十分恢復しない中に、輕々しく之に倣ふことも出来ないで、依然大兵を駐屯せしめて居た處、之が不幸にも色々な面倒な問題を惹き起す原因となつた。

即ち大正九年一月ボルチャコフが失脚し、赤軍に捕へられて銃殺されると共に、極東シベリヤの政情が一變した。トリアビーンチンを首魁とする過激派の一隊は、黒龍江沿岸の同志や無賴の徒を糾合して、跳梁甚だしく、北上して尼港に迫つて來た。

當時尼港には歩兵少佐石川正雅の率ゆる陸軍守備隊約一四〇名、海軍少佐石川光儀の率ゆる海軍無線電信隊四二名、ロシアの要塞守備隊若干名、及び居留民の自警團を以て警戒に當つて居たが、暴戻無情なる過激派は、衆を恃んで横行し、掠奪虐殺を恣にし、入市して政權を掌握するや、三月十一日には我が守備隊に對して武装解除を要求して來た。激怒したる我が守備隊は、十二日早曉一齊に出動して、敵の司令部を包圍攻撃したが成功せず、退いて兵舎に入り、海軍電信隊も居留民と共に帝國領事館に立籠つたが、敵は全市に動員して我が領事館に殺到した。決死の我が軍は勇戦奮

鬪、屢々頰敵を退けたが衆寡敵せず、惡戰苦鬪の末自ら領事館を焼き、隊員は悉く戦死し、副領事石田虎松及び同家族等も悲壯なる最期を遂げた。一方陸軍守備隊も兵舎を死守し、五晝夜に亘つて大奮戦を續けたが、是れ亦衆寡敵せず、遂に我が同胞七〇〇名は怨みを呑んで、悉く慘虐なるバルチザンの魔手に仆れたのである。

之より先き二月の下旬、尼港からの通信連絡が杜絶する前に石田副領事から發せられた救援申出に従つて、急遽派兵のことに決したが、何分海も陸も結氷して行動自由に委せず。解氷と共に六月初旬救援隊が同地に到着した時には、全市灰燼に歸し、過激派の幹部等は遠く逃れ去つた後で、暴虐の跡は眼を覆はしめるものあり、隊員等は切齒扼腕、固く報復を誓つたのである。一方日本に於ても國論大に沸騰したが、何分對手が對手なので埒があかぬ。已むなく我が國は事件解決までの賠償保障として、沿海州の一部と北樺太とを占領したが、然し之も米國の抗議に遭ひ、又世界の論壇にも物議の種を蒔いたので、意氣地なくも我が國は大正十一年の末には撤兵して仕舞つた。今日北樺太の石油と石炭の利權は、尼港事件の代償として暗黙の裡に我が國に讓渡されたもので、實に日本にとつて尊き同胞七〇〇名の血潮の結晶である。

(5) **ブラゴエシチェンスク** 黒龍江とゼーヤ河との會點に位し、江を隔て、滿洲國の黒河及び愛琿と相對す。ゼーヤ河の流域一帯は地味肥沃で、農業、林業がよく開け、又有名な砂金の産地であるが、市は其の中心市場として物資の集散が多く、又工業も盛んで、製粉、マツチ、木材等の工場がある。人口約十萬、市街は街衢整然として、シベリヤの荒野の中にも斯んな立派な都市があるかと驚かされる。

【ビロビチャン自治州】

ビロビチャン自治州は、一九三四年ソ聯領内の猶太人を集めて結成せしめたる自治州にして、面積約七萬方秆の、其の

位置は松花江が黒龍江に合流する附近にして、我が大陸の第一線たる滿洲國と、河幅約一千米を隔て、直接相對する處にある。

ソ聯邦が世界革命の痛として、全世界人から毛嫌ひされるユダヤ人を特に保護し、將來世界中のユダヤ人を此處に集中させる目的を以て自治州を形成したことは、一つは今日のモスコイ政權を形成する要人連の中に、ユダヤ系人物が多数存在する事にも因るが、一方では古來流浪の民として農業生活に不向きな種族を、殊更選んで滿洲國領に接近したる地域に集めたことは、其處に重大なる政治的意圖の潜在することを見逃してはならぬのである。

尙ほ州内には埋藏量實に一千億噸と稱せられるブルバスの大炭田あり、此の石炭燃料を以て、其の附近にある埋藏量二〇億噸と云はれる、小興安嶺の鐵鑛開發を目的とするブルストロイ綜合企業が現に建設中にして、將來之が完成を見る時は強力なる重工業、軍需工業の地盤が新に此處に据えつけられる譯けで、是れ亦國境問題の今後に重大なる關係を有するものとして、最も注目を要する處である。

【ブリヤート蒙古自治共和國】

ブリヤート共和國は一九三〇年に成立したるブリヤート蒙古人の自治共和國である。バイカル湖の東方に位する面積三七萬方秆、地形は殆んど山脈地帯で牧畜が盛んに行はれる。元來歐亞の兩大陸に跨つて、頗る廣大な面積を擁するソ聯邦は、古來民族異動、國家興亡の活舞臺となり、隨つて其の子孫が現代に迄殘れるものが多く、今日一億八千萬と云ふ其の老大な人口は、約二百餘種と云ふ多種多様な異民族で構成される結果となつたのであるが、其の中に於て蒙古民族を代表するのが此のブリヤート蒙古人である。

國內住民の總數は約六〇萬人で、其の中には赤軍、或は工場労働者として多數のロシヤ人が混入して居るから、勿論全部が蒙古人ではないが、ブリヤート族は其の中心體を成して居るのである。一方秆の人口密度は一・六人の比率に過

ぎないが、それでもシベリヤ全土の人口密度一・一人に較べると稠密と云つてよい。大部分が農業、それも主として畜産を生業とする經濟状態であるから、大して將來を望むことは出来ないが、それでも吾等日本人と同一血液の民族が、シベリヤの國境に於て經濟的、文化的に發展して居ると云ふことは、頗る興味ある問題である。

首府のウラン・ウデは人口三萬、シベリヤ本線の要驛で、大規模な機關車工場や、或は皮革、製材等の工場があり、シベリヤ赤軍の根據地として知られる。此處から南下して外蒙の首都庫倫に至る對蒙連絡鐵道も、目下秘密裡に建設中であると云ふ。

【ヤクーツク自治共和國】

シベリヤの東北邊を占めたる面積三〇〇萬方呎、日本全面積の四倍以上と云ふ廣大な地域であるが、人口は僅に三二萬にして、一方呎につき大約〇・一人に過ぎず、然も其の總人口の九〇%を占むるものは、土耳其族の一種なるヤクト土人である爲めに、一九二二年以來之等ヤクト人を基準として、自治共和國が結成されて居るのである。

位置が北邊に存して氣候が酷烈であり、地勢は大體山脈・高原の連續で交通不便を極め、今日尙ほ域内に一本の鐵道さえ敷設されて居ない状態であるから、總體的には一大森林地帯であると見做してもよい。域内經濟上の中心たるヤクーツク市は人口二萬三千、レナ河に臨める交通道路の集中點として、發電所其他の工業施設を整へ、稍々都市としての面目を保持して居るが、其他には都邑らしいものは見當らぬ。住民は僅に南方レナ河の上流地方で穀物、亞麻、馬鈴薯等を栽培し、狐、黒貂、熊、栗鼠の類を狩獵して、定住生活を營めるものゝ外は、土地廣くして人稀れに、殊に北方の落莫たる凍原地帯に於ては、極光を浴びて馴鹿の遊牧に従事する土人の姿を見るのみ、茫漠たる世界無比の原始郷である。

近年ソ聯政府から特派されたる探險隊によつて、域内には金、鐵、石炭、岩鹽等、莫大なる天然資源の包藏される事

が略ぼ明かとなつたが、尨大な此の處女地開發の手が加へられるのは、恐らく遠い將來のことであらう。

- (6) **チタ** 滿洲からシベリヤ鐵道を利用するには、北滿鐵道で國境都市滿洲里に出で、外バイカル鐵道でカリムスカヤに達し、こゝで本線に乗り込むのである。チタはカリムスカヤの西北、盆地の中央に位するシベリヤ鐵道の要驛で、人口約十萬五千、ロシア革命の直後赤軍と白軍とが、此の地を中心として激烈なる市街戦を展開し、建築物の破壊されるものが多く、久しく更生の悩みを續けて居たが、附近沃野の中心だけに復興も早く、今では沿線有数の都市として市況頗る活潑である。

- (7) **イルクーツク** バイカル湖の西岸に近く、アングラ河畔に發達した大都市で、モスコーと浦鹽斯德の略ぼ中央に位する。人口約一五萬、もと帝政ロシアが東方經略の根據地として經營しただけに、市街の文化的施設がよく整ひ、東シベリヤ地方の首府として政治上、經濟上の中心地である。附近には麥類の産出が多く、又金、毛皮、茶等の取引が盛んであり、醸造、製材、製粉等の工場も建てられ、西歐並に支那からの商品も、こゝを中心として集散するものが多い。

- (8) **トムスク** オビ河の支流トム河畔にある。シベリヤ鐵道敷設の當時、僧侶達が鐵道は反基督の思想を運んで来て、住民の信仰を破壊するものであるからと頑強に反對したので、本線と難れて曠野の中に發達し、今では支線によつてシベリヤ鐵道と連絡する。ロシアの革命前迄は、シベリヤの首都として繁榮を誇つて居たが、革命後はオムクスに其のお株を奪はれて、今は日に月に寂れつゝある。人口約一五萬、古都であ

るだけにシベリヤ著名の大學や、博物館、公園等を始めとして、百般の設備が完全し、市街亦整然として美しく、古き都としての重味を十分に見せて居る。市内には農産物、畜産物を主とする工業が頗る盛んで、皮革、獸脂、石鹼等の生産が多く、西部シベリヤの商工業の中心たる面目を今も維持する。

【クラスノヤルスク】 エニセイ河とシベリヤ鐵道の交點に位して、人口約七萬、附近に肥沃なる平野を控えて、小麥其他の農産物が豊かに、又四近の一帶は森林と毛皮獸とに富み、且石炭、鐵等の埋藏も多いので、本市は此等物資集散の大中心地として榮え、圖書館、博物館等の文化的な施設も相當に整つて居る。

【ノヴォシビルスク】 オビ河とシベリヤ鐵道の交點に當れる新興の都會で人口三十萬、小麥と木材とバター之都として知られる。近年ソ聯邦が世界第一を誇る農具製造工場を始めとして、製鐵、自動車、機械等の大工場が建設せられ、ウラル・クズバス重工業の勃興に伴つて素晴らしい勢ひで發展しつつある。西部シベリヤ地方の首府で我が國の領事館あり。

(9) オムスク オビ河の支流イルチ河畔に發達せる西部シベリヤ第一の都會にして、人口約三五萬、シベリヤ鐵道の要驛である。一九一七年(大正六年)ロシア帝政派の巨頭コルチャーク提督が、こゝにシベリヤ政府を組織し、聯合軍の後援を得てソヴィエト政府軍と戦を始めて以來急激に發達し、一九一九年コルチャーク政府没落後も、西部シベリヤの政治的中心地として繁榮を維持して居る。附近は肥沃なる黒土層である爲めに、小麥、牛、羊等の農牧産物の大集散地に當り、肉類、バター、皮革類等の取引が頗る盛んである。

【西部シベリヤの重工業都市】

西部シベリヤにはウラル・クズバス經濟地域の發展に伴れて、近來俄に勃興したる重工業都市が、林立する大煙突からは濛々たる黒煙を上げ、打連る熔鑪からは紅蓮の焰を輝かせ、轟々たるタービンの響き、縦横に駛走するトラックの警笛、到る處横溢せる活氣を見せて居るが、之等の都市はシベリヤと云ふよりも寧ろ全く歐露の延長であるから、此處には單に名稱を擧げる程度に止めて置く。

【スエルドルフスク市】 (四〇萬) 鐵道運輸網の中心地で、七條の鐵道線が網の目の如くに附近の工業地帯と結んで居る。

【ペルム市】 (二〇萬) ヴォルガ河の上流に臨み大規模の造船所あり、鐵道及び河川の運輸による百貨の集散地で、製材パルプ及び製紙の大工場が立ち並んで居る。

【チェリヤビンスク市】 (三〇萬) 附近から搬出される豊富な石炭によつて、製鐵・機械・化學等の重工業及び食料品工場が勃興し、一年の工業生産高は三〇億留に達する。

【マグニトゴルスク市】 (二五萬) 附近の莫大な鐵鑛資源の開発による製鐵、機械、セメント工業の發達から、嘗つて人口二千の貧寒な山村が、數年ならずして今日の大都市へと躍進的な發展を示す様になつた。

10) アレキサンドロフスク(亞港) 我が國と密接なる關係のある北樺太島の首都で、間宮海峽に面し、全島唯一の商港であるが、船の碇泊に安全な良灣を有しないのは缺點である。夏期には浦鹽斯德及び尼港から定期船の航海があり、冬期には凍結したる海上を、犬橈を以て大陸と交通する。人口二千五百の小邑であるが、毎年夏の漁期には日本からも漁船が雲集する。我が國の總領事館あり。尙ほ北樺太島の内部には石

油、石炭等の埋藏が多く、森林と共に大に其の將來を囑望されて居る。北部の我が石油利権の企業中心地オハには、總領事館の分館が設置されてある。

【露領北樺太】

露領北樺太は北緯五〇度の日露の境界線から、五四度二〇分のエリザベス岬に到る延長五七五軒の地域で、恰も樺太全島を一匹の乾魚と見る時は、其の腹部より上の部分に當る面積約三八、五〇〇方軒、全島の大略五割四分にして、邦領に比して二四〇〇方軒の超過である。

自然的景觀は邦領樺太と一致し、西部には樺太山脈が高度約一五〇〇米のリヤマルチニルを主峯として南北に走り、又東部には我が東北山脈の延亘による山地帯が、北緯五五度半の邊に迄及ぶ。兩山地間の中央低地帯には延長約三二〇軒、北樺太第一の長流ツイミ河が迂餘曲流してオホーツク海に注ぐ。沿岸は地味肥沃にして密生ひ茂り、水中には鱒・鮭多くして、漁期には銀鱗渦を卷いて來集する。

氣候は其の位置が邦領地域に比して更に北偏するを以て、冬は寒氣一層酷烈にして、一月最低の頃は零下四十五、六度に下ることも珍しからず、海面亦一帯に結氷する。而も夏は之に反して暑氣割合に厳しく、八月極暑の頃には最高三十度にも達することあり、一般に水蒸氣多く、濃霧立ちこめ、又樺太名物の蚊・蛇の襲來頗る猛烈にして、殆んど人をしづめて僻易せしめる。

北樺太の富源は林産、海産、鑛産の三種を主とする。林産では蝦夷松、榎松は南部に、落葉松は北部に多く、未だ多く伐採されずして概ね原生の儘に残されて居る。元來樺太では寒氣が強く、一年の半ばは白雪に蔽はれる有様であるから、随つて植物の發育期も割合に短かく、大樹をなすには至らないが、地味概して肥沃なるが爲めに、樹木は到る處に繁茂して、良林相接する状態であることは誠に羨ましい。

水産では鯨は亞港以南に、鮭・鱒は以北に多く、東海岸ではナビリスキー灣以北に鮭・鱒を産し、又潟湖には海豹、臘肭獸、獵虎等が群棲する。土人は冬期氷下の待網によつてコマイと稱する魚を漁獲し、又沿岸一帯遠淺の海に豊産する鱒を漁つて食料に充てゝ居る。

鑛産では西海岸南半の石炭と、東海岸一帯に分布する石油とが最も重要である。大正九年尼港事件後の保障占領以來我が國は之が開發に當り、同十四年國交恢復して派遣軍を撤退したるが、日露基本條約によつて稼業の繼續を認められ、其の利権は何れも日本政府の推薦する我が當業者に許與される事となつて、北樺太鑛業及び北樺太石油の兩株式會社が設立せられ、執拗なるソ聯政府の迫害に苦み乍ら、今も採掘を續けて居る。全土の石炭埋藏量は數十億噸と推算されるが、現今我が國の採掘量は年額約十五萬噸内外に過ぎず、又石油も鑛區頗る廣汎に亘るも開發遅々として、今日の原油採取量は三〇噸内外にして、石油、石炭共に我が國に輸入される。

北樺太の住民は舊ロマノフ王朝當時の流刑者、及び其の子孫であるロシア人が約一萬と、近年新に移住したる露人移民約五萬、並びにギリヤーク、オロチョン、ツングース等の土人が約四千人餘り居住するに過ぎず、天然資源の乏しからざる此の良土も、氣候寒冷なる上にマラリヤ・壞血病等の風土病、蚊や蛇の夥しい被害の爲めに、人口は誠に稀薄である。土人の大部分はギリヤークで主として東西海岸及びツイミ河岸に、又ツングースはツイミ河岸に、オロチョンは東海岸に住み、何れも夏は海濱或は河邊に部落を作つて漁撈に従ひ、冬は豫ねて設けたる山腹の穴倉に蟄居し、半ば遊牧的の遺習を脱せず、極めて貧寒の間に憐れむべき生活を送つて居る。

(11) **ペトロパウロフスク** カムチャツカ半島に於ける唯一の都會で、東海岸の良灣に臨んで居る。昔ビートル大帝時代には米大陸と亞細亞とは陸續きであるか否かは、西歐學界の宿題であつた。大帝の命を受けて此の問題を解決したる丁抹人ペーリングが、一七四〇年第二回探險の時に開いたのが此の港で、ペテロ大

帝の大業を記念して、此の名をつけたのである。一時は軍港として大に繁榮したが、其後尼港に軍港を移されてからは次第に衰へ、今では人口僅に二千に過ぎず、然し夏の漁期には各地の漁夫が集り来るので無人の地が俄に一變して、二萬からの大聚落となり、商業榮え、獸皮其他の取引が盛んに行はれる。我が國からも出漁するものが多いので、日本領事館が設置されて居る。

尙ほカムチャツカ半島は廣大な面積を有して居るが、冬の寒さは格別で、地下深くの所まで固く凍結して仕舞ひ、交通機關としては犬橈以外には何もないので、内部の地方に定住するものは極めて少なく、僅に海岸に沿うて漁夫の小部落が點綴する計りである。

八 緊迫せる極東日ソの關係

シベリヤは日本の隣國である。我が本土は一衣帶水の日本海を隔て、シベリヤと相對し、我が領土朝鮮は、僅に豆滿江の水路を隔て、彼と接壤する。されば彼我の關係は從來可なり密接であり、且深刻であつた。

今から凡そ一五〇年の昔、時は徳川寛政の頃、時代の先覺者林子平は國防の必要を説き、海國兵談を著して罪を得たが、恰も子平の言の如く、彼の罰せられた寛政四年の秋には、早くもロシアの使節ラツクスマンは、我が漂流民伊勢の船頭大黒屋光太夫等を送つて北海道の根室に來り、開港貿易を要求して鎖國泰平の眠りを驚かせた。

之より先東方政策の實現が着々其の緒に着いたロシアは、原料の供給地として、又商品の市場として、多年泰平桃源の夢を貪れる日本に狙ひをつけて、或は我が北邊を探險させ、又は漂流日本人を教師として、イルクーツクに日本語學校を設けてロシア人を教育するなど、荦りに侵略の機會を窺つて居たのであるから、一應の拒絶位で容易に引下る筈がない。表に辭禮を盡し、裏では武力を以て脅かす等、百方手を盡して執拗に迫つて來たのである。

一度北門警備の急務が傳へられるや、或は近藤重藏の活動となり、伊能忠敬の測量となり、間宮林藏の探險となり、我が國人の關心も亦俄に此の方面に向けられたが、一方ロシアの要請も次第に露骨となつて、文化元年には使節レザノフの長崎渡來となり、嘉永六年には同ブーチャーチンの長崎回航と、修好通商の要求となり、その都度世間知らずの日本人は膽を冷させた。

やがて明治維新と共に、開國進取の國是がこゝに確立したけれども、ロシアの強壓は依然として終熄しない。明治八年には無理矢理に千島・樺太の交換となり、次いで日清戦後には露兵の滿洲南下となり、遂に明治三十七、八年には東洋平和の爲めに、敢然正義の矛を執つて暴露の野望を粉碎したる、日露の聖戰となつたのである。斯くて世界大戦後此の國に帝政が瓦解して、赤化共產の新政體が生れるや、我が國は大正十四年には新らしく出來たソヴェエト聯邦と日ソ基本條約を締結し、正式な外交・通商の關係を結ぶ様になつたが、兩國の關係は今日も決して圓滑に運んで居ない。殊に一五〇年の昔から今日に至る迄、日露の

關係に於て日本は常に受け身の形で、押され通して來たことは、考へると誠に不愉快千萬である。現在日本はソ聯領に幾つもの權益を持つて居るが、就中重要なものは露領沿海州に於ける漁業と、北樺太に於ける石炭及び石油に關する利權である。

【沿海州に於ける漁業權】

日露戰爭講和のポーツマス條約によつて、露人同様經營の權利を獲得したもので、從來經濟的には年五千萬圓近くの生産を擧げ、數萬の従業員を擁し、其の生産品は皆に日本國民の保健上、重要な營養素を供給して居る計りでなく、我が輸出品の大宗として、躍進日本の國民經濟を潤うして居るもので、然も之が條約化されたのはポーツマス條約以後であるとは云へ、實際は數百年前から我が先人の冒險心と國益開拓の熱意によつて、幾多の危険と犠牲とを拂つて、開拓され來つたものである。

此の露領漁業權は、帝政の崩壞後は色々波瀾曲折もあつたが、大正十四年一月北京に於ける芳澤・カラハン調印の日ソ基本條約によつて、ソヴィエト新政權から正式の保證を受けることになり、更に其の後日ソ兩國當事者間に、新日露漁業條約の締結交渉が具體化して、昭和三年一月には新に之が正式の調印を見る様になつた。斯くて其の後時には出漁諸條件に關して、日ソ兩國の對立があり、或は急にソヴィエト側がカムチャツカ漁業に進出を試みて、ソ聯經營の漁區を一躍數倍に増加する等、ソ聯の我が方に對する壓迫は次第に加はつて、露領漁業問題は屢々兩國の國交問題に迄發展せんとする勢ひであつたが、摩擦を繰返しながらも、年々出漁は續けられて來たのである。

所が昭和三年締結の日ソ漁業條約は、昭和十一年五月二十二日を以て満期となつた。そこで日本では既得權擁護の上から、其の以前に於て安定漁區の期限延長の條文化、邦人漁業權の確立を内容とする新漁業條約の締結を期し、我が太田駐露大使と、外務人民委員部のストモニャコフとの間に折衝を重ね、幾多の曲折を経て愈々昭和十一年十月二十日に

は、モスクワに於て正式調印の運びに迄漕ぎつけたのであるが、折も折、たま／＼日獨防共協定成立の内報が、露都に達したので、彼は俄に正式調印を拒み、容易に受諾の色を示さない。爾來今日迄止むなく日本は、一ヶ年間有効の暫定協約を結ぶこと幾回、辛うじて無條約狀態の危機を脱し、不安の間に出漁を續けて居る現狀で、同胞の尊き血潮を濺いで獲得したる此の重大權益も、今や其の前途は頗る暗澹たるものである。

【北樺太の石油・石炭利權】

北樺太石油會社の石油利權と、北樺太鑛業會社の石炭利權とは、大正十四年に締結の日ソ基本條約に基いて、ソ聯政府と幾度折衝の末獲得されたもので、企業の形式は私人的株式會社であるが、實質的には何れも國家、乃至半國家的の企業である。而して此の二大企業は、共に確乎たる企業組織の上に經營が進められ、存立十年の間に可なり顯著な成果を收め來つたもので、殊に北樺太の石油利權は、我が國の石油經濟に極めて重大なる役割を演ずる様になつたのである。

所が之に對してもソ聯邦は、日獨防共協定の成立を楯に不當な壓迫を加へ、數々の不信不法の行爲を重ねて、事業を殆んど假死狀態に陥れて仕舞つて居る。現に昭和十三年の如きは、

(1)、日本側企業會社たる北樺太石油會社が利權契約の規定によつて、同年夏季のソ聯人季節労働者三八八〇人を要求したのに對し、ソ聯側は僅に九〇五名しか提供せず、しかも此の季節(夏季だけ)労働者は七月早々引渡さるべきであるのに、九月中旬に至つて漸く送附して來たので、十月一日の解雇期日までには殊んど日數がなく、全く無意義に終つてしまつた。

(2)、日本労働者は契約上、一五〇九名を送り込み得る權利を持つて居たにも拘らず、ソ聯側は僅に四〇〇名分の査證を許可したのみで、其の他に對しては之を許可しなかつた。

(3)、利權契約上従業員と其の家族に對しては、食糧品及び其の他の生活必需品の、無關稅輸入が認められて居り、其の總

額は最小限度二六〇萬圓となつて居るが、ソ聯が許可したのは僅に約一七四萬圓であつた。之が爲めに従業員の生活を脅かす重大問題を惹起し、其の中には従業員の保健上に絶対必要とする、藥品、醫療器具などすらあつた。

此の外現地官憲は青少年を使喚して、非人道行爲を敢てすること枚擧に遑あらず、一方では兩會社の社員達を、無實の理由によつて禁足、逮捕、監禁或は起訴して、桎梏の苦しみを加へて憚らない。之が爲めに同年の原油搬出量は僅に十六萬噸に過ぎず、昭和七、八年頃最盛時の約三十一萬噸なりに比して、略ぼ半減と云ふ不振の状態で、爾來ソ聯側の不當なる壓迫の爲めに採油量は年々低下の一途を辿り、今や事業停止の一步手前とも云ふべき悲境に陥つて居る。

當業者は尼港に無限の恨みを呑んで相果てた尊き同胞の靈に對し、又我が非常時に於ける燃料國策の重責遂行の大義の爲めに、飽く迄ソ聯の暴壓に對し、丸腰で闘ふ決意を以て隱忍努めて居るのであるが、條約を無視し、交渉を斥け、惡意に満ちた妨害を繰返して平然たるソ聯の傲慢なる態度こそ、誠に憎みても餘りあるものである。

更に極東日ソ關係に於て見逃すことの出来ないものは、滿ソ國境に於けるソ聯邦の軍備擴張による脅威である。從來極東露領の赤軍は歩兵三個師團と騎兵三個旅團であつたが、滿洲事變後は急に歐露から兵力を増派し、最近に於ける現有勢力は歩兵、騎兵、裝甲兵團等合せて約四十個師團、實に四十餘萬の軍隊を沿海州兵團(浦鹽市、ヲロシロフスク市を中心として東部國境に駐屯)、アムール兵團(哈府市、ブラゴエ市を中心にして北部國境の黒龍江に沿うて駐屯)、ザバイカル兵團(チタ市を中心にして滿ソ西部國境に駐屯)の三兵團に分つて、バイカル湖以東の地域に配備し、其の裝備も著しく改善せられて、特に歩・騎兵師團には機械化部隊が十分に配備されて居る。又飛行機、戰車等も各一五〇〇臺を有して、殊に飛行機の如きは搭載

量約七噸、航續距離二、五〇〇浬に達する超重爆撃機が數百臺にも上り、極東に於ける制空權獲得の野望を、着々實現せんとしつゝある。

尙ほ其の上滿洲國との國境線一帯に亘つて、最新式のベント式築城法によるトーチカ陣地が、數百ヶ所も構築せられて、一觸即發の危険を連ねて居るし、又一方では、赤軍除隊兵の團隊武裝移民が行はれ、或は浦鹽要塞の修覆、同船渠の修理、潜水艦の建造等の如き、東洋平和を攪亂する怖るべき軍事的施設も、着々進められて居る。何れも單なる防禦的施設と見るには、餘りに大規模なもので、勿論日本を對象としたる攻撃的施設であることは疑ふ餘地がない。

更にまたソ聯の北洋航路本部では、昭和十二年以來北極海の開發計畫を樹て、北海のムルマンスク要港と極東の浦鹽軍港とを結ぶ、東亞連絡航路の完全に邁進して居るが、此の計畫が完成の曉には、歐露のソ聯バルチック艦隊と、極東太平洋艦隊との北極海經由合同が可能となり、極東に於けるソ聯の軍備は著しく増大する結果となる。

今次の支那事變が勃發するや、ソ聯當局は之を以て日本の軍事的能力、並びに全般的國力の消耗と、支那の赤化の爲めに絶好の機會なりと考へ、此の目的を達成する爲めに、日支の抗爭を努めて長期戦に延長せしめることを期して、武器、飛行士、共產黨員を續々支那に送ると同時に、其の側面工作として滿ソ、外蒙國境に於て日本牽制の軍事行動を採るべく、其の機會を握るに汲々として居た。之が爲めに即ち昭和

十三年の七月には、ソ聯兵が俄にソ満東部國境の張鼓峯に不法侵入を敢行し、勇猛果敢な皇軍の進撃となつて、敵の死傷約五千、我が軍亦約九百名の死傷者を出したる不法越境事件があり、次いで昭和十四年五月には外蒙ソ聯の大軍がホロンバイルの草原に大舉侵入し來り、暴戻驕慢言語に絶するものあり、爾來五ヶ月の長きに亘つて皇軍の出勤となり、連日壯烈なる空中戦、勇猛果敢なる地上戦が繰返へされて、猛攻よく頑敵を潰滅せしめて遠く國境線外に撃攘したるも、忠勇なる皇軍將兵の死傷實に一萬八千を算したる、誠に痛憤斷腸の慘劇ノモンハンの事件が惹起された。之等は其の後幾度かの外交接衝の結果、停戦協定の成立によつて一應の片はついたが、緊迫せる極東日ソの關係は、彼が東亞進出の野望を棄てざる限り、決して平和的に解決さるべきものではない。

更にソ聯の侵略は獨り武力的、政治的勢力範圍の擴張のみに止まらず、寧ろより恐るべき思想的侵略のあつたことを忘れてならぬ。現在のソ聯邦當局はソヴェエト政權樹立當初の様な世界革命運動を一先づ斷念し、ソ聯邦自體を對象とする一國革命主義に轉換して居るが、然し此の革命方式の變更は、單にヨーロッパの諸國に對する赤化政策の積極的推進を停止したと云ふだけで、極東方面に對しては支那は勿論、或は印度方面でもイラン方面でも、乗ずべき何等かの間隙さえあれば、直ちに赤色ルートの進出を圖らんとして虎視眈々たる状態である。

事實ヨーロッパに於ても自ら平地に波瀾を起す様な積極的な行動は避けて居るが、乗ずべき機會さえあ

ればソヴェエト勢圏伸張の積極策を講ずることに、聊かも躊躇するものではない。現に今次の歐洲戦亂を渡り船と、先づ北ポーランドに赤衛軍を進めて之が分割領有を斷行し、更に魔手をバルチック沿海諸國に伸べて之を制覇し、又バルカンへの進出を目指して強引な侵略を續けて居る。

而して此のソ聯邦の思想侵略は、恐るべき潜行性、浸透性を具備する意味に於て、極度に危険視さるべきものである。然もかゝる思想的侵略はやゝもすれば武力的侵略行動を伴ひ、兩々相俟つて推進されるものであるだけに、特に切實なる脅威を感ぜしめられる。如何に守りを固くして、アジアの北邊に連亘するソ聯邦との國境線上に赤軍や外蒙軍の越境を阻止し得たりとするも、赤色思想の流入浸透を防ぎ得ざれば、新東亞建設の大業は到底完遂されるものではない。

吾等日本國民は、新東亞建設の大業樹立を妨碍せんとする之等の不當なる壓迫脅威に對して、宜しく常に不斷の覺悟と周到なる準備を怠つてはならぬのである。

大東亞地理精説 (終)

昭和拾六年四月十五日印刷
昭和拾六年四月二十日發行



大東亞地理精説

正價金三圓八拾錢

著作者 栗原寅治郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行者 阪本眞三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷者 寺井藤左工門

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 大日本印刷株式會社

發行所

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
振替貯金口座東京八七貳番

大同館書店

（大 同 館 出 版 圖 書 時 局 參 考 必 讀 書 目 錄）

◇長井正治先生新著 〔四六列最上製本 正價金貳圓五拾錢 送料金十四錢〕（國史教授の絶好資料）

少年國史上の外交關係（刊新最）

のであつて古來一貫せる外交史を明かにすることによつて國運發展の跡を尋ね、殊に現今の國際情勢に對する我國の地位を詳かに論じた。其編述に當りては一章毎に纏りたる體裁を具へたと共に、特に全卷を通じて系統脈絡を持つことに留意した。我が國國民の活動の跡を偲ぶこととした。（著者識）

【内容目次】 上代の海外交通—神功皇后—大陸文化の輸入と歸化人—朝鮮半島の變遷—佛敎の傳來—聖德太子と遣隋使—半島の交通—歐羅巴人の來航—豊臣秀吉の朝鮮征伐—キリスト敎の傳播—歐羅巴人との通商—邦人の海外渡航—キリスト敎の禁止—と島原の亂—鎖國時代と政策の利害—世界の形勢と沿海の警備—ペリーの來朝—日清條約の締結—尊王攘夷—明治維新—征韓論—大戦と我國—滿洲事變—海軍軍縮會議—世界の現状と帝國の將來—

- 芦間 圭著 ●少年史傳 **日露戰爭物語** 〔上卷〕 日露戰爭の原因から經過の結果までそれは詳し過ぎて、程詳細に説きしもので、これ以上の書は無しと稱して過言にあらず切に一讀をすむ。 正價金貳圓 送料十四錢
- 芦間 圭著 ●少年史傳 **日露戰爭物語** 〔下卷〕 正價金貳圓 送料十四錢
- 山崎信教著 ●少年史傳 **滿洲事變並上海事變** 難かしい事件を平易明瞭に説きし理想の好著。 正價金貳圓 送料十四錢
- 山崎信教著 ●叢書 **印度の地理歴史** 印度の全貌及印度の概観を常識的に知り充分に理解し得る好著である。 正價金貳圓 送料十四錢
- 武田 熙著 ●支那革命と孫文主義 現代支那を知らんと欲せば本書を見よ。支那に關する質問に解答を與へるの爲に實に恰好の書である。 金貳圓八拾錢 送料十四錢
- 滋賀 貞著 ●世界大戰史概説 世界大戰を知るに實に恰好の書である。 金貳圓八拾錢 送料十四錢
- 滋賀 貞著 ●大戰後の世界史 大戰後の世界の史實に附て本書の如く平易明快に説きしものは他に一冊もなし。現下何人も必讀の要書。 金貳圓五拾錢 送料廿二錢

書要考參の上究研史歴

- 奥間徳一著 ●大日本國號の研究 廿有餘の我國號に附て其由來名義國體國民性の關係を周到に考證説明す。 正價金貳圓 送料十四錢
- 新屋敷幸繁 ●古事記の鑑賞 此一冊の中に古事記の全内容を盛り讀後古事記校異集成 全卷を見通したと同じ効果を擧げ様と苦心の書。 金壹圓八拾錢 送料十四錢
- 加藤玄智閣 ●古訓古事記 宣長の古訓古事記を分段分節し研究上校註 至便な計り尙各大家の訓話をも詳記。 金貳圓五拾錢 送料十四錢
- 田井嘉藤次 ●日本闕史時代の研究 讀みゆく儘に興味の盡きない日本の太古史各位の一讀希ふ。 正價金貳圓 送料十四錢
- 栗山周一著 ●假名の日本書紀 廿餘種の異本を参照して成りし書で内容漢字交りに註釋を附す。〔上卷〕金參圓五拾錢 〔下卷〕金參圓五拾錢
- 帝大教授 植松 安著 ●新井白石著讀史餘論 國史の根本資料で山陽の日本外史も本書に負ふ所多し。〔拾四版〕 正價金貳圓 送料十四錢
- 大同館藏版 井原 儀著 ●徳川時代通史 千三百頁の大冊で内容充實徳川三百年間の事柄は一切網羅した重要寶典。〔參版〕 金七圓五拾錢 送料三十錢
- 武田完二著 ●趣味江戸城大奥秘史 將軍の私生活並其間關係を中心とし赤裸々に描破した面白き讀物。 金貳圓五拾錢 送料廿二錢
- 大久保龍著 ●徳川光圀と水戸學 光圀卿とそこに培まれた水戸學を説いて本領を發揮躍動せしむ好評の書。 金壹圓八拾錢 送料十四錢
- 小林 博著 ●趣味の幕末秘史 佐幕諸藩の史料を引き動王士禎の飛躍に新撰組の活動を配し大衆的筆致で樂に讀む。 金貳圓八拾錢 送料廿二錢
- 小林 博著 ●大阪城悲劇の真相 専門史家の學說の上に立脚し考證論斷の正確史眼探究の透徹は定評の書。 正價金貳圓 送料十四錢
- 濱田壽郎著 ●和氣清麻呂の忠烈 日月と光を競ふ和氣公の物語である。一讀光輝ある國史の正跡を知得せよ。 金壹圓八拾錢 送料十四錢
- 松木幹雄著 ●弓削道鏡傳 奈良朝怪奇の秘史を忌憚なく解剖せるもので彼れを皇胤とする考證をも掲ぐ天下の一品の出版書。 正價金貳圓 送料十四錢
- 武田完二著 ●豊太閤出世録 正史記録に據て成れる太閤記此一冊で豊太閤の全貌を知得すべく著者の苦心に成れり。 金貳圓五拾錢 送料十四錢
- 大阪朝日記者 山名正太郎 ●思潮 **日本自殺情死紀** 古來より明治以後の自殺情死の死調及遺書絶筆集等興味多し。〔參版〕 正價金貳圓 送料十四錢
- 大阪朝日記者 山名正太郎 ●自殺に關する研究 本邦最初の自殺情死に關する社會學的的研究で戰爭と自殺等興味深し。〔再版〕 正價金貳圓 送料十四錢

（發行所）東京市神田區橋本一丁丁目參番地 大 同 館 書 店

東京市神田區 大 同 館 發 行 振替貯金口座 一ツ橋二ノ區

◇ 栗原寅治郎先生著 ◇ (地理教授上必備のものて久しく待望の書出現發賣)

地理的理法の研究

四六判最上製
美本全壹冊
三百頁箱入
正價
金貳圓
送料廿二錢

地理的理法の存在を説くもの多きも、之れを研究し之れを分類し、之れを解説して世に公にしたるものなし。本書は密接なる地人相関の交渉を闡明して地理的意識の啓蒙に資せんが爲めに、實に百三十餘の項目に亘る各級の地理的理法を擧げて一々懇切に之れが解説を加へたものにして誠に此種研究の最初の良書である。敢て一本な地理教授者研究者各學校の圖書室にすむ。
(出版以來大好評を博す)

【内容目次】第一章位置と境界に関する理法第二章地勢と人に関する理法第三章山地と人に関する理法第四章海及海岸と人に関する理法第五章交通と土地に関する理法第六章気候と土地に関する理法第七章産業と土地に関する理法第八章住民と土地に関する理法第九章産業と土地に関する理法第十章交通と土地に関する理法第十一章気候と土地に関する理法第十二章産業と土地に関する理法

栗原寅治郎 ● 教材大日本地理精説【上巻】 各級の事情を丁寧親切に敘述を加へ學習的興味を喚起等斯界の權威 味に喚起等斯界の權威 實に教授上手頃の書

栗原寅治郎 ● 教材大日本地理精説【下巻】 味に喚起等斯界の權威 實に教授上手頃の書

神田精輝著 ● 地理教授地圖及略圖描法及其取扱法 二百餘圖を挿入して詳細に説く

増版 手工染色教材精説

菊判最上製美本箱入
全壹冊二百五拾頁
正價
金貳圓八拾錢
送料廿二錢

【浅川卯一郎著】(著者の言葉)染色は實に手工教材として立派な素質をもつて居ります。染色は藝術的方面から見ても又ある爲に染料・藥品其他に附て或る程度迄の智識がなければ指導する事が出来ないといふ點であります。即ち此不便の爲に折角有益なる教材であり乍ら稍もすれば看過され勝ちになつてゐる様に見受ますので後學をも省みず本書を公にしました。

◇ 栗山周一先生著 ◇ (我等の國土に就いての知識を) (圖書中の高麗本でそして内容より得る知識を以てせば天下第一の廉價本)

最新刊 新制小學地理の勉強

最も面白く新しい地理の極め
よ正しく完成した地理の本
よ全圖の山河を眺めると
よ観察研究した結果出てくる
よ小學校の職員室で先生が
或る小學校の職員室で先生が

【尋五學年の巻】 四六判最上製美本 紙數五百六拾頁 正價 金貳圓五拾錢 送料金 十四錢

【尋六學年の巻】 四六判最上製美本 紙數五百三拾頁 正價 金貳圓五拾錢 送料金 十四錢

【外國地理の巻】 紙數三百頁箱入 正價 金壹圓五拾錢 送料金 十四錢

本書は今回圖書館協會・臺灣圖書館協會其他に優良書として推薦せられました

最新刊 現代基調 尋五の國史教授

【現代基調 尋六の國史教授】 菊判最上製四百三十頁 正價 金貳圓八拾錢 送料廿二錢

切に説き教材を解し得て餘すなく更に史實に関する著者の見解を随所に織込み、現代から見た國史回想の事歴を豊富に附載紹介する者等の熱誠あふる、心をこの一巻に聴け

三浦辰次著 ● 尋常國史と受験戰術 受験準備には何を爲すべきかを明確適確に指示するものである 四六判洋裝三百頁 送料十四錢

東京市神田區 大田館發行 座口金貯替振 番貳七八京東

| |
|-----|
| 909 |
| 114 |

終